

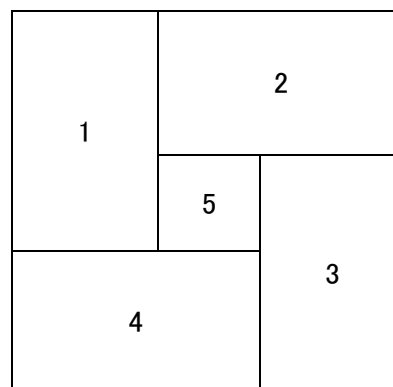
令和 7 年度
自然生態系保全モニタリング
調査報告書



山形県環境科学研究センター
令和 8 年 3 月

表紙写真説明

- 1 ミヤマフタバラン (絶滅危惧ⅠA類)
- 2 クロブシヒョウタンボク (絶滅危惧ⅠA類)
- 3 カラフトイチヤクソウ (絶滅危惧ⅠA類)
- 4 チシマヒカゲノカズラ (絶滅危惧ⅠA類)
- 5 ユキワリコザクラ (絶滅危惧ⅠA類)



裏表紙写真説明

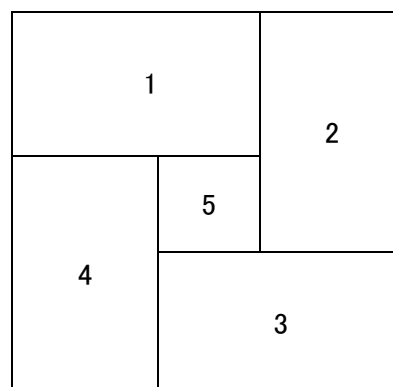
- 1 ホンコルリクワガタ
- 2 コウホネネクイハムシ (絶滅危惧Ⅱ類)
- 3 ジムグリ (情報不足)
- 4 ツマジロウラジャノメ
- 5 ハッチョウトンボ (準絶滅危惧)

※写真1

写真提供 (写真撮影) 横倉 明氏

※写真2

写真提供 (写真撮影) 畠中裕之氏



() は県のカテゴリー区分

令和7年度自然生態系保全モニタリング調査報告書

目 次

I 自然生態系保全モニタリング調査の概要

II 調査報告書

生態系区分

1 大山岳	：蔵王連峰（山形市・上山市）	…… P 1
2 中小山岳	：雁戸山（山形市）	…… P 45
3 湿原・湿地	：谷地幅湿原（鶴岡市）	…… P 65
4 草地・風穴	：山形空港（東根市）	…… P 77
5 湖沼・ため池	：鳥海山麓湖沼群（酒田市、遊佐町）	…… P 89

I 自然生態系保全モニタリング調査の概要

1 調査の背景及び進め方について

山形県では、県内の生物多様性を保全するとともに、それらがもたらす恵みを将来の世代にわたって享受し、持続的に活用していく自然生態系保全を目的の一つとして、令和3年3月に山形県第4次環境計画を策定している。

本調査はこの計画に基づき、森林生態系をはじめとする自然環境について、動植物の生息・生育動向などの変化を、生態系区分（大山岳、中小山岳、河川・溪流、湿原・湿地、草地・風穴、湖沼・ため池）ごとに長期的な視点でモニタリングを行い、自然環境保全対策の検討・実施に必要な基礎資料とすることを目的に実施するものである。また、本調査は平成19年度に導入した「やまがた緑環境税」を活用し実施している。

2 本調査報告書発刊の意義

これまでの調査結果から、県内に生息している多様な生き物の中には、人間の手を加えなければ絶滅してしまう生き物も多数存在することが明らかになっている。このような生き物に関する最新の情報や、具体的な調査方法と保全対策を広く世の中に発信することで、生き物やその生息環境の保全に対する関心を深め、また今後の調査や保全活動の発展に役立てるため、報告書を発刊するものである。

3 調査の概要

(1) 調査対象区域

県内一円

(2) 主な調査項目

ア 動植物相（主に植物や昆虫の種類）

イ 絶滅危惧種などの生息状況

(3) 調査体制

調査は、自然環境の保全を担当する県みどり自然課が計画し、県環境科学研究センターが主体となって行う。また、調査には専門的な知識を要することから、県内において長年にわたり動植物の調査研究に携わっている、各分野の専門家に協力を依頼して実施している。なお、調査地への立入りに際しては、事前に地元市町村などを通じて関係者に周知するとともに、法規制のある箇所については、関係機関の許可を得たうえで実施している。

(4) 報告書の構成概要

ア 調査趣旨

イ 調査地の概要

ウ 調査日、調査箇所及び調査者

エ 調査方法

オ 調査結果

カ まとめ

キ 調査時の写真

ク 引用・参考文献

(5) 令和7年度の主な調査者、同定者

氏名	所属団体他	担当分野
沢 和浩	フロラ山形事務局長、環境省第5次レッドリスト主任調査員	植物
横倉 明	山形昆虫同好会事務局長	昆虫等
畠中 裕之	チョウ類保全協会会員、鳥海山山岳ガイド	昆虫等
白壁 洋子	フロラ山形会員、森の仲間たち代表	植物
佐竹 恵一	フロラ山形副会長	植物
笹渕 健市	山形県環境科学研究センター 所長	
櫛田 博郎	山形県環境科学研究センター 主任専門研究員	
新藤 道人	山形県環境科学研究センター 主任専門研究員	
辻 浩子	山形県環境科学研究センター 自然環境担当	

*所属は令和8年3月現在

調査結果及びまとめについては、調査者・同定者が執筆を担当している。

(6) 報告書作成に当たっての留意点

調査の結果、多くの絶滅危惧種の生息情報を得ることができたが、これらの種が絶滅危惧種に至った原因として、盗掘・採取によるものが多く見受けられることを考慮して、生息地の情報を非公表とする。

(7) 絶滅及び絶滅危惧のカテゴリー区分

本報告書の絶滅危惧種に関する表記については、「レッドデータブックやまがた」で定めた「絶滅 (EX)」から「絶滅の恐れのある地域個体群 (LP)」までのカテゴリー区分と定義は同じものである。なお、「絶滅危惧種」とは「レッドデータブックやまがた」では絶滅危惧 I 類 (CR・EN) と絶滅危惧 II 類 (VU) を意味するが、本報告書では全てのカテゴリーを絶滅危惧種として取り扱う。

絶滅危惧種カテゴリー区分表

山形県カテゴリー	定義
絶滅 (EX)	すでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 (EW)	飼育・栽培下でのみ存続している種
絶滅危惧 I A 類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧 I B 類 (EN)	I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧 II 類 (VU)	絶滅の危険が増大している種 (現在の状態をもたらした圧迫原因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの)
準絶滅危惧 (NT)	存続基盤が脆弱な種 (現時点で絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの)
情報不足 (DD)	評価するだけの情報が不足している種
絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	地域的に孤立している個体群で、絶滅の恐れが高いもの

※「レッドデータブックやまがた」に記載のない種でも、生息する地域・地区により、その特性などから分布限界、少ない生息数、珍しい種などを「注目すべき種」として記載する。

Ⅱ 調査報告書

1 大山岳 蔵王連峰

(1) 調査趣旨

蔵王連峰に関する本格的な調査は、1982年から3年間行われた山形県総合学術調査（以下「学術調査」と記載）「蔵王連峰」が最初である。当センターでも、2008年及び2016年に貴重な動植物の分布状況について調査を実施している。今回、その調査から年月が経過していることから、調査当時の貴重な動植物の分布状況に変化が見られるか把握することを目的に地蔵山、熊野岳、蔵王山系の中腹、御田ノ神湿原、イロハ沼、坊平高原にて調査を実施した。

(2) 調査地の概要

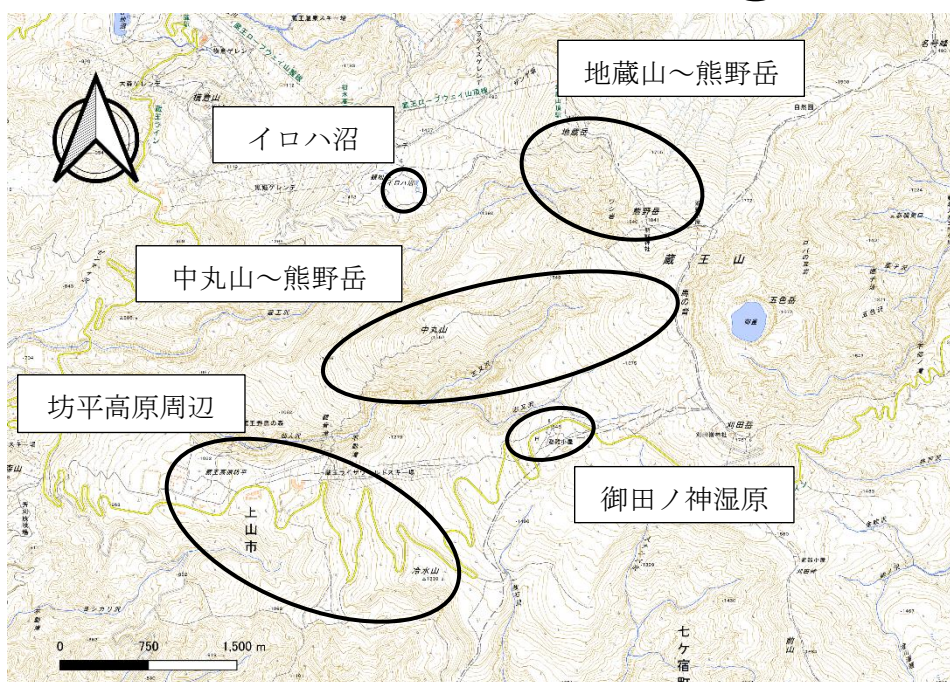
蔵王連峰は、山形県と宮城県の間境に位置する奥羽山脈の活火山群である。最高峰の熊野岳（1841m）をはじめ、刈田岳、地蔵岳などの山々で構成され、蔵王国立公園として指定されている。また、エメラルドグリーンに輝く火山湖の「御釜」や、日本海の季節風とオオシラビソが作り出す「樹氷」などは観光のスポットとなっている。

植生分布については、標高1400m付近には、樹氷を形成するオオシラビソの樹林帯が広がり、また火山活動による厳しい環境に適応したコマクサなどの高山植物を見ることができる。

動物分布については、ニホンカモシカやオコジョなどの哺乳類が生息しており、また長距離を移動するアサギマダラの飛来地となっている。

<調査箇所位置図>

○ 調査範囲



(3) 調査日、調査箇所及び調査者

調査は以下のとおり実施した。

動物相

調査日 2025年6月13日、調査箇所 蔵王山系の中腹

調査者 横倉 明

動物（昆虫等）相

調査日 2025年6月27日、調査箇所 蔵王山系の中腹（昆虫トラップ設置）

調査者 横倉 明、櫛田博郎、新藤道人

植物相・動物（昆虫等）相

調査日 2025年7月3日、調査箇所 御田ノ神湿原、蔵王山系の中腹

（昆虫トラップ回収）

調査者 沢 和浩、佐竹恵一、横倉 明、笹渕健市、櫛田博郎、新藤道人、辻 浩子

（御田ノ神湿原：レッドデータ改訂調査の調査員同行）

動物（昆虫等）相

調査日 2025年7月9日、調査箇所 熊野岳周辺（昆虫トラップ設置）

調査者 横倉 明、櫛田博郎、新藤道人

植物相・動物（昆虫等）相

調査日 2025年7月11日、調査箇所 地蔵山、熊野岳、イロハ沼周辺

調査者 沢 和浩、佐竹恵一、横倉 明、櫛田博郎、新藤道人、辻 浩子

植物相

調査日 2025年7月13日（7月9日下見）、調査箇所 熊野岳、御田ノ神湿原周辺

フロラ山形 植物分類講座

植物相

調査日 2025年7月17日、調査箇所 中丸山、熊野岳

調査者 沢 和浩、佐竹恵一、櫛田博郎、辻 浩子

動物（昆虫等）相

調査日 2025年7月17日、調査箇所 熊野岳、坊平高原周辺

（熊野岳 昆虫トラップ回収）

調査者 横倉 明、笹渕健市、新藤道人

植物相

調査日 2025年8月2日、調査箇所 坊平高原周辺

山形県立自然博物館 植物分類の基礎講座 講師：沢 和浩

植物相・動物（昆虫等）相

調査日 2025年9月25日、調査箇所 御田ノ神湿原、坊平高原周辺

調査者 沢 和浩、佐竹恵一、櫛田博郎、辻 浩子

（4）調査方法

① 植物相

1982年から1984年まで行われた学術調査「蔵王連峰」や2008、2016年に当センターで実施したモニタリング調査の結果を踏まえながら、その後の変化を調べるため、樹林帯、登山道、沢沿い及び湿原の周辺の種を調査し、改めて植物目録を作成した。併せて、植物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を確認した。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については採取して、後日同定を行った。

② 動物（昆虫等）相

1982年から1984年まで行われた学術調査「蔵王連峰」や2016年に当センターで実施したモニタリング調査の結果を踏まえながら、その後の変化を調べるため、樹林帯、登山道、沢沿い及び湿原などを踏査し、昆虫を中心に捕虫網を使った捕獲調査を行った。また、ベイトトラップによる調査を行った。その他の種については目視、鳴き声による確認を行った。

確認できた種について目録を作成し、動物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を明らかにした。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については持ち帰り、後日同定を行った。

（5）調査結果

ア 植物相

① 御田ノ神湿原周辺

確認されたシダ植物は6種、シダ植物以外の維管束植物は83種である（表-1参照）。うち絶滅危惧種、注目すべき種及び前回調査時に確認された絶滅危惧種は以下のとおりである（（7）調査時の写真参照）。

○絶滅危惧ⅠA類（CR）

チシマヒカゲノカズラ、カラフトイチャクソウ

○絶滅危惧ⅠB類（EN）

サワラン

○絶滅危惧Ⅱ類（VU）

ベニバナイチャクソウ

○準絶滅危惧（NT）

ザオウアザミ

○その他の注目すべき種

ミヤマトキシソウ

○2008年に当センターで実施した調査で生育が確認された絶滅危惧種
チシマヒカゲノカズラ (CR)、サワラン (EN)、トキソウ (VU)

② 蔵王山系の中腹

確認されたシダ植物は16種、シダ植物以外の維管束植物は48種である(表-1参照)。うち絶滅危惧種及び前回調査時に確認された絶滅危惧種は以下のとおりである((7)調査時の写真参照)。

○絶滅危惧IA類 (CR)

オキナグサ

○絶滅危惧IB類 (EN)

テイネニガクサ、アズマギク

○絶滅危惧II類 (VU)

ベニバナイチヤクソウ

○2016年に当センターで実施した調査で生育が確認された絶滅危惧種等

オキナグサ (CR)、アズマギク (EN)、ベニバナイチヤクソウ (VU)、カキラン (NT)

なお、今回の調査で、カキランは確認されなかった。

③ 坊平高原周辺

確認されたシダ植物は22種、シダ植物以外の維管束植物は114種である(表-1参照)。うち絶滅危惧種及び注目すべき種は以下のとおりである((7)調査時の写真参照)。

○絶滅危惧IA類 (CR)

ナツエビネ

○絶滅危惧IB類 (EN)

ヤナギラン、アズマギク

○絶滅危惧II類 (VU)

チョウセンゴミシ、リンドウ、スズサイコ、オミナエシ

○その他の注目すべき種

オオキヌタソウ

④ 地蔵山から熊野岳周辺

確認されたシダ植物は27種、シダ植物以外の維管束植物は70種である(表-2参照)。うち絶滅危惧種、注目すべき種及び前回調査時に確認された絶滅危惧種は以下のとおりである((7)調査時の写真参照)。

○絶滅危惧ⅠA類 (CR)
ミヤマフタバラン、タカネトンボ、カラフトイチヤクソウ

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
ヒナガリヤス、コマクサ、イソツツジ

○準絶滅危惧 (NT)
ザオウアザミ

○その他の注目すべき種
ミヤマトキシウ

○2016年に当センターで実施した調査で生育が確認された絶滅危惧種
タカネトンボ (CR)、カラフトイチヤクソウ (CR)、ヒナガリヤス (VU)、ヤマ
トキシウ (VU)、コマクサ (VU)、イソツツジ (VU)、ザオウアザミ (NT)

⑤ イロハ沼周辺

確認された維管束植物は18種である(表-2参照)。うち絶滅危惧種、注目すべき種及び前回調査時に確認された絶滅危惧種は以下のとおりである((7)調査時の写真参照)。

○絶滅危惧ⅠB類 (EN)
サワラン、タテヤマリンドウ

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
イソツツジ

○その他の注目すべき種
ミヤマトキシウ

○2008年に当センターで実施した調査で生育が確認された絶滅危惧種
サワラン (EN)、トキシウ (VU)

⑥ 中丸山から熊野岳周辺

確認されたシダ植物は31種、シダ植物以外の維管束植物は83種である(表-3参照)。うち絶滅危惧種及び注目すべき種は以下のとおりである((7)調査時の写真参照)。

○絶滅危惧ⅠA類 (CR)
エゾスズラン、ミヤマフタバラン、タカネトンボ、カラフトイチヤクソウ

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
コマクサ、テングノコヅチ

○準絶滅危惧 (NT)
ザオウアザミ

○その他の注目すべき種

シロウマイタチシダ（蔵王山系初記録）

⑦ 絶滅危惧種と注目すべき種について

●チシマヒカゲノカズラ（ヒカゲノカズラ科）*Lycopodium alpinum* L.

（県 CR、国 EN）

チシマヒカゲノカズラは北半球で最も高緯度まで分布を広げているシダ植物のひとつである。日本での分布は、北海道、本州（福井県以東）である。県内では内陸中西部と内陸中央部に分布している。その中の1か所が今回の調査地である。

今回の調査では、少し離れた場所に自生しているチシマヒカゲノカズラを確認することができた。それぞれの場所のチシマヒカゲノカズラの周りには、ハクサンシャクナゲ、ミヤマネズ、アカミノイヌツゲ、ハッコウダゴヨウ、オオバショリマなどが自生していた。さらに、上記の自生地のおすぐ近くの湿原にも、ちょうどチングルマの赤くなった葉と隣り合わせるようにして、チシマヒカゲノカズラが自生していた。

チシマヒカゲノカズラはタカネヒカゲノカズラと区別が紛らわしいが、チシマヒカゲノカズラは葉が4列に並ぶので区別できる。

●エゾスズラン（ラン科）*Epipactis papillosa* Franch. et Sav.（県 CR、国一）

浜辺のクロマツ林内に生えるハマカキランは別変種とされてきたが、最近の遺伝系統解析ではエゾスズランと同じものとされている。したがって、本種の分布範囲は浜辺の砂浜から亜高山帯の林縁までと幅広い環境に分布することになる。

本調査地では沢沿いの斜面で1個体のみ確認した。本種は単独で生育することが多く、カキランのように群生することはない。

●ミヤマフタバラン（ラン科）*Neottia nipponica* (Makino) Szlach.（県 CR、国一）

亜高山帯オオシラビソの林縁部や高山帯ハイマツ樹林下に生育する。県内では蔵王山系、吾妻山系と村山葉山で記録がある。今回の調査でハイマツの樹林下に多く生育することが明らかにされたのは、調査の成果であり、蔵王山系で合計100個体程生育するのが確認された。

なお、今回の調査でも、近似種であるコフタバランの発見に努めたが、確認できなかった。別の調査において蔵王山系の他の場所で確認することができた。

●タカネトンボ（ラン科）*Platanthera chorisiana* (Cham.) Rehb. f.（県 CR、国 VU）

県内の高山である鳥海山、月山、朝日山系、飯豊山系、吾妻山系にも記録があるが、生育個体数はいずれの産地も10～20個体程度で、今回の調査では蔵王山系で合計50個体以上が確認され、県内で最大の産地であると思われることが明らかになった。

今回の調査地においては、高山帯の他の大型植物が生育しないやや湿った草地に、しばしばオノエランやホソバノキノチドリと一緒に生育している。花が咲いて

も目立たず、登山道沿いにも多いことから、踏み付けに対しては注意すべきである。

●オキナグサ（キンポウゲ科）*Pulsatilla cernua* (Thunb.) Berchtold et J. Presl（県 CR、国 VU）

低地の河川敷、土手やスキー場から亜高山帯の草地まで生育している。扇状地の氾濫原野が最大の生育環境であったが、土地造成により激減した。また管理放棄などによりヤブ化するとたちまち消滅してしまうが、空港内やスキー場といった特殊環境に適地が残されている所がある。

今回の調査地では草地で確認されたが、前回調査時に比べ 10 個体程度にまで激減しており、植生遷移により絶滅の恐れが高い。

なお、坊平高原は良い草地が維持されていたが、運動コース整備に伴う土地造成により絶滅したと思われる。

●カラフトイチャクソウ（ツツジ科）*Pyrola faurieana* Andres（県 CR、国 VU）

県内では、蔵王山系でのみ確認されている。亜高山帯から高山帯のオオシラビソやハイマツの林縁、高山草原に生育する。火山荒原から樹林帯への移行帯には特に多く見られる。近似種のマルバノイチャクソウの生育地は亜高山帯針葉樹林下で住み分けをしている。

個体数も蔵王山系の各生育地を合計すると、100 個体以上確認され安定しているが、観光客の多い一部地域では踏み付けによる影響が懸念される。

●サワラン（ラン科）*Eleorchis japonica* (A. Gray) F. Maek.（県 EN、国一）

低山地から亜高山帯の湿原に広く見られるが、低山地のものは盗掘や開発、管理放棄などによりかなり減少している。御田ノ神湿原の調査地では個体密度は高くないものの、ミヤマトキノソウとともに 50 個体程の生育が確認された。自然公園内であるものの、観光地として宣伝され、道路からも近いことから、花が目立つ開花時期に盗掘に遭いやすいと思われる。

イロハ沼湿原でも 50 個体程の生育が確認された。イロハ沼湿原には池塘が何か所か見られるが、水が干上がっている所が多く、湿原全体の乾燥化が懸念される。

●ヤナギラン（アカバナ科）*Chamaenerion angustifolium* (L.) Scop. subsp. *angustifolium*（県 EN、国一）

山地の草原に生育するが、火入れや草刈りなどの攪乱がないと生育の維持が難しい。これまで各地で記録があるが、その後の植生遷移で確認されないところが多く、現存しているのは 3 か所程度に過ぎない。坊平高原の調査地も火入れの名残と思われるが、周辺の草刈りにより維持されている。

●タテヤマリンドウ（リンドウ科）*Gentiana thunbergii* (G. Don) Griseb. var. *minor* Maxim.（県 EN、国一）

タテヤマリンドウと近似種のハルリンドウの分類は、研究者による研究途上で

あるが、少なくともハルリンドウの高山型がタテヤマリンドウではなさそうである。県内では飯豊山麓の谷地平とイロハ沼湿原の2か所で確認されているのみである。今回の調査で50個体程確認されているが、乾燥化による植生遷移で絶滅の恐れがある。

● テイネニガクサ (シソ科) *Teucrium teinense* Kudo (県 EN、国 NT)

山地の風穴周辺部の林下に見られることが多い。各地の風穴を調べる中で、確認地が増えてきたが、それぞれの生育地で個体数は多くない。今回の調査地である急斜面下部は風穴となっており、ミヤマシダ、ホソイノデといった風穴性のシダ植物と一緒に確認することができたが、個体数は10個体程度と少ない。

● アズマギク (キク科) *Erigeron thunbergii* A. Gray (県 EN、国一)

海岸の草地や里山の耕作地周辺の草地から亜高山帯の草地まで広く生育するが、里山のは耕作放棄により激減している。また、花も美しいので盗掘の対象となることが多い。

今回の調査地では草地で少数確認したが、前回調査時に比べ減少している。坊平高原の調査地においては、シバ草原に100個体程確認することができた。

● チョウセンゴミシ (マツブサ科) *Schisandra chinensis* (Turcz.) Baill.

(県 VU、国一)

山地の風穴の周辺や寒冷なガレ場林下に生育することが多く、県内では10か所程で確認されている。日当たりのよくない所では、開花せず地面を這うだけのことも多い。坊平高原の調査地においては、30個体程度が草地周辺部の低木につるを絡め、盛んに開花し結実していた。草刈り時に注意を要する。

● ヒナガリヤス (イネ科) *Calamagrostis nana* Takeda subsp. *Nana* (県 VU、国一)

本州中北部高山の乾性草地、岩礫地に生育する小型のノガリヤス属植物である。県内では唯一蔵王山系にのみ生育している。

本調査地においては、熊野岳山頂周辺で100個体程度を確認した。踏み付けやコマクサ周辺の除草の対象とされている可能性がある。

● コマクサ (ケシ科) *Dicentra peregrina* (Rudolph) Makino (県 VU、国一)

県内では蔵王山系が唯一の生育地であり、その中でも馬の背カルデラ周辺の他の植物が入り込めない火山荒原にのみ生育する。以前の登山道周辺は、観光客の踏み付けや盗掘によりかなり減少した時期もあったが、森林管理署による保全活動によりその後は安定した数を維持しているものと思われる。熊野岳の植物が入り込まない火山荒原の南斜面は、この地域内でも本種が多く見られる場所であることが確認された。

なお、月山には本来生育していないが、蔵王から移植したものが増えている状況であり、この行為も自然破壊といえるもので、他所への移植も厳に慎む必要がある。

- イソツツジ (ツツジ科) *Ledum palustre* L. subsp. *diversipilosum* (Nakai) H. Hara var. *nipponicum* Nakai (県 VU、国一)

火山の酸性土壌の湿地に好んで生育している。熊野岳北斜面の調査地においては、沢の源頭部にわずか数個体が生育しているのを確認できた。イロハ沼湿原の調査地には 20 個体程とまとまった数が見られる。

- ベニバナイチヤクソウ (ツツジ科) *Pyrola incarnata* (DC.) Fisch. ex Freyn (県 VU、国一)

亜高山帯の林床や山地の風穴で確認され、火山帯で水はけのよい場所に見られることが多いが、奥羽山系に多く、月山や鳥海山周辺ではほとんど確認できない。

御田ノ神湿原の調査地では登山道周辺に多いため、踏み付けや刈り払い時には注意を要する。また、蔵王山系の中腹の調査地においては、低木林下で 100 個体程を確認したが、今後植生遷移により減少することが想定される。

- リンドウ (リンドウ科) *Gentiana scabra* Bunge var. *buergeri* (Miq.) Maxim. ex Franch. et Sav. (県 VU、国一)

県南部の里山から山地の草地に生育するが、管理放棄によりヤブ化し生育が困難になっている所も多い。坊平高原の調査地においては、草地周辺部にわずかに見ることができた。

- テングノコヅチ (リンドウ科) *Tripterispermum japonicum* (Siebold et Zucc.) Maxim. var. *involutibile* (N. Yonez.) J. Murata (県 VU、国 NT)

近似種のツルリンドウとなかなか形態的な区別が難しい。遺伝的にもそれほど違いはなさそうである。

- スズサイコ (キョウチクトウ科) *Vincetoxicum pycnostelma* Kitag. (県 VU、国 NT)

海岸草地や里山から山地の草地に生育しているが、管理放棄によりヤブ化し生育が困難になっている所がある。坊平高原の調査地においては、シバ草地や低木林縁部に生育し、個体数も 50 個体程と割合安定している。

- オミナエシ (スイカズラ科) *Patrinia scabiosifolia* Link (県 VU、国一)

里山から山地の草地に生育するが、管理放棄によりヤブ化し生育が困難になっている所も多い。坊平高原の調査地においては、草地周辺部や林縁部で確認されるが、個体数は 10 個体程と少ない。

- ザオウアザミ (キク科) *Cirsium zawoense* Kadota (県 NT、国一)

蔵王山系の固有種である。山地帯上部から亜高山帯の針葉樹の林縁部に生育する。地蔵山周辺部には多いが、総苞片の形態がナンブアザミに近いものがあり、ナンブアザミとの交雑が疑われるものもある。

中丸山から熊野岳の調査地では、針葉樹林帯上部の沢の源頭部を中心に 30 個体

程を確認した。

●シロウマイタチシダ (オシダ科) *Dryopteris shiroumensis* Sa. Kurata et Nakam.

シロウマイタチシダは、長野と富山県境の白馬岳付近で発見されたイタチシダに似た植物である。日本での分布は本州（山形県以南・岐阜県以東）で、日本固有種である。県内での分布は、摩耶山、飯豊山系（五郎清水、石転ビ沢）、志津であったが、今回の調査地である熊野岳が新たな分布地として加わった。

シロウマイタチシダは、最下羽片の下向き第1小羽片が最大で、孢子嚢群は小羽片の中肋両側に各1列に並ぶ。包膜は円腎形で立体的である。

調査地のシロウマイタチシダの周りには、エゾメシダ、ミヤマメシダ、カラクサイノデなどが自生していた。

●ミヤマトキソウ (ラン科) *Pogonia subalpina* T. Yukawa et Y. Yamashita

2017年に新種として発表された種のため、前回(2013)の「レッドデータブックやまがた」(以下「RDB」と記載)に記載されていないが、トキソウと同等レベルの生育状況と思われることから、次期改訂RDBでは対象種の候補である。亜高山帯の湿原、雪田草原に多いが、山地帯の湿った岩場でも見られ、低山地のミズゴケ湿原に多いトキソウとは住み分けている。

本種の生育環境として、トキソウのように湿原に生えるタイプと、ヤマトキソウのように裸地状の斜面に生えるタイプがある。

御田ノ神湿原とイロハ沼の調査地は湿原に生えるタイプで、御田ノ神湿原においては、100個体程を確認できた。

熊野岳北斜面の調査地では裸地状の斜面に生えるタイプで、沢の源頭部にわずかに生育しているのを確認することができた。前回の調査でヤマトキソウとして記録されているものは本種と思われる。

サワランと同様に盗掘に注意を要する。

●オオキヌタソウ (アカネ科) *Rubia chinensis* Regel et Maack f. *mitis* (Miq.) Kitag.

ほぼ県内全域のガレ場、沢沿いの斜面などに生育するが、いずれの場所でも個体数が少ない。奥羽山脈沿いには比較的多く見られるが、どこにでもある種ではない。

本調査地では、沢に降りる斜面の登山道沿いで確認されたが、個体数は10個体程度と少ない。

(記：佐竹恵一、沢 和浩)

イ 動物 (昆虫) 相

① 御田ノ神湿原周辺

今回の調査では、昆虫類46種を確認することができた(表-4参照)。うち絶滅危惧種はなかった。

訪花性のヒメハナカミキリ類、ハナアブ類など、比較的多くの種を確認できた。

また、亜高山性の昆虫としてミヤマヒナバタ、アカガネカミキリなどを確認した。

② 蔵王山系の中腹

今回の調査では、昆虫類 37 種を確認することができた（表-4 参照）。うち絶滅危惧種はなかった。注目すべき種としてホンコルリクワガタ、コジャノメを確認した。

○注目すべき種について

●ホンコルリクワガタ（クワガタムシ科）*Platycerus acuticollis*

（別名：コルリクワガタ）

従来はコルリクワガタ一種として扱われていたが、2008 年に外部形態の特徴及び交尾器の違いにより、ホンコルリクワガタ（コルリクワガタ）、ユキグニコルリクワガタ、トウカイコルリクワガタ、ニシコルリクワガタの 4 種に分けられた。

山形県内においては、月山、朝日連峰、飯豊連峰にユキグニコルリクワガタが生息することが知られていたが、2023 年に蔵王山系で別種であるホンコルリクワガタが記録された。ホンコルリクワガタの分布域は太平洋側に集中しており、蔵王山系の日本海側の生息地は貴重な存在で、また北限地でもある。現時点では、蔵王山系でも限られた地域のみで生息が確認されているだけである。

発見されて間もないため絶滅危惧種には選定されていないが、次期のレッドデータブック改訂の際には、絶滅危惧種として扱わなければならない種である。

コルリクワガタが 4 種に分けられたことにより、従来のコルリクワガタと区別するために、最近の報告書では「ホンコルリクワガタ」として和名を使用する例が多いようである。最近の例に従った。

●コジャノメ（タテハチョウ科）*Mycalesis francisca*

2003 年の RDB では準絶滅危惧（NT）に選定されていた種であるが、その後の調査で分布域が比較的広いことが確認され、レッドリストから外れている。しかし、山形県鶴岡市が日本海側の北限地になっており、生息地も局地的であることから貴重な種であることに変わりはない。

低地から低山地にかけて生息しているが、これまで記録された高標高地は山形市西蔵王の標高 600m である。今回記録した調査地は標高 1200m で、異例の高標高の生息地である。生態的には未知の部分が多く、今後の調査を継続してゆく必要があると思われる。

③ 地蔵山から熊野岳馬の背周辺

今回の調査では、昆虫類 36 種を確認することができた（表-5、6 参照）。うち絶滅危惧種、注目すべき種及び前回調査時に確認された絶滅危惧種は以下のとお

りである。

熊野岳山頂付近と馬の背にベイトトラップを設置した。熊野岳山頂付近では半数以上が小動物により掘り起こされ、調査目的であったヒメクロオサムシは3頭確認したのみであった。馬の背のベイトトラップは全てが小動物に掘り起こされ、前回の調査で確認したチビヒサゴコメツキは確認できなかった。

熊野岳山頂の熊野岳神社の境内にてハラアカコブカミキリを確認した。

○準絶滅危惧 (NT)

ヒメクロオサムシ

○その他注目すべき種

ハラアカコブカミキリ

○2016年に当センターで実施した調査で生息が確認された絶滅危惧種

ヒメクロオサムシ (NT)、チビヒサゴコメツキ (NT)

なお、今回の調査で、チビヒサゴコメツキは確認されなかった。

○絶滅危惧種について

●ヒメクロオサムシ (オサムシ科) *Carabus opaculus shirahatai*

(県 NT、国一)

森林限界を超えた高山帯に生息し、東北地方に生息する本種は亜種になっており、チョウカイヒメクロオサムシと呼ばれるのが一般的である。山形県では鳥海山、月山、朝日連峰、飯豊連峰、蔵王山系の高山帯に生息するが、朝日連峰と飯豊連峰の情報は少ない。

蔵王山系の前回の調査では熊野岳、馬の背のベイトトラップ設置による調査で、多くの個体数が確認されたが、今回の調査では小動物によりほとんどが掘り起こされており、生息確認がやっとという状態であった。本種は肉食で夜行性なのでベイトトラップによる調査が不可欠である。

○注目すべき種について

●ハラアカコブカミキリ (カミキリムシ科) *Moehotypa diphysis*

山形県では正式には初記録となる。私信ではあるが以前の記録を伝聞により入手しており、その記録が未発表のためこのような表現となったこととお断りしておく。日本では長崎県対馬のみに生息していたが、本種の幼虫はシイタケ原木を食害する害虫として知られており、シイタケ原木と共に人為的に九州に持ち込まれ、その後分布を広げているようで、近年では関東地方までも侵入しているようである。

熊野岳神社 (1840m) で確認された理由として、晴天の日に山麓より上昇気流に乗り山頂に吹き上げられた個体と考えられる。山形県側か宮城県側かは不明であるが、山麓のシイタケ栽培地ではすでに侵入し、被害を与えている可能性も考えられ注意が必要である。

④ イロハ沼周辺

今回の調査では、昆虫類 45 種を確認することができた（表－5 参照）。うち絶滅危惧種はなかった。

高地性のハヤチネフキバッタや訪花性のヒメハナカミキリ類など、比較的多くの種が確認された。イロハ沼では調査を行った時間帯が遅く、予期されたトンボ類の生息確認ができなかったのは残念である。

⑤ 坊平高原周辺

今回の調査では、昆虫類 66 種を確認することができた（表－6 参照）。うち県の絶滅危惧種はなかったが、国の準絶滅危惧のヒメシジミを確認した。

スキー場のゲレンデに咲くアザミやヨツバヒヨドリの花に訪花するヒメシジミをはじめ、ヒョウモンチョウ類、小甲虫類、ハナアブ類など多くの昆虫類が確認された。ただし、今回の調査で生息確認の重要種として位置付けていたギンボシヒョウモンは確認できなかった。

○注目すべき種について

●ヒメシジミ（シジミチョウ科） *Plebejus argus*（県一、国 NT）

九州では絶滅、西日本でも激減している種で、国では準絶滅危惧（NT）に指定しているが、山形県では各地に多産している生息地が多く、絶滅危惧種にはなっていない。ただし、幼虫の時にアリと共生関係にあり、生息地はアリの生息に適した草丈の低い草地や路傍に限られる。

坊平高原のスキー場のゲレンデは本種の生息に最適と思われる環境であり、多数の個体が見られた。

（記：横倉 明）

ウ 動物（爬虫類）相

今回の調査では、爬虫類のジムグリ（県 DD、国一）が確認された（表－5 参照）。

●ジムグリ（ナミヘビ科） *Euprepiophis conspicillatus*（県 DD、国一）

本種は、地藏山周辺で確認された。県内全体に分布していると思われるが、主に山間部の林床に生息し、沿岸部を除き標高の低い平地では目撃例が少ない一方、標高 1000m 以上でも目撃される。

（記：榎田博郎）

（6）今後の保全対策及びまとめ

ア 植物相について

① 御田ノ神湿原周辺

○シダ植物

今回の調査では、チシマヒカゲノカズラの個体数は減少しているとは思えない。

しかし、自生地は湿原の中にあるので、踏み付けや、温暖化による湿原の乾燥化などが心配される。貴重なシダ植物であるチシマヒカゲノカズラを見守るためには、定期的なモニタリング調査が必要である。

(記：佐竹恵一)

○シダ植物以外の維管束植物

御田ノ神湿原は観光道路から近く、木道が整備されている湿原であるが、観光客も多いため、オーバーユースになりやすい。

このため、木道以外の登山道の踏み付けや水路改変により湿原の水位が低下し、乾燥化が進みヨシや低木の侵入による植生遷移が起こる可能性があり、湿原に生育するミヤマトキソウ、サワラン、ワタスゲなどに影響が大きいと思われる。

今後、湿原の乾燥化が進まないかモニタリングを続けると共に、場所によってはヨシや低木の刈り取りも必要であると思われる。

(記：沢 和浩)

② 蔵王山系の中腹

○シダ植物

高山や風穴気味の場所に特有なシダ植物が自生している。シラネワラビ、ミヤマシダ、ホソイノデ、ミヤマワラビなどである。

調査地にあるシダ植物は、自生場所が限定される大切な植物である。これらのシダ植物を保全していくためには、森林環境が安定していることが重要になってくる。そのため、定期的に森林環境を含めたモニタリング調査が必要である。

(記：佐竹恵一)

○シダ植物以外の維管束植物

ガレ場の方は低木が侵入してきており、草原性の植物が少なくなっている。植生遷移はやむを得ないという考えもできるが、希少な植物が多く見られる場所は、範囲を決めて刈り払いを続ける手段も検討すべきと思われる。

風穴については、今後気温上昇、積雪量の減少により、風穴の温度上昇が考えられることから、定期的なモニタリング調査を継続していく必要がある。

(記：沢 和浩)

③ 坊平高原周辺

坊平高原は、かつて牧畜がおこなわれ、火入れも実施されていたとの話も聞いている。そのため草地在維持され、草原性の植物も豊富であった記録がある。ムラサキ、タカサゴソウ、ヒメヒゴタイ、オカオグルマといった今では県内で絶滅したか、絶滅寸前の植物が少し昔に確かにあった。

その後、スポーツの合宿所として注目され、運動コースとして整備されて草原環境が壊されたこと、草刈りがされなくなったことにより、草原性の植物は生える場所が狭まってしまっている。このため、多くの草原性植物が消滅しており、今後定期的な草刈りが維持されることが望まれる。

(記：沢 和浩)

④ 地藏山から熊野岳周辺

○シダ植物

調査地においては、高山のシダ植物が多く自生している。オオバショリマ、タカネヒカゲノカズラ、ヒメスギラン、ミヤマワラビ、ミヤマイタチシダ、アスヒカズラ、マンネンスギ、ミヤマヘビノネゴザ、ミヤマシシガシラ、ヤマソテツなどである。この中には、登山道近くに自生しているシダ植物も数多くあるので、踏み付けなどには十分注意したいものである。さらに、沢に沿った場所にも多く自生している。

そのため、貴重な高山のシダ植物保護のためには、定期的なモニタリング調査はぜひとも必要である。

(記：佐竹恵一)

○シダ植物以外の維管束植物

この調査地は雪が比較的遅くまで残り、湿性草原や沢の源頭部の植生が維持されている場所である。とりわけ、ムシトリスミレやヒカゲノカズラ類、高山性のラン科植物は県内でも有数の多産地である。

この辺りは観光客や登山客が多く、登山道周辺の踏み付けに注意を要する。今後、積雪量の減少により高温・乾燥が懸念されることから、定期的なモニタリングを継続する必要がある。

(記：沢 和浩)

⑤ イロハ沼周辺

近くの観松平とともに観光ルートとなっており、木道が整備されている湿原であるが、観光客も多いためオーバーユースになりやすい。また、気候変動による高温・降水量の減少により、上流から水が入りにくくなってきていることから、湿原の乾燥化が進み池塘の水が干上がることが多くなっている。このため、ヨシや低木の侵入による植生遷移が進み、ミヤマトキソウ、サワラン、タテヤマリンドウなどへの影響が懸念される。

今後もモニタリングを継続し、場合によってはヨシや低木の除去も検討する必要がある。

(記：沢 和浩)

⑥ 中丸山から熊野岳周辺

○シダ植物

中丸山から熊野岳周辺には、小葉類であるヒカゲノカズラ科のシダ植物が目立つ。タカネヒカゲノカズラ、ヒカゲノカズラ、アスヒカズラ、マンネンスギなどである。これらのシダ植物は分布が限られている貴重なシダ植物である。

さらに、今回の調査で、蔵王山系では新たに発見されたシダ植物がある。シロウマイタチシダである。シロウマイタチシダの近くには、ミヤマメシダやカラクサイノデが自生していた。これらは、高山のシダ植物として重要なものである。生育環

境の変化で植生が変わることがあるので、定期的なモニタリング調査が必要である。

(記：佐竹恵一)

○シダ植物以外の維管束植物

針葉樹林帯の林縁部に希少な植物が多く見られることから、登山道の草刈り時には注意を要する。

熊野岳の南斜面の植物は、歩きやすい林縁部に希少種が見られることから、一般の人が立ち入らないようにする必要がある。

(記：沢 和浩)

イ 動物（昆虫）相について

① 御田ノ神湿原周辺

訪花性の昆虫類を多く確認できた。特に駐車場周辺や道路沿いには人為的に持ち込まれ野生化したフランスギクの花が多く、ハナアブ類など吸蜜に訪れた昆虫類を多く確認できた。

湿原での調査では、残念ながら特有の昆虫類は確認できなかった。トンボ類などの発生時期には少し早かったようで、出始めのアキアカネとオオルリボシヤンマの幼虫（ヤゴ）を確認したのみであった。高地性のミヤマヒナバタも発生初期と思われ、成虫は一頭確認したのみで、ほとんどがまだ幼虫であった。

自然観察の木道なども整備されており、自然環境は保全されているように見受けられた。

② 蔵王山系の中腹

ホンコルリクワガタの生息地である情報を事前に入手しており、予定の調査日程では発生時期を逃してしまうため、単独による調査を行った。ブナの新芽に食い込んでいるのを確認することができたが、発生域も狭く個体数も少なかった。北限地でもあり貴重な種であるので、今後の推移を見守る必要があると思われる。

ベイトトラップによるオサムシ類の調査を行ったが、目的種であるホソヒメクロオサムシは確認できなかった。減っているのかの判断が難しく、更なる調査の必要性があると思われる。

コジャノメが確認されたのは特筆すべきことである。1200mを越す高標高での記録は極めて珍しいと思われる。発生地なのか、偶産なのか、更なる調査が必要である。

他では、オサムシ類、小甲虫類、チョウ類など比較的多くの種を確認することができ、環境は保全されていると思われる。

③ 地蔵山から熊野岳馬の背周辺

今回の調査の重要な目的の一つは、熊野岳山頂付近と馬の背にベイトトラップを設置し、絶滅危惧種のヒメクロオサムシとチビヒサゴコメツキの生息状況を把握することであった。予期せぬことであったが、設置したトラップが小動物と思わ

れるものによりほとんどが掘り起こされており、まともな結果を出すことができなかった。近年の温暖化現象が高山帯の昆虫にどの程度影響を及ぼしているのか気になるところである。

他の昆虫類では、高山帯に生息しているゴミムシ類、ミヤマハンミョウ、ツヤケシハナカミキリなどは多く見られ、環境は保全されているように思われる。

今回、熊野岳山頂の神社でハラアカコブカミキリが確認されたのは、偶然が重なった結果と捉えるしかない。東北地方には生息しないはずの種が確認されたことも重要ではあるが、本種がシイタケ原木の害虫であることから、これからの分布動向に留意する必要があると思われる。注意喚起という点でも、大きな成果と考えられる。

④ イロハ沼周辺

ハナカミキリ類、ハムシ類、ハナアブ類など訪花性の昆虫類が多く見られた。注目すべき種は見られなかったが、個体数の多さから判断して環境は保全されていると思われる。

ただし、トンボ類、バッタ類については発生初期のようで、もう少し発生の適期に合わせた調査が必要と思われた。

⑤ 坊平高原周辺

今回の調査では、坊平高原でのギンボシヒョウモン（県 NT、国一）の生息確認が重要な目的であったが、残念ながら確認できなかった。本種は蔵王山系が本州の北限の産地となっており、本州亜種とされる。北海道には別亜種が生息している。

本種は蔵王山系の 1000m前後のスキー場のゲレンデに生息地していたが、4年ほど前から記録が途絶えており、絶滅が最も心配されている種である。同じ環境に生息している他ヒョウモン類は現在も健全に生息しているが、本種だけがいなくなっているのが現状である。その要因については、温暖化などの影響も考えられるが、現時点では不明である。

他の昆虫類では、草原性の環境に適応したヒメシジミ、ヒョウモンチョウ類、ヒメハナカミキリ類、ハナアブ類など多くの種が確認されており、環境は保全されていると考えられる。

（記：横倉 明）

(7) 調査時の写真

ア 植物相

① 御田ノ神湿原周辺



湿原入口



湿原の様子



湿原の様子



調査の様子



チシマヒカゲノカズラ (絶滅危惧 I A 類)



カラフトイチヤクソウ (絶滅危惧 I A 類)



サワラン (絶滅危惧 I B 類)



ベニバナイチヤクソウ (絶滅危惧Ⅱ類)



ザオウアザミ (準絶滅危惧)



ザオウアザミ (準絶滅危惧)



ミヤマトキソウ



ミヤマトキソウ



ミヤマトキソウ

② 蔵王山系の中腹



調査の様子



オキナグサ (絶滅危惧 I A 類)



テイネニガクサ (絶滅危惧 I B 類)



アズマギク (絶滅危惧 I B 類)



ベニバナイチヤクソウ (絶滅危惧 II 類)

③ 坊平高原周辺



調査地の様子



調査地の様子



ヤナギラン (絶滅危惧 I B 類)



ヤナギラン (絶滅危惧 I B 類)



アズマギク (絶滅危惧 I B 類)



チョウセンゴミシ (絶滅危惧 II 類)



リンドウ (絶滅危惧 II 類)



スズサイコ (絶滅危惧 II 類)



スズサイコ (絶滅危惧 II 類)



オミナエシ (絶滅危惧 II 類)



オオキヌタソウ

④ 地蔵山から熊野岳



調査地の様子



調査の様子



ミヤマフタバラン (絶滅危惧 I A 類)



タカネトンボ (絶滅危惧 I A 類)



カラフトイチャクソウ (絶滅危惧 I A 類)



カラフトイチャクソウ 白花



コマクサ (絶滅危惧Ⅱ類)



イツツジ (絶滅危惧Ⅱ類)



ザオウアザミ (準絶滅危惧)



オノエラン



ミヤマトキノウ



ムシトリスミレ

⑤ イロハ沼周辺



調査地の様子



調査の様子



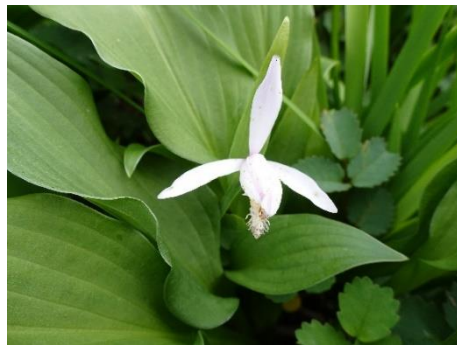
サワラン（絶滅危惧 I B 類）



タテヤマリンドウ（絶滅危惧 I B 類）



タテヤマリンドウ（絶滅危惧 I B 類）



ミヤマトキソウ

⑥ 中丸山から熊野岳周辺



調査地の様子



調査地の様子



調査の様子



調査の様子



エズスズラン
(絶滅危惧 I A 類)



ミヤマフタバラン
(絶滅危惧 I A 類)



タカネトンボ
(絶滅危惧 I A 類)



ミヤマフタバラン (絶滅危惧 I A 類)



カラフトイチヤクソウ (絶滅危惧 I A 類)



コマクサ (絶滅危惧 II 類)



テングノコヅチ (絶滅危惧 II 類)



ザオウアザミ (準絶滅危惧)



シロウマイタチシダ (蔵王山系初記録)



シロウマイタチシダ



シロウマイタチシダ



コイチヨウラン



オノエラン

イ 動物（昆虫）相

① 御田ノ神湿原周辺



アカガネカミキリ



ミヤマヒナバタ



ヒヨウモンエダシャク

② 蔵王山系の中腹



トラップ設置作業



ベイトトラップ



ホンコルリクワガタ



コジャノメ



マイマイカブリ



コブヤハズカミキリ



ツマグロヒョウモン♀



ウラギンヒョウモン

③ 地蔵山から熊野岳馬の背周辺



トラップ設置作業



ベイトトラップ



左：ヒメクロオサムシ
(準絶滅危惧)

右：コクロナガオサムシ



ミヤマハンミョウ



ハラアカコブカミキリ



コガネコメツキ



カメノコテントウ



ジムグリ (情報不足)

④ イロハ沼周辺



ヤマキマダラヒカゲ



コチャバナセセリ

⑤ 坊平高原



ヒメシジミ



オオセンチコガネ

(8) 引用・参考文献

- ・山形県総合学術調査会 (1985)、「蔵王連峰」、総合学術調査報告
- ・山形県 (2013)、「レッドデータブックやまがた絶滅危惧野生植物 2013 年改訂版」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・山形県 (2019)、「レッドデータブックやまがた 2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・山形県 (2009)、「平成 20 年度自然生態系保全モニタリング調査報告書」、山形県環境科学研究センター
- ・山形県 (2017)、「平成 28 年度自然生態系保全モニタリング調査報告書」、山形県環境科学研究センター
- ・山形県 (2018)、「やまがた百名山」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・海老原淳 (2016)、「日本産シダ植物標準図鑑 I II」、株式会社学研プラス
- ・内藤親彦・篠原明彦 (2020)、「日本産ハバチ・キバチ類図鑑」、北海道大学出版会
- ・秋田勝巳・益本仁雄 (2016)、「日本産ゴミムシダマシ大図鑑」、むし社
- ・上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (1985)、「原色日本甲虫図鑑 (II)」、保育社
- ・黒沢良彦・久保定成・佐々治寛之 (1985)、「原色日本甲虫図鑑 (III)」、保育社
- ・林匡夫・森本桂・木元新作 (1984)、「原色日本甲虫図鑑 (IV)」、保育社
- ・小林裕和・松本武 (2011)、「日本産コガネムシ上科図説第 3 巻」、昆虫文献六本脚
- ・宮尾真也矢 (2025)、「新潟県のホンコルリクワガタ」月刊むしNo.657、(有)むし社

表-1 大山岳 蔵王連峰 植物目録(2025年度)

No.	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
			御田ノ神 湿原	蔵王山系 中腹	坊平高原	県	国	
1	ヒカゲノカズラ科	チシマヒカゲノカズラ	●			CR	EN	ミヤマヒカゲノカズラ
2		エゾヒカゲノカズラ		●				
3		ヒカゲノカズラ	●	●				
4	トクサ科	スギナ	●					
5	ハナヤスリ科	エゾフユノハナワラビ			●			
6	ゼンマイ科	ゼンマイ			●			
7	コバノイシカグマ科	ワラビ		●	●			
8	イノモトソウ科	クジャクシダ		●	●			
9	ヒメシダ科	ヒメシダ			●			
10		ミヤマワラビ		●	●			
11		ミゾシダ		●	●			
12		オオバショリマ	●					
13	コウヤワラビ科	イヌガンソク			●			
14		コウヤワラビ			●			
15	シシガシラ科	シシガシラ	●		●			
16	メシダ科	カラクサイヌワラビ			●			
17		ミヤマメシダ			●			
18		ヤマイヌワラビ		●	●			
19		オオサトメシダ		●				サトメシダ×ヤマイヌワラビ
20		ヘビノネゴザ		●	●			
21		ホソバシケシダ			●			
22		ミヤマシダ		●				
23		キヨタキシダ			●			
24	オシダ科	ホソバナライシダ		●	●			
25		オシダ	●	●	●			
26		シラネワラビ		●				
27		ミヤマイタチシダ			●			
28		ホソイノデ		●	●			
29		サカゲイノデ		●	●			
30		ジュウモンジシダ		●	●			
31	マツ科	オオシラビソ	●					
32		ハッコウダゴヨウ	●					キタゴヨウ×ハイマツ
33	ヒノキ科	ミヤマネズ	●					
34	イチイ科	ハイイヌガヤ			●			
35	マツブサ科	チョウセンゴミシ			●	VU	—	
36	ウマノスズクサ科	トウゴクサイシン		●	●			
37	クスノキ科	オオバクロモジ			●			
38	チシマゼキショウ科	イワショウブ	●					
39	キンコウカ科	ネバリノギラン	●					
40		キンコウカ	●					
41	ヤマノイモ科	オニドコロ			●			
42	シュロソウ科	ショウジョウバカマ	●					
43		ツクバネソウ			●			
44		コバイケイソウ	●					
45	ユリ科	オオウバユリ			●			
46		ヤマユリ		●	●			
47		コオニユリ			●			
48		クルマユリ			●			
49		タマガワホトトギス			●			
50	ラン科	ナツエビネ			●	CR	VU	
51		ハクサンチドリ	●					
52		シロバナハクサンチドリ	●					
53		サワラン	●			EN	—	
54		オニノヤガラ			●			
55		クモキリソウ			●			
56		ミヤマトキシソウ	●					
57		ネジバナ			●			
58	キジカクシ科	ツルボ			●			
59		オオバギボウシ		●	●			
60		マイヅルソウ	●					
61		ユキザサ			●			
62		ミヤマナルコユリ			●			
63	イグサ科	イグサ	●					
64		エゾホソイ	●					
65		ミヤマホソコウガイゼキショウ	●					
66		ヌカボシソウ	●					
67	カヤツリグサ科	ショウジョウスゲ	●					
68		ニッコウハリスゲ	●					
69		コハリスゲ	●	●				
70		ミヤマカンスゲ	●					
71		ミノボロスゲ	●					
72		カワズスゲ	●					
73		ワタスゲ	●					
74		ミヤマホタルイ	●					
75		アブラガヤ			●			

No.	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
			御田ノ神 湿原	蔵王山系 中腹	坊平高原	県	国	
76	イネ科	ヤマアワ			●			
77		ススキ	●					
78		ヨシ	●					
79		ミヤマアブラススキ			●			
80	アケビ科	ミツバアケビ			●			
81	キンポウゲ科	ヤマオダマキ		●				
82		ミヤマオダマキ	●					逸出
83		ポタンヅル		●				
84		クサポタン			●			
85		トリガタハンショウヅル		●	●			
86		ミツバオウレン	●					
87		オキナグサ		●		CR	VU	
88		キツネノポタン			●			
89		アキカラマツ			●			
90	カツラ科	カツラ			●			
91	ユキノシタ科	チダケサシ			●			
92		トリアシショウマ	●					
93		ヤグルマソウ			●			
94	ベンケイソウ科	キリンソウ			●			
95	ブドウ科	ヤマブドウ			●			
96	マメ科	ヌスビトハギ			●			
97		ヤブハギ			●			
98	ニレ科	オヒョウ			●			
99	バラ科	ヤマブキショウマ	●					
100		ミヤマザクラ			●			
101		タカネザクラ	●					ミネザクラ
102		オニシモツケ		●				
103		アズキナシ			●			
104		ウワミズザクラ			●			
105		シウリザクラ			●			
106		ナワシロイチゴ			●			
107		ミヤマニガイチゴ		●	●			
108		シロバナトウウチソウ	●					
109		ワレモコウ			●			
110		チングルマ	●					
111		ナナカマド	●		●			
112	ブナ科	ブナ		●				
113	クルミ科	サワグルミ			●			
114	カバノキ科	ミヤマハンノキ	●					
115		ヤマハンノキ		●	●			
116		ダケカンバ	●		●			
117		ウダイカンバ		●	●			
118		アカシデ			●			
119		ツノハシバミ			●			
120	ドクウツギ科	ドクウツギ		●				
121	ニシキギ科	ツルウメモドキ			●			
122		コマユミ		●				
123		サワダツ		●	●			
124		ツリバナ		●				
125		ウメバチソウ	●					
126		クロヅル			●			
127	ヤナギ科	パッコヤナギ			●			
128		シロヤナギ	●					
129		ミヤマヤナギ	●	●				
130		キツネヤナギ	●	●				
131		ツガルヤナギ		●				イヌコリヤナギ×キツネヤナギ
132	スマレ科	オオタチツボスミレ		●				
133		スマレ			●			
134		ミヤマスマレ	●					
135	オトギリソウ科	イワオトギリ	●	●				
136	フウロソウ科	ゲンノショウコ			●			
137	アカバナ科	ヤナギラン			●	EN	—	
138	キブシ科	キブシ			●			
139	ムクロジ科	ナンゴクミネカエデ	●		●			
140		ヒトツバカエデ			●			
141		コミネカエデ			●			
142		ウリハダカエデ			●			
143		コハウチワカエデ			●			
144		ミネカエデ	●	●				
145		オガラバナ		●				
146	タデ科	イタドリ			●			
147		ケイタドリ	●					
148		オオイタドリ			●			
149		ウナギツカミ			●			
150	モウセンゴケ科	モウセンゴケ	●					
151	ミズキ科	ウリノキ			●			

No.	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
			御田ノ神 湿原	蔵王山系 中腹	坊平高原	県	国	
152		ゴゼンタチバナ	●					
153	アジサイ科	ノリウツギ			●			
154	サクラソウ科	オカトラノオ			●			
155		ツマトリソウ	●					
156		ヒナザクラ	●					
157	イワウメ科	イワカガミ	●					
158	マタタビ科	サルナシ			●			
159		ミヤママタタビ		●				
160	ツツジ科	ウメガサソウ			●			
161		ガンコウラン	●					
162		サラサドウダン	●					
163		ハナヒリノキ	●		●			
164		アカモノ	●					
165		シラタマノキ	●					
166		ミネズオウ	●					
167		カラフトイチヤクソウ	●			CR	VU	
168		ベニバナイチヤクソウ	●	●		VU	—	
169		イチヤクソウ			●			
170		ムラサキヤシオツツジ	●	●	●			
171		ハクサンシャクナゲ	●	●				
172		ウラジロヨウラク	●	●				
173		アクシバ			●			
174		クロウスゴ		●				
175		オオバスノキ	●		●			
176		コケモモ	●					
177	アカネ科	オオバノヨツバムグラ	●	●				
178		ヨツバムグラ			●			
179		オオキヌタソウ			●			
180	リンドウ科	リンドウ			●	VU	—	
181		エゾオヤマリンドウ	●					
182		ツルリンドウ			●			
183	キョウチクトウ科	イケマ			●			
184		スズサイコ			●	VU	NT	
185	モクセイ科	アオダモ		●				
186		ミヤマイボタ		●	●			
187	オオバコ科	ゲンバイヅル			●			国内逸出
188		クガイソウ			●			
189	シソ科	ウツボグサ		●				
190		テイネニガクサ		●		EN	NT	
191	ハエドクソウ科	ハエドクソウ			●			
192	ハマウツボ科	エゾシオガマ		●				
193	ハナйкаダ科	ハナйкаダ			●			
194	モチノキ科	ハイイヌツゲ	●	●				
195		ヒメモチ	●					
196		ツルツゲ			●			
197		アカミノイヌツゲ	●					
198	キキョウ科	ソバナ			●			
199		ツリガネニンジン			●			
200		ホタルブクロ		●				
201		タニギキョウ	●					
202	キク科	ノブキ			●			
203		オクモミジハグマ			●			
204		ヤマハハコ	●	●				
205		オトコヨモギ		●				
206		ゴマナ	●					
207		ノコンギク			●			
208		ダキバヒメアザミ			●			
209		ノアザミ		●	●			
210		オニアザミ	●	●	●			
211		ナンブアザミ			●			
212		ザオウアザミ	●		●	NT	—	
213		アズマギク		●	●	EN	—	
214		ヨツバヒヨドリ	●	●	●			
215		ミヤマコウゾリナ	●					
216		ヤナギタンポポ			●			
217		シロバナニガナ	●					
218		ハナニガナ	●					
219		タマブキ			●			
220		オオカニコウモリ			●			
221		フキ	●					
222		コウゾリナ			●			
223		ヤマニガナ			●			
224		ハンゴンソウ			●			
225		アキノキリンソウ	●		●			
226		オヤマボクチ			●			
227	ウコギ科	コシアブラ	●					

No.	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
			御田ノ神 湿原	蔵王山系 中腹	坊平高原	県	国	
228	セリ科	アマニュウ			●			
229		エゾノヨロイグサ			●			
230		ミヤマヤブニンジン			●			
231		ヤブジラミ			●			
232	ガマズミ科	ガマズミ		●				
233		オオカメノキ	●		●			
234		オオミヤマガマズミ		●	●			
235		ミヤマガマズミ			●			
236	スイカズラ科	アラゲヒョウタンボク		●	●			
237		オミナエシ			●	VU	—	
238		タニウツギ	●					
計	238		89	64	136			

【植物目録の仕様】

◎科名、和名及び配列は、主に以下によった。

新山形県野生植物目録編集委員会編集(2019).新山形県野生植物目録2019.116pp.フロラ山形

◎凡例

●: 2025年現地調査で確認した種

表-2 大山岳 蔵王連峰 植物目録(2025年度)

No.	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
			地蔵山～ 熊野岳	イロハ沼周辺	県	国	
1	ヒカゲノカズラ科	ヒメスギラン	●				
2		ホソバトウゲシバ	●				
3		ヒカゲノカズラ	●				
4		アスヒカズラ	●				
5		マンネンスギ	●				
6		タカネヒカゲノカズラ	●				
7	ゼンマイ科	ゼンマイ	●				
8	キジノオシダ科	ヤマソテツ	●				
9	イノモトソウ科	クジャクシダ	●				
10	ヒメシダ科	ミヤマワラビ	●				
11		ミゾシダ	●				
12		オオバショリマ	●				
13	コウヤワラビ科	イヌガンソク	●				
14	シシガシラ科	ミヤマシシガシラ	●				
15		シシガシラ	●				
16	メシダ科	カラクサイヌワラビ	●				
17		サトメシダ	●				
18		ミヤマメシダ	●				
19		ミヤマヘビノネゴザ	●				
20		ヤマイヌワラビ	●				
21		ヘビノネゴザ	●				
22		ウスゲミヤマシケシダ	●				
23	オシダ科	ホソバナライシダ	●				
24		オシダ	●				
25		ミヤマイタチシダ	●				
26		サカゲイノデ	●				
27		ジュウモンジシダ	●				
28	マツ科	ハッコウダゴヨウ	●				キタゴヨウ×ハイマツ
29	チシマゼキショウ科	イワショウブ		●			
30	ヒルムシロ科	フトヒルムシロ		●			
31	キンコウカ科	ネバリノギラン	●				
32		キンコウカ	●	●			
33	シュロソウ科	ショウジョウバカマ	●				
34		コバイケイソウ	●	●			
35	ラン科	ハクサンチドリ	●				
36		シロバナハクサンチドリ	●				
37		サワラン	●	●	EN	—	
38		オノエラン	●				
39		ミヤマフタバラン	●		CR	—	
40		タカネトンボ	●		CR	VU	
41		ホソバノキノチドリ	●				
42		ミヤマトキソウ	●	●			
43	キジカクシ科	マイヅルソウ	●				
44	イグサ科	ミヤマホソコウガイゼキショウ	●	●			
45	カヤツリグサ科	コタヌキラン	●				
46		カワズスゲ	●				
47		サドスゲ		●			
48		ワタスゲ		●			
49		ミヤマホタルイ		●			
50	イネ科	ヒナガリヤス	●		VU	—	
51	ケシ科	コマクサ	●		VU	—	
52	キンポウゲ科	ミツバオウレン	●				
53	ユキノシタ科	ズダヤクシュ	●				
54	バラ科	ヤマブキショウマ	●				
55		シロバナトウウチソウ	●				
56		チングルマ	●	●			
57		マルバシモツケ	●				
58	カバノキ科	ミヤマハンノキ	●				
59	ヤナギ科	シロヤナギ	●				
60		イヌコリヤナギ	●				
61		ミヤマヤナギ	●				
62		オノエヤナギ	●				
63		キツネヤナギ	●				
64		ツガルヤナギ	●				イヌコリヤナギ×キツネヤナギ
65	スミレ科	ミヤマスミレ	●				
66	オトギリソウ科	イワオトギリ	●	●			
67	ムクロジ科	ミネカエデ	●				
68	モウセンゴケ科	モウセンゴケ	●	●			
69	ミズキ科	ゴゼンタチバナ	●				
70	サクラソウ科	ツマトリソウ	●				
71		ヒナザクラ	●				
72	イワウメ科	イワカガミ	●				
73	マタタビ科	ミヤママタタビ	●				
74	ツツジ科	コメバツガザクラ	●				

No.	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
			地藏山～ 熊野岳	イロハ沼周辺	県	国	
75		ウメガサソウ	●				
76		ガンコウラン	●				
77		イワナシ	●				
78		ハナヒリノキ	●				
79		アカモノ	●				
80		シラタマノキ	●				
81		イソツツジ	●	●	VU	—	
82		ミネズオウ	●				
83		ギンリョウソウ	●				
84		アオノツガザクラ	●				
85		カラフトイチヤクソウ	●		CR	VU	
86		マルバノイチヤクソウ		●			
87		ハクサンシャクナゲ	●				
88		ウラジロヨウラク	●				
89		クロウスゴ	●				
90		オオバスノキ	●				
91		コケモモ	●				
92	アカネ科	オオバノヨツバムグラ	●				
93	リンドウ科	タテヤマリンドウ		●	EN	—	
94		エゾオヤマリンドウ	●	●			
95	ハマウツボ科	エゾシオガマ	●				
96	タヌキモ科	ムシトリスミレ	●				
97	モチノキ科	ハイイヌツゲ		●			
98	ミツガシワ科	イワイチヨウ	●				
99	キク科	ヤマハハコ	●				
100		オニアザミ	●				
101		ザオウアザミ	●		NT	—	
102		ヨツバヒヨドリ	●				
103		ミヤマコウゾリナ	●				
104		シロバナニガナ	●				
105		ハナニガナ	●				
106	セリ科	シラネニンジン	●				
計	106		97	18			

【植物目録の仕様】

◎科名、和名及び配列は、主に以下によった。

新山形県野生植物目録編集委員会編集(2019).新山形県野生植物目録2019.116pp.フロラ山形

◎凡例

●: 2025年現地調査で確認した種

表-3 大山岳 蔵王連峰 植物目録(2025年度)

No.	科	和名	調査箇所 中丸山 ～熊野岳	RDBカテゴリー		備考
				県	国	
1	ヒカゲノカズラ科	ヒメスギラン	●			
2		ホソバトウゲシバ	●			
3		ヒカゲノカズラ	●			
4		アスヒカズラ	●			
5		マンネンスギ	●			
6		タカネヒカゲノカズラ	●			
7	ゼンマイ科	ゼンマイ	●			
8	キジノオシダ科	ヤマソテツ	●			
9	イノモトソウ科	クジャクシダ	●			
10	ヒメシダ科	ミヤマワラビ	●			
11		ミゾシダ	●			
12		オオバショリマ	●			
13	コウヤワラビ科	イヌガンソク	●			
14	シシガシラ科	ミヤマシシガシラ	●			
15		シシガシラ	●			
16	メシダ科	カラクサイヌワラビ	●			
17		サトメシダ	●			
18		ミヤマメシダ	●			
19		ミヤマヘビノネゴザ	●			
20		エゾメシダ	●			
21		ヤマイヌワラビ	●			
22		ヘビノネゴザ	●			
23		ウスゲミヤマシケシダ	●			
24	オシダ科	ホソバナライシダ	●			
25		オシダ	●			
26		シラネワラビ	●			
27		ミヤマイタチシダ	●			
28		シロウマイタチシダ	●	—	NT	蔵王山系初記録
29		カラクサイノデ	●			
30		サカゲイノデ	●			
31		ジュウモンジシダ	●			
32	マツ科	オオシラビソ	●			
33		ハッコウダゴヨウ	●			キタゴヨウ×ハイマツ
34	キンコウカ科	ネバリノギラン	●			
35		ノギラン	●			
36		キンコウカ	●			
37	シュロソウ科	ツクバネソウ	●			
38		コバイケイソウ	●			
39	ユリ科	タケシマラン	●			
40		タマガワホトギス	●			
41	ラン科	ハクサンチドリ	●			
42		コイチヨウラン	●			
43		エゾスズラン	●	CR	—	アオスズラン
44		オノエラン	●			
45		ミヤマフタバラン	●	CR	—	
46		タカネトンボ	●	CR	VU	
47		ホソバノキソチドリ	●			
48	イネ科	コメススキ	●			
49	ケシ科	コマクサ	●	VU	—	
50	キンポウゲ科	ミツバオウレン	●			
51	ユキノシタ科	トリアシショウマ	●			
52	バラ科	ミヤマニガイチゴ	●			
53		シロバナトウウチソウ	●			
54		チングルマ	●			
55		マルバシモツケ	●			
56	カバノキ科	ヒメヤシャブシ	●			
57		ウダイカンバ	●			
58	ニシキギ科	サワダツ	●			
59	ヤナギ科	バッコヤナギ	●			
60		イヌコリヤナギ	●			
61		キツネヤナギ	●			
62		ツガルヤナギ	●			イヌコリヤナギ×キツネヤナギ
63	スミレ科	ミヤマスミレ	●			
64	アカバナ科	ミヤマタニタデ	●			
65		タニタデ	●			
66		カラフトアカバナ	●			

No.	科	和名	調査箇所 中丸山 ～熊野岳	RDBカテゴリー		備考
				県	国	
67		ミヤマアカバナ	●			
68	ムクロジ科	ミネカエデ	●			
69	ミカン科	ツルシキミ	●			
70	アオイ科	シナノキ	●			
71	タデ科	メイゲツソウ	●			
72	モウセンゴケ科	モウセンゴケ	●			
73	ミズキ科	ゴゼンタチバナ	●			
74	サクラソウ科	ツマトリソウ	●			
75	イワウメ科	イワカガミ	●			
76	ツツジ科	ウメガサソウ	●			
77		ミヤマホツツジ	●			
78		ガンコウラン	●			
79		イワナシ	●			
80		ハナヒリノキ	●			
81		アカモノ	●			
82		シラタマノキ	●			
83		ミネズオウ	●			
84		ギンリョウソウ	●			
85		アオノツガザクラ	●			
86		カラフトイチヤクソウ	●	CR	VU	
87		マルバノイチヤクソウ	●			
88		ムラサキヤシオツツジ	●			
89		ハクサンシャクナゲ	●			
90		ウラジロヨウラク	●			
91		アクシバ	●			
92		クロウスゴ	●			
93		コケモモ	●			
94	アカネ科	オオバノヨツバムグラ	●			
95		ツルアリドオシ	●			
96	リンドウ科	エゾオヤマリンドウ	●			
97		テングノコヅチ	●	VU	NT	
98	ハマウツボ科	エゾシオガマ	●			
99	モチノキ科	ハイヌツゲ	●			
100		ツルツゲ	●			
101		アカミノイヌツゲ	●			
102	キキョウ科	タニギキョウ	●			
103	キク科	ヤマハハコ	●			
104		ノッポロガンクビソウ	●			
105		オニアザミ	●			
106		ザオウアザミ	●	NT	—	
107		ミヤマコウゾリナ	●			
108		シロバナニガナ	●			
109		ハナニガナ	●			
110		オオカニコウモリ	●			
111		ミヤマアキノキリンソウ	●			
112	セリ科	シラネニンジン	●			
113	ガマズミ科	オオミヤマガマズミ	●			
114		ミヤマガマズミ	●			
計	114		114			

【植物目録の仕様】

◎科名、和名及び配列は、主に以下によった。

新山形県野生植物目録編集委員会編集(2019).新山形県野生植物目録2019.116pp.フロラ山形

◎凡例

●: 2025年現地調査で確認した種

表-4 大山岳 蔵王連峰 動物目録(2025年度)

No.	目	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
				御田ノ神 湿原	蔵王山系 中腹	県	国	
昆虫類	1	トンボ目	ヤンマ科	オオルリボシヤンマ	●			幼虫にて確認
	2	トンボ目	トンボ科	アキアカネ	●	●		
	3	バッタ目	バッタ科	ミヤマヒナバッタ	●			
	4	バッタ目	ヒシバッタ科	ハラヒシバッタ	●			
	5	バッタ目	キリギリス科	ヒメギス	●			
	6	カメムシ目	セミ科	エゾハルゼミ		●		
	7	カメムシ目	カメムシ科	ツノアオカメムシ	●	●		
	8	カメムシ目	カメムシ科	エゾアオカメムシ		●		
	9	カメムシ目	ツノカメムシ科	ベニモンカメムシ	●			
	10	カメムシ目	アメンボ科	ヒメアメンボ	●			
	11	アミメカゲロウ目	ヒロバカゲロウ科	スカシヒロバカゲロウ	●			
	12	アミメカゲロウ目	センブリ科	センブリの一種	●			
	13	コウチュウ目	ハンミョウ科	ニワハンミョウ		●		
	14	コウチュウ目	オサムシ科	マイマイカブリ		●		
	15	コウチュウ目	オサムシ科	コクロナガオサムシ		●		垂種名:トウホククロナガオサムシ
	16	コウチュウ目	オサムシ科	アカガネオオゴミムシ		●		
	17	コウチュウ目	オサムシ科	クロツヤヒラタゴミムシ		●		
	18	コウチュウ目	オサムシ科	ヒメゴミムシ		●		
	19	コウチュウ目	オサムシ科	ヤマトクロヒラタゴミムシ		●		
	20	コウチュウ目	オサムシ科	ホシナガゴミムシ		●		
	21	コウチュウ目	シデムシ科	オオヒラタシデムシ		●		
	22	コウチュウ目	クワガタムシ科	スジクワガタ		●		
	23	コウチュウ目	クワガタムシ科	ホンコルリクワガタ		●		別名:コルリクワガタ
	24	コウチュウ目	コガネムシ科	ヒメアシナガコガネ	●			
	25	コウチュウ目	ベニボタル科	オオクシヒゲベニボタル		●		
	26	コウチュウ目	ハムシダマシ科	クロケブカナガハムシダマシ	●			
	27	コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	ムネビロスナゴミムシダマシ		●		
	28	コウチュウ目	カミキリムシ科	カラカネハナカミキリ	●			
	29	コウチュウ目	カミキリムシ科	ニンフホソハナカミキリ	●			
	30	コウチュウ目	カミキリムシ科	アカガネカミキリ	●			
	31	コウチュウ目	カミキリムシ科	コブヤハズカミキリ		●		
	32	コウチュウ目	コメツキムシ科	コガネコメツキ	●			
	33	コウチュウ目	コメツキムシ科	ヒメシモフリコメツキ	●			
	34	コウチュウ目	コメツキムシ科	オオカバイロコメツキ	●			
	35	コウチュウ目	ハムシ科	チャイロサルハムシ	●			
	36	コウチュウ目	ハムシ科	セスジツツハムシ	●			
	37	コウチュウ目	ハムシ科	コヤツボシツツハムシ		●		
	38	コウチュウ目	ハムシ科	ズグロアラメハムシ	●			
	39	コウチュウ目	ハムシ科	カバノキハムシ	●			
	40	コウチュウ目	ハムシ科	カエデハムシ		●		
	41	コウチュウ目	ハムシ科	キボシルリハムシ	●			
	42	コウチュウ目	ハムシ科	ハンノキハムシ	●			
	43	コウチュウ目	ハムシ科	イタドリハムシ	●			
	44	コウチュウ目	ハムシ科	ヤナギルリハムシ		●		
	45	コウチュウ目	ジョウカイボン科	ウスイロクビボソジョウカイ	●			
	46	コウチュウ目	ジョウカイボン科	セスジジョウカイ	●			
	47	コウチュウ目	ジョウカイボン科	マルムネジョウカイ	●			
	48	コウチュウ目	オトシブミ科	セアカオトシブミ	●			
	49	コウチュウ目	オトシブミ科	ウスアカオトシブミ	●			
	50	コウチュウ目	オトシブミ科	ムツモンオトシブミ	●			
	51	ハチ目	ハバチ科	マダラアシクロハバチ	●			
	52	ハチ目	ハバチ科	クロムネアオハバチ	●			
	53	ハチ目	ハバチ科	ツマセグロハバチ		●		
	54	ハチ目	ハバチ科	セマダラハバチ		●		
	55	ハチ目	ヒラタハバチ科	ワモンヒラタハバチ		●		
	56	ハエ目	ガガンボ科	ヒメクシヒゲガガンボ	●			
	57	ハエ目	ハナアブ科	ハナアブ	●			
	58	ハエ目	ハナアブ科	ナミホシヒラタアブ	●			
	59	ハエ目	ハナアブ科	オオシマハナアブ	●			
	60	ハエ目	ヤドリバエ科	マルボシハナバエ	●			
	61	ハエ目	ミバエ科	キイロケブカミバエ		●		
	62	シリアゲムシ目	シリアゲムシ科	キシタトゲシリアゲ	●			
	63	シリアゲムシ目	シリアゲムシ科	ホソオビトゲシリアゲ	●			
	64	シリアゲムシ目	シリアゲモドキ科	スカシシリアゲモドキ	●			
	65	チョウ目	アゲハチョウ科	キアゲハ	●	●		
	66	チョウ目	シロチョウ科	スジグロシロチョウ	●	●		
	67	チョウ目	シロチョウ科	モンキチョウ	●	●		
	68	チョウ目	シジミチョウ科	ルリシジミ	●	●		
	69	チョウ目	タテハチョウ科	クジャクチョウ	●	●		
	70	チョウ目	タテハチョウ科	ツマグロヒョウモン		●		
	71	チョウ目	タテハチョウ科	ウラギンヒョウモン		●		
	72	チョウ目	タテハチョウ科	コジャノメ		●		
	73	チョウ目	タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ		●		
	74	チョウ目	タテハチョウ科	クロヒカゲ		●		
	75	チョウ目	タテハチョウ科	ヤマキマダラヒカゲ		●		
	76	チョウ目	タテハチョウ科	アサギマダラ		●		
	77	チョウ目	イカリモンガ科	イカリモンガ		●		
	78	チョウ目	シャクガ科	ヒョウモンエダシャク	●			

No.	目	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
				御田ノ神 湿原	蔵王山系 中腹	県	国	
79	チョウ目	ツトガ科	ミヤマウスギンツトガ	●				
80	チョウ目	ハマキガ科	コウスクリイロヒメハマキ					
計	80			46	37			

【動物目録の仕様】

◎目、科の配列は主に以下によった。

大津高編修(2004)山形県陸産淡水産動物目録(改訂版). 358pp, 山形県動物環境調査会, 山形.

◎希少動物については以下によった。

山形県(2019)「レッドデータブックやまがた2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」. 334pp

◎分類・和名については最新版の書籍を使用した。

◎凡例

●:2025年の現地調査で確認した種

表-5 大山岳 蔵王連峰 動物目録(2025年度)

No.	目	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
				地蔵山	熊野岳	イロハ沼	県	国	
昆虫類	1	トンボ目	トンボ科	アキアカネ	●	●	●		
	2	トンボ目	トンボ科	ノシメトンボ			●		
	3	バッタ目	バッタ科	ミヤマヒナバッタ	●		●		
	4	バッタ目	バッタ科	ハヤチネフキバッタ			●		
	5	カメムシ目	カメムシ科	ツノアオカメムシ	●		●		
	6	カメムシ目	クヌギカメムシ科	クヌギカメムシ			●		
	7	コウチュウ目	センチコガネ科	オオセンチコガネ	●		●		
	8	コウチュウ目	ハムシダマシ科	ナミアオハムシダマシ			●		
	9	コウチュウ目	クビナガムシ科	クビナガムシ			●		
	10	コウチュウ目	カミキリムシ科	ニンフホソハナカミキリ			●		
	11	コウチュウ目	カミキリムシ科	ツヤケシハナカミキリ	●	●	●		
	12	コウチュウ目	カミキリムシ科	チャイロヒメハナカミキリ		●	●		
	13	コウチュウ目	カミキリムシ科	フタオビヒメハナカミキリ		●	●		
	14	コウチュウ目	カミキリムシ科	ミワヒメハナカミキリ			●		
	15	コウチュウ目	カミキリムシ科	ムネアカヨコモヒメハナカミキリ			●		
	16	コウチュウ目	カミキリムシ科	キタセズジヒメハナカミキリ		●	●		
	17	コウチュウ目	カミキリムシ科	ヤツボシハナカミキリ			●		
	18	コウチュウ目	コメツキムシ科	チャバネクシコメツキ			●		
	19	コウチュウ目	ハムシ科	セスジツツハムシ	●		●		
	20	コウチュウ目	ハムシ科	チャイロサルハムシ			●		
	21	コウチュウ目	ハムシ科	ハンノキハムシ			●		
	22	コウチュウ目	ハムシ科	カバノキハムシ	●		●		
	23	コウチュウ目	ハムシ科	アトボシハムシ			●		
	24	コウチュウ目	ハムシ科	ニレハムシ			●		
	25	コウチュウ目	ハムシ科	ウリハムシモドキ	●		●		
	26	コウチュウ目	ハムシ科	イタドリハムシ	●		●		
	27	コウチュウ目	ハムシ科	ヤマナラシハムシ	●		●		
	28	コウチュウ目	ハムシ科	ズグロアラメハムシ			●		
	29	コウチュウ目	ハムシ科	ヤナギルリハムシ			●		
	30	コウチュウ目	テントウムシ科	カメノコテントウ		●	●		
	31	コウチュウ目	ジョウカイボン科	ジョウカイボン			●		
	32	コウチュウ目	カミキリモドキ科	マダラカミキリモドキ			●		
	33	コウチュウ目	オトシブミ科	ヒメクロオトシブミ			●		
	34	コウチュウ目	オトシブミ科	ツツムネチョッキリ			●		
	35	コウチュウ目	オトシブミ科	コナライクビチョッキリ			●		
	36	ハエ目	ガガンボ科	キリウジガガンボ			●		
	37	ハエ目	ガガンボ科	タケウチマダラヒメガガンボ	●		●		
	38	ハエ目	ハナアブ科	ハナアブ	●		●		
	39	ハチ目	ハバチ科	トゲセグロアオハバチ			●		
	40	ハチ目	ハバチ科	タカネアオハバチ	●		●		
	41	ハチ目	ハバチ科	ニホンコシアカハバチ			●		
	42	ハチ目	ハバチ科	ルリコシアカハバチ			●		
	43	ハチ目	ハバチ科	ツノジロナカアハバチ			●		
	44	ハチ目	ヒラタハバチ科	サクラヒラタハバチ			●		
	45	シリアゲムシ目	シリアゲムシ科	ホソオビトゲシリアゲ			●		
	46	シリアゲムシ目	ガガンボモドキ科	スカシガガンボモドキ			●		
	47	チョウ目	アゲハチョウ科	キアゲハ	●	●	●		
	48	チョウ目	タテハチョウ科	ヤマキマダラヒカゲ			●		
	49	チョウ目	タテハチョウ科	ヒメキマダラヒカゲ	●		●		
	50	チョウ目	タテハチョウ科	クロヒカゲ			●		
	51	チョウ目	セセリチョウ科	コチャバネセセリ			●		
	52	チョウ目	イカリモンガ科	イカリモンガ			●		
	53	チョウ目	マダラガ科	キスジホソマダラ			●		
	54	チョウ目	シャクガ科	スグリシロエダシャク			●		
	55	チョウ目	シャクガ科	ツマアカナミシャク			●		
	56	チョウ目	シャクガ科	ウスキクロテンヒメシャク			●		
	57	チョウ目	シャクガ科	アカマダラナミシャク			●		
	58	チョウ目	シャクガ科	テンスジアオナミシャク			●		
	59	チョウ目	シャクガ科	クロスジアオナミシャク			●		
	60	チョウ目	シャクガ科	アメイロヒメシャク			●		
爬虫類	61	有鱗目	ナミヘビ科	ジムグリ	●			DD	-
計	61				16	7	45		

【動物目録の仕様】

- ◎目、科の配列は主に以下によった。
大津高編修(2004)山形県陸産淡水産動物目録(改訂版). 358pp, 山形県動物環境調査会, 山形.
- ◎希少動物については以下によった。
山形県(2019)「レッドデータブックやまがた2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」. 334pp
- ◎分類・和名については最新版の書籍を使用した。
- ◎凡例
●: 2025年の現地調査で確認した種

表-6 大山岳 蔵王連峰 動物目録(2025年度)

No.	目	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
				熊野岳	坊平高原	県	国	
昆虫類	1	トンボ目	トンボ科	●	●			
	2	トンボ目	トンボ科		●			
	3	バッタ目	バッタ科		●			
	4	バッタ目	バッタ科		●			
	5	バッタ目	バッタ科		●			
	6	バッタ目	バッタ科		●			
	7	バッタ目	バッタ科		●			
	8	バッタ目	ヒシバッタ科		●			
	9	ハサミムシ目	クギヌキハサミムシ科		●			
	10	ハサミムシ目	クギヌキハサミムシ科		●			
	11	カメムシ目	セミ科		●			
	12	カメムシ目	カメムシ科		●			
	13	カメムシ目	カメムシ科	●				
	14	コウチュウ目	ハンミョウ科	●				
	15	コウチュウ目	オサムシ科	●		NT	—	亜種名: チョウカイヒメクロオサムシ
	16	コウチュウ目	オサムシ科	●				亜種名: トウホククロナガオサムシ
	17	コウチュウ目	オサムシ科	●				
	18	コウチュウ目	オサムシ科	●				
	19	コウチュウ目	オサムシ科	●				
	20	コウチュウ目	クワガタムシ科	●				
	21	コウチュウ目	センチコガネ科		●			
	22	コウチュウ目	コガネムシ科	●	●			
	23	コウチュウ目	コガネムシ科		●			
	24	コウチュウ目	コガネムシ科	●				
	25	コウチュウ目	ハムシダマシ科		●			
	26	コウチュウ目	ハムシダマシ科	●				
	27	コウチュウ目	クビナガムシ科		●			
	28	コウチュウ目	カミキリムシ科	●				
	29	コウチュウ目	カミキリムシ科	●	●			
	30	コウチュウ目	ジョウカイボン科		●			
	31	コウチュウ目	ジョウカイボン科		●			
	32	コウチュウ目	コメツキムシ科	●				
	33	コウチュウ目	コメツキムシ科		●			
	34	コウチュウ目	コメツキムシ科		●			
	35	コウチュウ目	コメツキムシ科		●			
	36	コウチュウ目	ハムシ科	●				
	37	コウチュウ目	ハムシ科		●			
	38	コウチュウ目	ハムシ科	●				
	39	コウチュウ目	ハムシ科	●				
	40	コウチュウ目	ハムシ科	●				
	41	コウチュウ目	ハムシ科		●			
	42	コウチュウ目	テントウムシ科		●			
	43	コウチュウ目	カミキリムシ科	●				
	44	コウチュウ目	ゾウムシ科	●				
	45	コウチュウ目	ゾウムシ科		●			
	46	ハチ目	ミツバチ科		●			
	47	ハチ目	ドロバチ科		●			
	48	ハチ目	コンボウハバチ科		●			
	49	ハチ目	ハバチ科		●			
	50	ハチ目	ハバチ科	●				
	51	ハエ目	ハナアブ科	●				
	52	ハエ目	ハナアブ科		●			
	53	ハエ目	ハナアブ科		●			
	54	ハエ目	ハナアブ科		●			
	55	ハエ目	ヤドリバエ科		●			
	56	ハエ目	ヤドリバエ科		●			
	57	シリアゲムシ目	ガガンボモドキ科		●			
	58	チョウ目	アゲハチョウ科	●				
	59	チョウ目	シロチョウ科		●			
	60	チョウ目	シロチョウ科		●			
	61	チョウ目	シジミチョウ科		●	—	NT	
	62	チョウ目	シジミチョウ科		●			
	63	チョウ目	シジミチョウ科		●			
	64	チョウ目	タテハチョウ科		●			
	65	チョウ目	タテハチョウ科		●			
	66	チョウ目	タテハチョウ科		●			
	67	チョウ目	タテハチョウ科		●			
	68	チョウ目	タテハチョウ科		●			
	69	チョウ目	タテハチョウ科		●			
	70	チョウ目	タテハチョウ科		●			
	71	チョウ目	タテハチョウ科		●			
	72	チョウ目	セセリチョウ科		●			
	73	チョウ目	セセリチョウ科		●			
	74	チョウ目	イカリモンガ科		●			
	75	チョウ目	アゲハモドキ科		●			
	76	チョウ目	マダラガ科		●			
	77	チョウ目	メイガ科		●			
	78	チョウ目	カギバガ科		●			

No.	目	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
				熊野岳	坊平高原	県	国	
79	チョウ目	ヒトリガ科	キベリネズミホソバ		●			
80	チョウ目	シャクガ科	シナトビスジエダシャク		●			
81	チョウ目	シャクガ科	アメイロヒメシャク		●			
82	チョウ目	スズメガ科	ヒメサザナミスズメ		●			
83	チョウ目	イラガ科	クロシタアオイラガ		●			
84	チョウ目	ヤガ科	ヒメギンガ		●			
計	84			24	66			

【動物目録の仕様】

◎目、科の配列は主に以下によった。

大津高編修(2004)山形県陸産淡水産動物目録(改訂版). 358pp, 山形県動物環境調査会, 山形.

◎希少動物については以下によった。

山形県(2019)「レッドデータブックやまがた2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」. 334pp

◎分類・和名については最新版の書籍を使用した。

◎凡例

●:2025年の現地調査で確認した種

2 中小山岳 雁戸山

(1) 調査趣旨

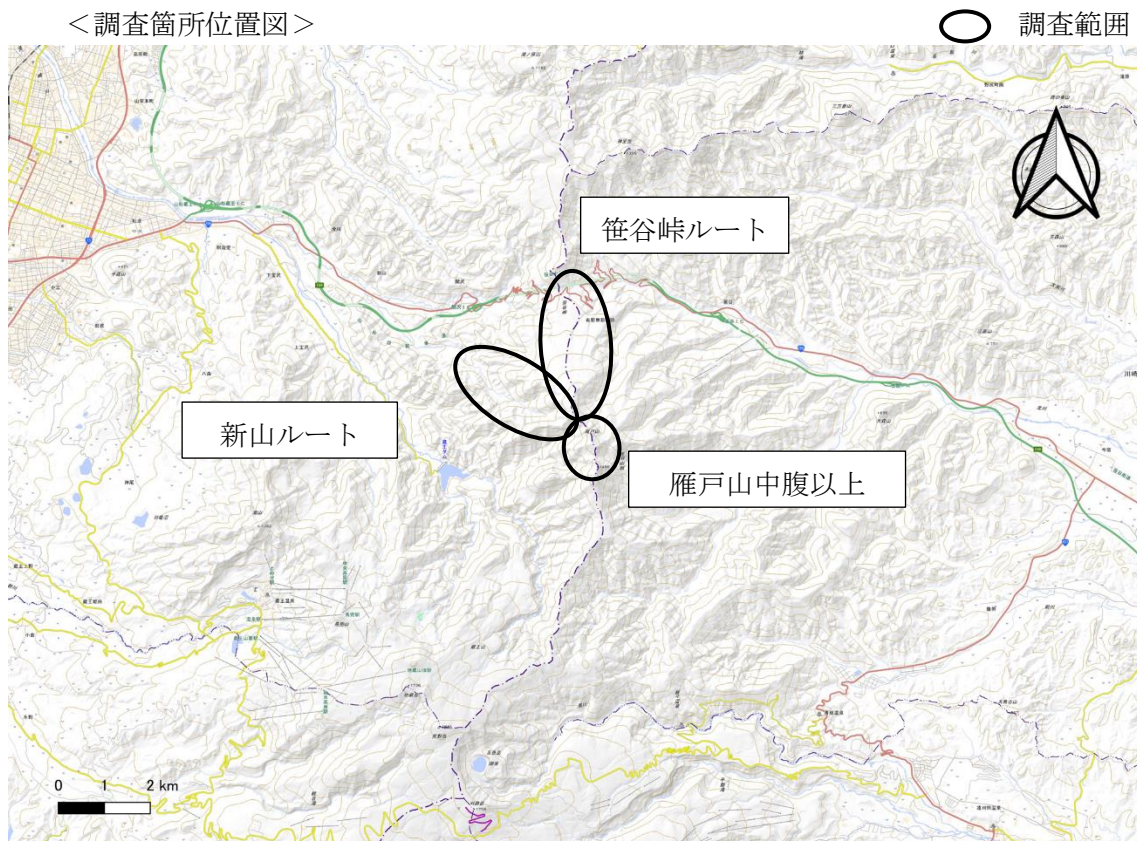
雁戸山に関する本格的な調査は、1982年から3年間行われた山形県総合学術調査(以下「学術調査」と記載)「蔵王連峰」が最初である。当センターでも、2013年に貴重な動植物の分布状況について、調査を実施している。今回、その調査から10年以上の年月が経過していることから、調査当時の貴重な動植物の分布状況に変化が見られるか把握することを目的に調査を実施した。

(2) 調査地の概要

山形県と宮城県にまたがる雁戸山(雁戸山1484m、南雁戸山1486m)は、蔵王連峰の北端に位置し、急峻で双耳峰の山容と豊かな自然環境が特徴で、蔵王国定公園に指定されている。

植生分布については、標高の高い稜線沿いにはハクサンシャクナゲ・ミネカエデなど落葉低木の群落が見られ、さらに急斜面の山頂付近ではハイマツの低木が見られる。

<調査箇所位置図>



(3) 調査日、調査箇所及び調査者

調査は以下のとおり実施した。

植物相・動物（昆虫等）相

調査日 2025年6月10日、調査箇所 新山ルート

調査者 沢 和浩、横倉 明、櫛田博郎、辻 浩子

植物相

調査日 2025年9月7日（8月27日下見）、調査箇所 笹谷峠周辺

フロラ山形 植物分類講座

植物相

調査日 2025年9月8日、調査箇所 笹谷峠ルート

調査者 沢 和浩、櫛田博郎、辻 浩子

（レッドデータ改訂調査の調査員同行）

動物（昆虫等）相

調査日 2025年9月8日、調査箇所 笹谷峠、蔵王ダム周辺

調査者 横倉 明、笹渕健市、新藤道人

(4) 調査方法

① 植物相

1982 から 1984 年まで行われた学術調査「蔵王連峰」や 2013 年に当センターで実施したモニタリング調査の結果を踏まえながら、その後の変化を調べるため、樹林帯や登山道周辺の種を調査し、改めて植物目録を作成した。併せて、植物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を確認した。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については採取して、後日同定を行った。

② 動物（昆虫等）相

1982 から 1984 年まで行われた学術調査「蔵王連峰」や 2013 年に当センターで実施したモニタリング調査の結果を踏まえながら、その後の変化を調べるため、樹林帯や登山道の周辺を踏査し、昆虫を中心に捕虫網を使った捕獲調査を行った。その他の種については目視、鳴き声による確認を行った。

確認できた種について目録を作成し、動物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を明らかにした。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については持ち帰り、後日同定を行った。

(5) 調査結果

① 植物相

確認された維管束植物は 253 種である（表－1 参照）。うち絶滅危惧種、注目すべき種及び前回調査時に確認された絶滅危惧種は以下のとおりである（(7) 調査時の写真 参照）。

○絶滅危惧ⅠA類 (CR)

キンセイラン、ユキワリコザクラ、クロブシヒョウタンボク

○滅危惧ⅠB類 (EN)

エビネ、クマガイソウ、クロカンバ、タカネバラ、テイネニガクサ、オオナンバンギセル

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チシマゼキショウ、カリヤスモドキ、ミツモトソウ、ヒロハコンロンソウ、ベニバナイチヤクソウ、テングノコヅチ、ミチノクコゴメグサ、イワインチン、ウゼンアザミ、オミナエシ、キバナウツギ

○準絶滅危惧 (NT)

アズマシャクナゲ、ザオウアザミ

○その他注目すべき種

フボウトウヒレン、オオカサモチ

○2013年に当センターで実施した調査で生育が確認された絶滅危惧種

エゾスズラン(CR)、ユキワリコザクラ(CR)、ヒトツバテンナンショウ(CR)、タカネバラ(EN)、オオナンバンギセル(EN)、アズマギク(EN)、チシマゼキショウ(VU)、ミツモトソウ(VU)、ベニバナイチヤクソウ(VU)、ミチノクコゴメグサ(VU)、イワインチン(VU)、オミナエシ(VU)、アズマシャクナゲ(NT)、ザオウアザミ(NT)

なお、今回の調査で、エゾスズラン、ヒトツバテンナンショウ、アズマギクは確認されなかった。

○絶滅危惧種及び注目すべき種について

●キンセイラン (ラン科) *Calanthe nipponica* Makino (県CR、国VU)

エビネの仲間であるが、エビネよりも標高の高い所に多く、ササや低木の少ないスギ林に多い。県内各地域に広く分布するが、どこにでもある訳ではなく出ている所は限られ、庄内と置賜地域での確認事例が少ない。

本調査地においては、登山道の途中のスギ林内に、合計20個体程点在しているのを確認した。ただ、今年度特有の現象であるか不明であるが、花期に花茎の途中から萎れているものばかりで、開花を全く確認することができなかった。花茎に産卵し幼虫が茎の中を食害してしまう、ランミモグリバエ類の仕業であると推定した。これまでも少しはこのような現象は確認できたが、今年度のような状況は初めての確認である。温暖化の影響でランミモグリバエ類の活動が活発化しているものと思われる。盗掘以上に今後監視が必要である。

●ユキワリコザクラ(サクラソウ科) *Primula farinosa* L. subsp. *modesta* (Bisset et S. Moore) Pax var. *fauriei* (Franch.) Miyabe (県CR、国一)

奥羽山脈の御所山から蔵王山系の岩場に生育している。人が近寄れないような岩場に多いので、なかなか確認が難しい。最近の研究で、北海道産のものは別物で

あることが分かり、青森～山形までの東北地方の固有種ということが確認されており、蔵王山系のものは南限の産地ということになる。

●クロブシヒョウタンボク（スイカズラ科）*Lonicera kurobushiensis* Kadota
（県 CR、国 CR）

環境省の種の保存法の指定種とされている。県内では、東根市の観音寺黒伏山風穴で発見されて以降、奥羽山脈沿いの4か所の風穴で確認されているが、その後本調査地を含め2か所で新たに発見されている。

本調査地は、登山道の途中の沢の支流沿いの風穴で30個体程が確認されているが、風穴の範囲がまだ把握されていないため、本種がどこまでの範囲にどれだけの個体数があるものか、今後も継続して調査していく必要がある。

●エビネ（ラン科）*Calanthe discolor* Lindl.（県 EN、国 NT）

キンセイランと同様の環境に県内各地広く分布し、確認地はさらに多いが、個体数は少ない所が多い。

本調査地においては、キンセイランと同所的に生育しているが、生育か所数としては少なく、個体数は合計20個体程である。開花時期の違いによると思われるが、幸いランミモグリバエ類の食害は余り確認されていない。

●クマガイソウ（ラン科）*Cypripedium japonicum* Thunb.（県 EN、国 VU）

県内では、置賜地域を除く各地で現存が確認されているが、昨年度東北大学で調査した山形市内の別の場所の個体群が、県内で最大の規模であることが判明した。

本調査地においては、登山道から近いスギ林内で、開花株数20個程を確認した。この場所は1集団のみであり、花茎は地下茎でつながっていることから、1クロウソクの可能性はある。

●クロカンバ（クロウメモドキ科）*Rhamnus costata* Maxim.（県 EN、国 一）

奥羽山脈の御所山系から高島町にかけてと、白鷹山系の岩場やガレ場、風穴に生育するが、いずれの産地においても個体数は少ない。

本調査地においては、クロブシヒョウタンボクが確認される風穴の周辺で、数個体確認したのみである。今回は調査範囲が限られていることから、今後範囲を広げて調査する必要がある。

●タカネバラ（バラ科）*Rosa nipponensis* Crep.（県 EN、国 一）

日本固有種の野生のバラで、奥羽山脈の御所山系から蔵王山系の岩山と、高島町の風穴に生育する。このうち風穴に生育するのは全国的にも余り例がないものと思われる。

本調査地においては、北雁戸山、南雁戸山の両方の岩場で、計30個体程を確認することができた。登山道沿いのものは、刈り払いにより株が小さくなっている様子である。

- テイネニガクサ (シソ科) *Teucrium teinense* Kudo (県 EN、国 NT)
クロブシヒョウタンボクと同じ風穴周辺で確認されたが、小さなものが数個体確認されたのみである。

(詳細は大山岳の調査結果を参照のこと)

- オオナンバンギセル (ハマウツボ科) *Aeginetia sinensis* G. Beck (県 EN、国一)
イネ科植物に寄生する全寄生植物である。近似種のナンバンギセルは福島県以南に分布し、県内にはないものと思われる。県内では置賜地域を除く地域で現存を確認されているが、個体数はいずれも少ない。

本調査地においては、峠付近の風衝地で 10 個体程確認したが、チシマザサに寄生していると思われる。本種はススキに寄生することが多いが、ササ類に寄生する例は少ないと思われる。

- チシマゼキショウ (チシマゼキショウ科) *Tofieldia coccinea* Richards. var. *coccinea* (県 VU、国一)

県内各地の山地帯から高山帯の岩場に生育する。近似種のチャボゼキショウは低山帯の岩場に生育し住み分けをしている。チャボゼキショウとの違いは花期が早いこと、花柄が短いことであるが、研究者により若干見解が異なっていて混乱している。

本調査地においては、山頂近くの岩場に 5 個体とわずかながら確認した。登山道沿いの岩場であり、踏み付けや盗掘に注意を要する。

- カリヤスモドキ (イネ科) *Miscanthus oligostachyus* Stapf (県 VU、国一)

近似種のオオヒゲナガカリヤスモドキが日本海側多雪地に多いのに対し、本種は太平洋側風衝地に生育しており、本調査地は太平洋側からの越境分布地である。

本種を含むススキ属植物は、分類に混乱している所があり、研究の進展が期待される。本調査地においては、峠の風衝地を中心に 50 個体程が確認された。

- ミツモトソウ (バラ科) *Potentilla cryptotaeniae* Maxim. (県 VU、国一)

県内においては、庄内、最上を除く各地で確認されているが、一部を除き個体数は少ない所が多い。沢沿いのやや湿った場所に多く見られる。本調査地においては、駐車場脇の草地でオオダイコンソウなどと 20 個体程が混生している。

- ヒロハコンロンソウ (アブラナ科) *Cardamine appendiculata* Franch. et Sav. (県 VU、国一)

県内においては、庄内、最上を除く各地で確認されている。主に冷涼な沢沿いや風穴で見られる。エゾノチャルメルソウやレンプクソウなどが同所的に生えていることも多い。本調査地においては、登山道を横切る冷涼な沢沿いで 30 個体程を確認した。

- ベニバナイチヤクソウ(ツツジ科) *Pyrola incarnata* (DC.) Fisch. ex Freyn
(県VU、国一)
山地帯上部の小ピーク付近の低木林下で100個体程を確認した。
(詳細は大山岳の調査結果を参照のこと)

- テングノコヅチ(リンドウ科) *Tripterosperrum japonicum* (Siebold et Zucc.)
Maxim. var. *involutibile* (N.Yonez.) J.Murata (県VU、国NT)
山地帯上部のブナ林下で10個体程確認した。
(詳細は大山岳の調査結果を参照のこと)

- ミチノクコゴメグサ(ハマウツボ科) *Euphrasia maximowiczii* Wettst. var.
arcuata F.Maek. ex T.Yamaz. (県VU、国一)
コゴメグサ類は分類に課題があり、研究者により見解が分かれるが、当面この地
域のものはミチノクコゴメグサとしておきたい。吾妻山系にも記録があるが、ほぼ
福島県側であり山形県側はごく少ない。本調査地においては、駐車場脇の法面で5
個体程しか確認できなかった。

- イワインチン(キク科) *Chrysanthemum rupestre* Matsum. et Koidz.
(県VU、国一)
県内で分布するのは朝日山系、飯豊山系と本調査地周辺地域であるが、本調査地
周辺の個体数が一番多いと思われる。高山帯の岩場に生育する。本調査地において
は、山頂付近の岩場に50個体程を確認した。

- ウゼンアザミ(キク科) *Cirsium uzenense* Kadota (県VU、国一)
県内では置賜地域を除く各地の沢の源頭部斜面で確認されている。分類で課題
があり、ハナマキアザミとは総苞片の数が連続的で区別できないといった見解も
ある。本調査地では、山頂付近の鞍部で10個体程を確認することができた。

- オミナエシ(スイカズラ科) *Patrinia scabiosifolia* Link (県VU、国一)
峠の風衝地において、5個体程を確認することができた。
(詳細は大山岳の調査結果を参照のこと)

- キバナウツギ(スイカズラ科) *Weigela maximowiczii* (S.Moore) Rehder
(県VU、国一)
県内では奥羽山脈の関山峠付近から北蔵王の間の狭い範囲に分布している。冷
涼な沢沿いや風穴で確認され、場所によって個体数の多い所もある。また、タニウ
ツギとの交雑もあるとの研究結果がある。本調査地においては、クロブシヒョウタ
ンボクのある風穴の所で30個体程、山頂の鞍部付近で20個体程を確認した。

- アズマシャクナゲ（ツツジ科）*Rhododendron degronianum* Carriere
（県 NT、国一）

奥羽山脈の御所山系から吾妻山系と、飯豊・朝日山系の一部に分布する。庭木としての価値が高いため、しばしば盗掘の対象となっている。本調査地においては、山頂付近のヤセ尾根にハクサンシャクナゲと混生し、30 個体程を確認した。

- ザオウアザミ（キク科）*Cirsium zawoense* Kadota（県 NT、国一）

山頂の周辺で 30 個体程を確認したが、総苞片の形が幾分典型から外れている。
（詳細は大山岳の調査結果を参照のこと）

- フボウトウヒレン（キク科）*Saussurea fuboensis* Kadota

本種は標高の高い山地に生育するが、近似種であるヤマガタトウヒレンは低い山地の方と住み分けをしている。トウヒレン属は遺伝的にも形態的にも変異が小さく、識別が難しいのが難点である。

本調査地においては、山頂周辺部で 30 個体程を確認したが、本種の発表者の門田博士が調査した時点と比べると、かなり減少している。

- オオカサモチ（セリ科）*Pleurospermum uralense* Hoffm.

県内では神室山、御所山、飯豊山、月山、雁戸山で記録があるが、群生するわけでもないので目立つことはない。本調査地においては、以前登山道脇の草地で見られ、開花個体も見ることができた。しかし、今回の調査時には低木が侵入してきて、わずかに葉だけの個体が見られるだけであった。

なお、山頂の鞍部付近では開花個体を確認した。

（記：沢 和浩）

② 動物（昆虫）相

今回の調査では、昆虫類 125 種を確認することができた（表－2 参照）。うち絶滅危惧種は確認されなかった。

蔵王ダム周辺など低山地での調査も含めたこともあり、確認された種類数は多かった。注目すべき種として、近年減少傾向の激しいツマジロウラジャノメが確認された。（（7）調査時の写真 参照）。

- 2013 年に当センターで実施した調査で生息が確認された絶滅危惧種
県絶滅危惧種の生息は確認されなかった。

○注目すべき種について

- ツマジロウラジャノメ（タテハチョウ科）*Lasionmata deidamia*

崖、急斜面の岩場など特殊な環境に生息している蝶である。そのような環境に生育するイネ科のヒメノガリヤスなどが幼虫の食草となっている。本種の生息地となっている林道沿いの崖などは、落石防止の工事で崖がコンクリートなどで被覆

されることが多く、年々生息地が少なくなっているのが現状である。県内の生息地は局地的で、更に減少していると思われる。宮城県では減少傾向が著しく近年の記録が途絶えていると聞いている。

(記：横倉 明)

(6) 今後の保全対策及びまとめ

① 植物相について

ラン科植物が多産するスギ林については、伐採の適期になっても皆伐をするのではなく、部分的な伐採で生育環境をある程度守りながら行っていただきたい。

風穴については、まだ全容が確認されていないので、今後範囲を広げて詳細な調査を行う必要がある。温暖化の進展による影響が大きいと思われることから、今後モニタリングを継続していく必要がある。特に環境省の種の保存法指定種とされているクロブシヒョウタンボクについては、個体数や位置情報を確実に把握することに努める必要がある。

風衝草原については、段々と低木が侵入してくることから、草原維持のために範囲を決めて刈り払いなども検討していただきたい。

山頂部の岩場については、希少種が多産しているが、全体的な調査は実施されていないことから、調査を継続し定期的なモニタリングも続ける必要がある。

(記：沢 和浩)

② 動物（昆虫）相について

昆虫類の調査で、新山ルートでは杉植林地、広葉樹林帯、ブナ帯と標高が上がるごとに植生環境が変化し、それに適応した昆虫類が見られた。ただし、溪流沿いの登山道は日当たりが悪く、確認できた種類数は少なかった。

笹谷峠では調査日の天候が悪く、思ったような成果は上がらなかったが、雨中のビーティング採集により、小昆虫類は比較的多くの種が確認できた。

蔵王ダム周辺は低山地で、比較的多くの種が確認できた。崖などに生息しており、減少傾向の著しいツマジロウラジャノメを確認できたのは成果であった。

いずれの調査地でも大きな環境の変化はないようで、保全されていると思われる。

(記：横倉 明)

(7) 調査時の写真

ア 植物相



雁戸山（北雁戸）



調査地の様子



調査の様子



調査の様子



キンセイラン（絶滅危惧 I A 類）



ユキワリコザクラ（絶滅危惧 I A 類）



ユキワリコザクラ（絶滅危惧 I A 類）



クロブシヒョウタンボク（絶滅危惧 I A 類）



エビネ (絶滅危惧 I B 類)



クマガイソウ (絶滅危惧 I B 類)



クロカンバ (絶滅危惧 I B 類)



タカネバラ (絶滅危惧 I B 類)



タカネバラ (絶滅危惧 I B 類)



テイネニガクサ (絶滅危惧 I B 類)



オオナンバンギセル (絶滅危惧 I B 類)
写真提供 (写真撮影) 沢 和浩氏



カリヤスモドキ (絶滅危惧 II 類)
写真提供 (写真撮影) 白壁洋子氏



チシマゼキショウ (絶滅危惧II類)



ミツモトソウ (絶滅危惧II類)



ヒロハコンロンソウ (絶滅危惧II類)



ベニバナイチヤクソウ (絶滅危惧II類)



テングノコヅチ (絶滅危惧II類)



ミチノクゴメグサ (絶滅危惧II類)



イワインチン (絶滅危惧II類)



ウゼンアザミ (絶滅危惧II類)



オミナエシ (絶滅危惧Ⅱ類)



キバナウツギ (絶滅危惧Ⅱ類)



アズマシャクナゲ (準絶滅危惧)



ザオウアザミ (準絶滅危惧)



オオカサモチ



フボウトウヒレン



フボウトウヒレン



コタヌキラン

② 動物（昆虫）相



ツマジロウラジャノメ



エゾハルゼミ



クロケブカナガハムシダマシ



ヒゲナガオトシブミ



イチモンジチョウ



オオチャバネセセリ



クロホウジャク



ホシヒメホウジャク

(8) 引用・参考文献

- ・山形県総合学術調査会 (1985)、「蔵王連峰」、総合学術調査報告
- ・山形県 (2013)、「レッドデータブックやまがた絶滅危惧野生植物 2013 年改訂版」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・山形県 (2019)、「レッドデータブックやまがた 2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・環境省編 (2014)、「レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生動物 5 昆虫類」
- ・山形県 (2015)、「平成 24・25 年度自然生態系保全モニタリング調査報告書」、山形県環境科学研究センター
- ・山形県 (2018)、「やまがた百名山」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・内藤親彦・篠原明彦 (2020)、「日本産ハバチ・キバチ類図鑑」、北海道大学出版会
- ・秋田勝巳・益本仁雄 (2016)、「日本産ゴミムシダマシ大図鑑」、むし社
- ・上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (1985)、「原色日本甲虫図鑑 (Ⅱ)」、保育社
- ・黒沢良彦・久保定成・佐々治寛之 (1985)、「原色日本甲虫図鑑 (Ⅲ)」、保育社
- ・林匡夫・森本桂・木元新作 (1984)、「原色日本甲虫図鑑 (Ⅳ)」、保育社
- ・小林裕和・松本武 (2011)、「日本産コガネムシ上科図説第 3 巻」、昆虫文献六本脚

表-1 中小山岳 雁戸山 植物目録(2025年度)

No.	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
			新山ルート	笹谷峠ルート	中腹以上	県	国	
1	ヒカゲノカズラ科	ホソバトウゲシバ	●	●				
2		ヒカゲノカズラ		●				
3		マンネンスギ		●				
4	ハナヤスリ科	エゾフユノハナワラビ	●	●				
5		ナツノハナワラビ	●					
6	キジノオシダ科	ヤマソテツ	●					
7	イノモトソウ科	クジャクシダ	●	●				
8	チャセンシダ科	コタニワタリ	●					
9	ヒメシダ科	ミヤマワラビ		●				
10		ミゾシダ		●				
11		オオバショリマ		●				
12	コウヤワラビ科	イヌガンソク		●				
13	シシガシラ科	オサシダ			●			
14		シシガシラ		●				
15	メシダ科	ヤマイヌワラビ		●				
16		ヘビノネゴザ		●				
17		ホソバシケシダ		●				
18		シケシダ		●				
19		フモトシケシダ		●				
20		キヨタキシダ		●				
21	オシダ科	ホソバナライシダ		●				
22		オシダ		●				
23		シラネワラビ	●					
24		ジュウモンジシダ		●				
25	マツ科	ハッコウダゴヨウ			●			キタゴヨウ×ハイマツ
26	ヒノキ科	ネズコ	●	●	●			クロベ
27		ヒノキアスナロ	●	●	●			ヒバ
28	ウマノスズクサ科	トウゴクサイシン	●	●				
29	サトイモ科	ヒロハテンナンショウ	●					
30	チシマゼキショウ科	チシマゼキショウ			●	VU	-	
31	キンコウカ科	ネバリノギラン		●	●			
32		ノギラン		●				
33	シュロソウ科	ツクバネソウ	●					
34		エンレイソウ	●					
35		アオヤギソウ		●	●			
36	イヌサフラン科	チゴユリ	●					
37	ユリ科	ツバメオモト	●	●				
38		クルマユリ	●					
39		タケシマラン	●					
40		ヤマジノホトトギス		●				
41		タマガワホトトギス		●				
42	ラン科	エビネ	●			EN	NT	
43		キンセイラン	●			CR	VU	
44		クマガイソウ	●			EN	VU	
45		ハクサンチドリ	●					
46		アケボノシュスラン	●					
47		クモキリソウ		●				
48		オオヤマサギソウ	●	●				
49	キジカクシ科	マイヅルソウ	●					
50		ヤマトユキザサ	●	●				
51	カヤツリグサ科	コタヌキラン			●			
52		ヒメスゲ			●			
53	イネ科	ヤマヌカボ		●				
54		ヤマカモジグサ		●				
55		ホガエリガヤ	●					
56		ヒメノガリヤス		●	●			
57		コメガヤ	●					
58		イブキヌカボ	●					
59		カリヤスモドキ		●		VU	-	
60		ネズミガヤ		●				
61		タツノヒゲ		●				
62		チシマザサ		●				
63	メギ科	ヒロハヘビノボラズ	●	●				
64		ルイヨウボタン	●					
65		サンカヨウ	●					
66	キンポウゲ科	ウゼントリカブト		●	●			
67		ヤマオダマキ		●				キバナノヤマオダマキもあり
68		クサボタン		●				
69		トリガタハンショウヅル	●					
70		キクバオウレン	●					
71		シラネアオイ			●			
72		キツネノボタン		●				
73		カラマツソウ			●			
74		アキカラマツ		●	●			

No.	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
			新山ルート	笹谷峠ルート	中腹以上	県	国	
75		オオカラマツ		●				
76		ミヤマカラマツ			●			
77		モミジカラマツ		●				
78	ユキノシタ科	トリアシショウマ		●				
79		マルバネコノメソウ	●					
80		クロクモソウ		●				
81		ズダヤクシュ	●	●				
82	ベンケイソウ科	キリンソウ			●			
83	ブドウ科	ヤマブドウ		●				
84	マメ科	マルバハギ		●				
85	グミ科	アキグミ		●				
86	クロウメモドキ科	クロカンバ	●			EN	—	
87	ニレ科	オヒョウ	●					
88	バラ科	ヒメキンミズヒキ		●				
89		キンミズヒキ		●				
90		ヤマブキショウマ		●				
91		ミヤマザクラ	●					ミネザクラ
92		タカネザクラ			●			
93		アカバナシモツケソウ		●	●			
94		オオダイコンソウ		●				
95		ダイコンソウ		●				
96		シウリザクラ	●					
97		ミツモトソウ		●		VU	—	
98		ミツバツチグリ	●					
99		ミヤマキンバイ			●			
100		カマツカ		●				
101		タカネバラ			●	EN	—	
102		ゴヨウイチゴ	●	●				
103		モミジイチゴ		●				
104		ミヤマニガイチゴ	●	●	●			
105		ワレモコウ		●				
106		ナナカマド		●				
107		マルバシモツケ			●			
108		イワシモツケ		●	●			
109	ブナ科	ミヤマナラ			●			
110	カバノキ科	ミヤマカワラハンノキ		●				
111		ヤマハンノキ			●			
112		ヒメヤシャブシ		●	●			
113		ダケカンバ	●	●				
114		ウダイカンバ	●	●				
115		ツノハシバミ		●				
116	ニシキギ科	ツルウメモドキ		●				
117		コマユミ		●				
118		ヒロハノツリバナ			●			
119		サワダツ	●					
120		ツリバナ	●					
121		マユミ		●				
122		ウメバチソウ		●	●			
123	カタバミ科	ミヤマカタバミ	●					
124	ヤナギ科	バッコヤナギ	●					
125		イヌコリヤナギ		●				
126		ミヤマヤナギ		●	●			
127		キツネヤナギ		●	●			
128	スマレ科	タチツボスマレ	●	●				
129		アオイスミレ	●					
130		オオタチツボスマレ	●					
131		ナガハシスマレ			●			
132		ミヤマスマレ	●	●				
133		ツボスマレ	●					
134	オトギリソウ科	イワオトギリ			●			
135	フウロソウ科	ゲンノショウコ		●				
136		ハクサンフウロ		●				
137	アカバナ科	タニタデ		●				
138		ミズタマソウ		●				
139	ムクロジ科	ヤマモミジ		●				
140		ナンゴクミネカエデ			●			
141		ウリハダカエデ		●				
142		ミネカエデ	●					
143	ミカン科	ツルシキミ			●			
144		イヌザンショウ	●					
145	アオイ科	シナノキ	●					
146	ジンチョウゲ科	カラスシキミ		●				
147	アブラナ科	ミヤマハタザオ			●			
148		ヒロハコンロンソウ	●			VU	—	
149	タデ科	イヌタデ		●				

No.	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
			新山ルート	笹谷峠ルート	中腹以上	県	国	
150		ハナタデ		●				
151	ナデシコ科	カワラナデシコ		●				
152		オオサワハコベ	●					
153	ミズキ科	ミズキ		●				
154		ヤマボウシ		●				
155	アジサイ科	イワガラミ		●				
156		ノリウツギ		●	●			
157	サクラソウ科	コナスビ		●				
158		ユキワリコザクラ		●	●	CR	—	
159	ハイノキ科	サワフタギ		●				
160	イワウメ科	イワカガミ		●	●			
161	ツツジ科	ホツツジ		●				
162		サラサドウダン	●	●				
163		イワナシ	●					
164		エゾウラジロハナヒリノキ			●			
165		ハナヒリノキ			●			
166		ベニバナイチヤクソウ	●	●		VU	—	
167		ムラサキヤシオツツジ	●					
168		ハクサンシャクナゲ	●	●	●			
169		アズマシャクナゲ	●		●	NT	—	
170		ウラジロヨウラク	●					
171		シロヤシオ	●		●			ゴヨウツツジ
172		コメツツジ	●		●			
173		ウスノキ			●			
174		オオバスノキ			●			
175		コケモモ			●			
176	リンドウ科	エゾリンドウ		●				
177		エゾオヤマリンドウ	●					
178		フデリンドウ			●			
179		センブリ		●				
180		ツルリンドウ		●				
181		テングノコヅチ		●		VU	NT	
182	ナス科	ハシリドコロ	●					
183	モクセイ科	ミヤマアオダモ	●					
184		アオダモ	●					
185		ミヤマイボタ	●	●	●			
186	オオバコ科	クガイソウ		●				
187	シソ科	ヤマクルマバナ		●				
188		ミヤマトウバナ		●				
189		テンニンソウ		●	●			
190		ナギナタコウジュ		●				
191		クロバナヒキオコシ			●			
192		ウツボグサ		●				
193		テイネニガクサ	●			EN	NT	
194	ハマウツボ科	オオナンバンギセル		●		EN	—	
195		ミチノクコゴメグサ		●		VU	—	
196		シオガマギク		●				
197		エゾシオガマ	●	●	●			
198	ハナイカダ科	ハナイカダ	●					
199	モチノキ科	ハイイヌツゲ		●				
200		ツルツゲ			●			
201		アカミノイヌツゲ		●	●			
202	キキョウ科	ミヤマシヤジン			●			
203		ソバナ			●			
204		ツリガネニンジン		●				
205		タニギキョウ	●					
206	キク科	ノブキ		●				
207		オクモミジハグマ		●				
208		ヤマハハコ		●				
209		オトコヨモギ		●	●			
210		イヌヨモギ			●			
211		ヒトツバヨモギ			●			
212		ゴマナ		●	●			
213		ユウガギク		●				
214		タマバシロヨメナ		●				
215		ノコンギク		●				
216		シラヤマギク	●	●				
217		ノッポロガンクビソウ		●				
218		イワインチン			●	VU	—	
219		オニアザミ		●				
220		ナンブアザミ		●				
221		ウゼンアザミ			●	VU	—	
222		ザオウアザミ		●	●	NT	—	
223		ヨツバヒヨドリ		●				
224		オオヒヨドリバナ		●				

No.	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
			新山 ルート	笹谷峠 ルート	中腹以上	県	国	
225		ウスユキソウ			●			
226		カニコウモリ		●				
227		オオカニコウモリ	●	●				
228		オヤリハグマ	●	●				
229		コウゾリナ		●				
230		フボウトウヒレン	●	●	●			
231		ヤマガタウヒレン		●	●			
232		アキノキリンソウ		●	●			
233		オヤマボクチ	●	●				
234	ウコギ科	コシアブラ		●				
235		ソウシシヨウニンジン		●				
236	セリ科	ミヤマトウキ			●			
237		アマニュウ		●				
238		ミチノクヨロイグサ		●	●			
239		ミヤマセンキュウ			●			
240		オオカサモチ		●	●			
241		シラネニンジン		●				
242		イブキゼリモドキ			●			
243	ガマズミ科	オオミヤマガマズミ	●					
244		ミヤマガマズミ		●				
245	スイカズラ科	ウゴツクバネウツギ			●			
246		クロミノウグイスカグラ			●			
247		クロブシヒョウタンボク	●			CR	CR	
248		アラゲヒョウタンボク	●		●			
249		オミナエシ		●		VU	—	
250		オトコエシ		●				
251		ベニバナニシキウツギ		●	●			
252		タニウツギ		●	●			
253		キバナウツギ	●		●	VU	—	
計	253		85	152	78			

【植物目録の仕様】

◎科名、和名及び配列は、主に以下によった。

新山形県野生植物目録編集委員会編集(2019).新山形県野生植物目録2019.116pp.フロラ山形

◎凡例

●: 2025年現地調査で確認した種

表-2 中小山岳 雁戸山 動物目録(2025年度)

No.	目	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
				新山ルート	笹谷峠	蔵王ダム	県	国	
昆虫類	1	トンボ目	カワトンボ科	ニホンカワトンボ	●		●		
	2	トンボ目	カワトンボ科	ハグロトンボ			●		
	3	トンボ目	トンボ科	アキアカネ			●		
	4	トンボ目	トンボ科	ノシメトンボ			●		
	5	トンボ目	トンボ科	シオカラトンボ			●		
	6	バッタ目	バッタ科	ミヤマヒナバッタ		●			
	7	バッタ目	バッタ科	コバネイナゴ			●		
	8	バッタ目	バッタ科	ヒナバッタ			●		
	9	バッタ目	キリギリス科	ヒメクサキリ			●		
	10	バッタ目	キリギリス科	アシグロツユムシ			●		
	11	バッタ目	コオロギ科	エンマコオロギ		●	●		
	12	バッタ目	コオロギ科	ツツレサセコオロギ		●	●		
	13	バッタ目	コオロギ科	ハラオカメコオロギ			●		
	14	バッタ目	ヒバリモドキ科	シバズ			●		
	15	バッタ目	ヒバリモドキ科	マダラスズ		●	●		
	16	バッタ目	マツムシ科	カンタン		●	●		
	17	ハサミムシ目	クギヌキハサミムシ科	キバネハサミムシ		●	●		
	18	カメムシ目	セミ科	エゾハルゼミ	●				
	19	カメムシ目	カメムシ科	クサギカメムシ		●	●		
	20	カメムシ目	カメムシ科	チャバネアオカメムシ		●			
	21	カメムシ目	カメムシ科	クヌギカメムシ			●		
	22	カメムシ目	カメムシ科	ツマジロカメムシ			●		
	23	カメムシ目	カメムシ科	トゲカメムシ			●		
	24	カメムシ目	カメムシ科	スコットカメムシ		●			
	25	カメムシ目	ヘリカメムシ科	ツマキヘリカメムシ	●		●		
	26	カメムシ目	ヘリカメムシ科	オオツマキヘリカメムシ	●				
	27	カメムシ目	ヘリカメムシ科	ホソヘリカメムシ			●		
	28	カメムシ目	ナガカメムシ科	コバネヒョウタンナガカメムシ		●			
	29	カメムシ目	サシガメ科	ハネナシサシガメ			●		
	30	カメムシ目	マキバサシガメ科	コマキバサシガメ			●		
	31	カメムシ目	オオヨコバイ科	オオヨコバイ			●		
	32	カメムシ目	オオヨコバイ科	ツマグロオオヨコバイ	●		●		
	33	カメムシ目	アワフキムシ科	マダラアワフキ	●				
	34	カメムシ目	コガシラアワフキ科	コガシラアワフキ		●			
	35	カメムシ目	アメンボ科	シマアメンボ(長翅形)		●			
	36	コウチュウ目	オサムシ科	ホソアトキリゴミムシ		●			
	37	コウチュウ目	ハネカクシ科	ルリコガシラハネカクシ	●				
	38	コウチュウ目	ハネカクシ科	アリガタハネカクシ	●				
	39	コウチュウ目	コガシラアワフキ科	ヤマトビロウドコガネ		●			
	40	コウチュウ目	ベニボタル科	カクムネベニボタル	●				
	41	コウチュウ目	ハムシダマシ科	アカイロアオハムシダマシ	●				
	42	コウチュウ目	ハムシダマシ科	クロケブカナガハムシダマシ	●				
	43	コウチュウ目	ハムシダマシ科	オオメキバネハムシダマシ	●				
	44	コウチュウ目	ケシキスイ科	ヒメヒラタケシキスイ	●				
	45	コウチュウ目	ケシキスイ科	クロハナケシキスイ		●			
	46	コウチュウ目	クビナガムシ科	クビナガムシ	●				
	47	コウチュウ目	カミキリムシ科	オオヒメハナカミキリ	●				
	48	コウチュウ目	カミキリムシ科	ヒナルリハナカミキリ	●				
	49	コウチュウ目	タマムシ科	ヤナギチビタマムシ		●			
	50	コウチュウ目	タマムシ科	クズノチビタマムシ		●			
	51	コウチュウ目	ハムシ科	チャイロサルハムシ	●				
	52	コウチュウ目	ハムシ科	チャバネツヤハムシ	●				
	53	コウチュウ目	ハムシ科	クロズアラメハムシ	●				
	54	コウチュウ目	ハムシ科	カバノキハムシ	●				
	55	コウチュウ目	ハムシ科	ウリハムシ		●	●		
	56	コウチュウ目	ハムシ科	クロウリハムシ			●		
	57	コウチュウ目	ハムシ科	ミヤマヒラタハムシ		●			
	58	コウチュウ目	ハムシ科	ルイスクビナガハムシ	●				
	59	コウチュウ目	ハムシ科	ニレハムシ		●			
	60	コウチュウ目	ハムシ科	イタドリハムシ	●				
	61	コウチュウ目	ハムシ科	ヤナギルリハムシ		●			
	62	コウチュウ目	テントウムシ科	ナミテントウ		●			
	63	コウチュウ目	テントウムシ科	シロジュウロクホシテントウ			●		
	64	コウチュウ目	ジョウカイボン科	ジョウカイボン	●				
	65	コウチュウ目	ジョウカイボン科	クロジョウカイ	●				
	66	コウチュウ目	ジョウカイボン科	セスジジョウカイ	●				
	67	コウチュウ目	ジョウカイボン科	ウスイロクビボソジョウカイ	●				
	68	コウチュウ目	オトシブミ科	オトシブミ	●				
	69	コウチュウ目	オトシブミ科	ゴマダラオトシブミ			●		
	70	コウチュウ目	オトシブミ科	ウスアカオトシブミ		●			
	71	コウチュウ目	オトシブミ科	ヒゲナガオトシブミ	●				
	72	コウチュウ目	オトシブミ科	コブルリオトシブミ	●				
	73	コウチュウ目	オトシブミ科	ビロードアシナガオトシブミ	●				
	74	コウチュウ目	オトシブミ科	ルリオトシブミ	●				
	75	コウチュウ目	オトシブミ科	カシルリオトシブミ	●				
	76	コウチュウ目	オトシブミ科	ドロハマチョッキリ	●				
	77	コウチュウ目	ゾウムシ科	キスジアシナガゾウムシ			●		
	78	コウチュウ目	ゾウムシ科	シラホシヒメゾウムシ		●			
	79	コウチュウ目	ゾウムシ科	カツオゾウムシ			●		
	80	コウチュウ目	ゾウムシ科	マツアナキゾウムシ	●				
	81	コウチュウ目	ゾウムシ科	リンゴアナキゾウムシ		●			

No.	目	科	和名	調査箇所			RDBカテゴリー		備考
				新山 ルート	笹谷 峠	蔵王 ダム	県	国	
82	コウチュウ目	ゾウムシ科	アキグミシギゾウムシ		●				
83	コウチュウ目	ゾウムシ科	クリシギゾウムシ		●				
84	ハチ目	スズメバチ科	コアシナガバチ			●			
85	ハチ目	スズメバチ科	フタモンアシナガバチ			●			
86	ハチ目	スズメバチ科	オオスズメバチ	●					
87	ハチ目	スズメバチ科	シダクロスズメバチ	●					
88	ハエ目	ハナアブ科	ハナアブ			●			
89	ハエ目	ハナアブ科	オオハナアブ			●			
90	ハエ目	ハナアブ科	シロスジベッコウハナアブ			●			
91	ハエ目	ハナアブ科	ホソヒラタアブ			●			
92	ハエ目	ハナアブ科	スズキナガハナアブ			●			
93	ハエ目	ガガンボ科	マダラガガンボ		●				
94	ハエ目	ミバエ科	キイロケブカミバエ	●					
95	シリアゲムシ目	シリアゲムシ科	ブライアシリアゲ	●					
96	シリアゲムシ目	ガガンボモドキ科	トガリバガガンボモドキ			●			
97	チョウ目	アゲハチョウ科	オナガアゲハ	●					
98	チョウ目	シロチョウ科	スジグロシロチョウ			●			
99	チョウ目	シロチョウ科	ヤマトスジグロシロチョウ			●			
100	チョウ目	シロチョウ科	キタキチョウ			●			
101	チョウ目	シジミチョウ科	ルリシジミ			●			
102	チョウ目	タテハチョウ科	ミドリヒョウモン			●			
103	チョウ目	タテハチョウ科	オオウラギンスジヒョウモン			●			
104	チョウ目	タテハチョウ科	アカタテハ	●					
105	チョウ目	タテハチョウ科	サカハチチョウ			●			
106	チョウ目	タテハチョウ科	イチモンジチョウ			●			
107	チョウ目	タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ			●			
108	チョウ目	タテハチョウ科	ヒメキマダラヒカゲ	●					
109	チョウ目	タテハチョウ科	クロヒカゲ			●			
110	チョウ目	タテハチョウ科	ツマジロウラジャノメ			●			
111	チョウ目	タテハチョウ科	アサギマダラ	●					
112	チョウ目	セセリチョウ科	イチモンジセセリ		●				
113	チョウ目	セセリチョウ科	オオチャバネセセリ		●				
114	チョウ目	コウモリガ科	コウモリガ		●				
115	チョウ目	イカリモンガ科	イカリモンガ	●					
116	チョウ目	スズメガ科	クロホウジャク		●				
117	チョウ目	スズメガ科	ホシヒメホウジャク		●				
118	チョウ目	シャクガ科	オオトビエダシャク			●			
119	チョウ目	シャクガ科	スギタニシロエダシャク			●			
120	チョウ目	シャクガ科	シロツバメエダシャク		●	●			
121	チョウ目	シャクガ科	ツマキエダシャク		●				
122	チョウ目	メイガ科	オオウスベニトガリメイガ			●			
123	チョウ目	ツトガ科	ホシオビホソメイガ			●			
124	チョウ目	ツトガ科	シロオビノメイガ		●				
125	チョウ目	ツトガ科	クロスジノメイガ			●			
両生類	126	無尾目	アカガエル科	●					
計	126			44	39	56			

【動物目録の仕様】

◎目、科の配列は主に以下によった。

大津高編修(2004)山形県陸産淡水産動物目録(改訂版). 358pp, 山形県動物環境調査会, 山形.

◎希少動物については以下によった。

山形県(2019)「レッドデータブックやまがた2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」. 334pp

◎分類・和名については最新版の書籍を使用した。

◎凡例

●:2025年の現地調査で確認した種

3 湿原・湿地 谷地幅湿原

(1) 調査趣旨

2016年に当センターで貴重な動植物の分布状況について、調査を実施している。今回、調査当時の貴重な動植物の分布状況に変化が見られるか把握することを目的に調査を実施した。

(2) 調査地の概要

当調査地は、朝日山系北部に位置する標高約780mの小規模な谷形の湿地である。山形大学農学部附属やまがたフィールド科学センターが、上名川演習林として管理している。

湿地周辺の植生については、ブナの二次林や湿性草原を囲む灌木類によって構成されている。

<調査箇所位置図>

○ 調査範囲



(3) 調査日、調査箇所及び調査者

調査は以下のとおり実施した。

植物相・動物（昆虫等）相 調査箇所 谷地幅湿原

調査日 2025年6月16日

調査者 横倉 明、白壁洋子、笹渕健市、櫛田博郎、新藤道人、辻 浩子

調査日 2025年8月26日

調査者 横倉 明、白壁洋子、笹渕健市、榎田博郎、新藤道人、辻 浩子

(4) 調査方法

① 植物相

2016年に当センターで実施したモニタリング調査の結果を踏まえながら、その後の変化を調べるため、湿原の種を調査し、改めて植物目録を作成した。併せて、植物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を確認した。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については採取し、後日同定を行った。

② 動物（昆虫等）相

2016年に当センターで実施したモニタリング調査の結果を踏まえながら、その後の変化を調べるため、湿原を踏査し、昆虫を中心に捕虫網などによる捕獲調査を行った。確認できた種については目録を作成し、動物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を明らかにした。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については持ち帰り、後日同定を行った。

(5) 調査結果

① 植物相

確認された維管束植物は77種である（表－1参照）。うち絶滅危惧種、注目すべき種及び前回調査時に確認された絶滅危惧種は以下のとおりである（(7)調査時の写真参照）。

○絶滅危惧Ⅱ類（VU）

ヤチスギラン、トキソウ

○準絶滅危惧（NT）

カキラン

○2016年に当センターで実施した調査で生育が確認された絶滅危惧種

サワラン（EN）、ヤチスギラン（VU）、トキソウ（VU）、ヤマトキソウ（VU）、カキラン（NT）

今回の調査で、サワラン、ヤマトキソウは確認されなかったが、ヤマトキソウはトキソウの同定誤りと思われる。サワランは、調査の時期的に確認できなかっただけで、生育するものと思われる。

○絶滅危惧種と注目すべき種について

●ヤチスギラン（ヒカゲノカズラ科）*Lycopodiella inundata* (L.) Holub
（県VU、国－）

ミズゴケ類が生える湿地を好み、匍匐して広がるヒカゲノカズラ科の小葉植物である。湿地表面を這って成長するため、踏み付けには注意が必要である。当

調査地のような寒い地方の貧栄養湿原に分布し、浮島上にも出現することもある。

県内においては十数か所の湿原で現存しているが、周辺の森林伐採や管理放棄により乾燥化や低木林化が進み、徐々に減少しつつあることが懸念される。

●トキソウ（ラン科）*Pogonia japonica* Rchb. f.（県 VU、国 NT）

日当りのよい低山地の貧栄養な湿地に生える多年草で、全県で生育を見るが、本産地は県内で一番標高の高い所に分布していると思われる。園芸採取により減少している種であり、また生育地となる貧栄養な湿地の環境が、灌木やヨシなどの侵入による富栄養化や湿地の遷移などで変化することによっても、絶滅の危機にあり、当湿原においても同様である。

当湿原では、ミズゴケ類の生育がない湿った箇所、多数見ることができた。

●カキラン（ラン科）*Epipactis thunbergii* A. Gray（県 NT、国一）

日当たりのよい湿った草原や湿地に見られるラン科植物であったが、柿色をした美しいランで、乱獲され、園芸採取が後を絶たない。

当湿原の一部に 100 個体ほどが広がりを見せていた。現地は関係者のみ届け出による入林のため、その性格上、盗掘の心配は少ないと思われるが、低木林化による植生遷移が進展し減少することが懸念される。

（記：沢 和浩、白壁洋子）

② 動物（昆虫）相

今回の調査では、昆虫類 117 種を確認することができた（表-2 参照）。うち絶滅危惧種はハッチョウトンボ（県 NT、国一）を確認することができた。

ハッチョウトンボは、6月16日の調査では発生前のようであったが、8月26日の調査で確認できた。ただ、発生末期の様子で個体数も少なく、3頭のみの確認であった。（（7）調査時の写真 参照）。

○準絶滅危惧（NT）

ハッチョウトンボ

○その他注目すべき種

オオミズクサハムシ（オオネクイハムシ）

○2016年に当センターで実施した調査で生息が確認された絶滅危惧種

県絶滅危惧種の生息は確認されなかった。

○絶滅危惧種について

●ハッチョウトンボ（トンボ科）*Nannophya pygmaea*（県 NT、国一）

日本一小さなトンボとして知られており、世界でも最小クラスの大きさである。♂は成熟すると真っ赤になり、体長が 20 mm に満たない大きさであるが、生息湿地では目立つ存在である。♀は褐色で目立たない色彩をしている。

ミズゴケやモウセンゴケが生育するような、極浅い水域が広がっている湿原に生息している。本種の生息に適した湿原域は狭く、個体数も多くなかった。正確な生息個体数を把握するには、適期である7月頃の調査が必要であると思われる。

○注目すべき種について

●オオミズクサハムシ（ハムシ科） *Plateumaris constricticollis*

北海道、東北地方に生息している本種は亜種のエゾオオミズクサハムシと呼ばれる。前胸背板と上翅の色が異なり、前胸背板は銅色で、上翅は黒紫色、肢は全体に赤褐色であることで区別される。ミズバショウやハンノキの生育している湿原に生息している。8mmほどの小さな甲虫で、光沢があり美しく、人気のある種である。

6月の調査では多数の個体を確認でき、県内でも屈指の個体数の多い産地であり、湿原の状態を知るには良い指標昆虫と思われる。

オオミズクサハムシの和名であるが、以前はオオネクイハムシの和名が一般的であったため現在でも使用される場合がある。

（記：横倉 明）

③ 動物（両生類）相

今回の調査では、両生類のアカハライモリ（県NT、国NT）が確認された（表—2参照）。

○絶滅危惧種について

●アカハライモリ（イモリ科） *Cynops pyrrhogaster*（県NT、国NT）

本種は、谷地幅の湿地内で確認された。

（詳細は、鳥海山麓湖沼群の調査結果を参照のこと）

（記：榎田博郎）

（6）今後の保全対策及びまとめ

① 植物相について

当調査地は標高およそ800mに広がる湿原である。大学の演習林内ということもあり、一般人の出入りは禁止されている。そのため、ラン科植物などの盗掘や湿地内への人の立ち入りなどの影響は少ないと考えられる。また、帰化種の侵入も見られなかった。出入り禁止の状態を維持しているためと思われる。

山地の湿地帯でも、イノシシが蒐場として利用している現場を見かけることが多くなった。当湿原でもヤチスギランやラン科植物の生育する数か所で、掘り起こしの跡が確認された。この状況が続けば、湿地の乾燥化や植生の喪失が進み、湿原の環境に重大な影響を及ぼすことになるため、下部の林道から道を伝ってイノシシが容易に侵入できないような柵の設置などの手立てを緊急に行う必要がある。

トキソウやヤチスギランなどが生育する環境の湿地が維持されるために、すでに

侵入しているハイイヌツゲなどの低木類やヨシの抜き取りが必要と思われる。

また、自然遷移や環境の変化を長期的に把握する意味でも、定期的にモニタリング調査を行う必要があると思われる。

(記：沢 和浩、白壁洋子)

② 動物（昆虫）相について

湿原はハッチョウトンボが生息できるような浅い湿地が少なく、藪化が進行しているように見受けられた。しかし、ミズバショウが生育しているような少し丈の高い植物の生育する湿地で、オオミズクサハムシが多数確認できた。今後どのような変遷をたどるのか見守る必要があると思われる。

湿原にはセンブリ類が多く見られ、センブリ科（アミメカゲロウ目センブリ科）の一種として記録したが、クロセンブリを含む数種類が混生している可能性もあり、種としての同定が確定できないままの報告となった。この湿原に特有なものなのか、今後明らかにしていきたい。

(記：横倉 明)

(7) 調査時の写真



調査地の様子



調査地の様子



調査の様子



調査の様子

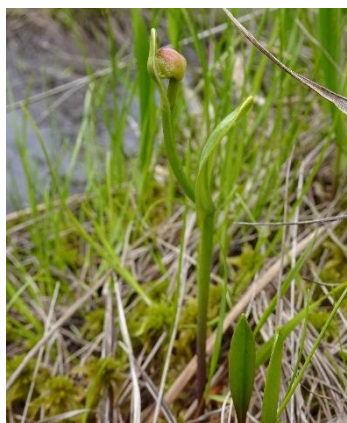
① 植物相



ヤチスギラン (絶滅危惧Ⅱ類)



トキソウ (絶滅危惧Ⅱ類)



トキソウ (絶滅危惧Ⅱ類)



カキラン (準絶滅危惧)



ミズバショウ (斑入り)

② 動物 (昆虫等) 相



ハッチョウトンボ♂ (準絶滅危惧)



ハッチョウトンボ♀ (準絶滅危惧)



オオミズクサハムシ



ルリボシヤンマ



オオコオイムシ



センブリ科の一種



アカハライモリ（準絶滅危惧）

(8) 参考、引用文献

- ・山形県（2013）、「レッドデータブックやまがた絶滅危惧野生植物 2013 年改訂版」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・山形県（2019）、「レッドデータブックやまがた 2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・山形県（2017）、「平成 28 年度自然生態系保全モニタリング調査報告書」、山形県環境科学研究センター
- ・環境省編（2014）、「レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生動物 5 昆虫類」
- ・櫻井俊一（2016）、「山形県の甲虫 3000 種 文献記録と採集記録」、自費出版
- ・尾園暁・川島逸郎、二橋亮(2012)、「日本のトンボ」文一総合出版
- ・木俣 繁（1999）、「山形県立博物館収蔵資料目録動物資料目録 3（昆虫Ⅱ）」、山形県立博物館
- ・阪本優介（2018）、「テントウムシ ハンドブック」、文一総合出版
- ・秋田勝巳・益本仁雄（2016）、「日本産ゴミムシダマシ大図鑑」、むし社
- ・上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（1985）、「原色日本甲虫図鑑（Ⅱ）」、保育社
- ・黒沢良彦・久保定成・佐々治寛之（1985）、「原色日本甲虫図鑑（Ⅲ）」、保育社
- ・林匡夫・森本桂・木元新作（1984）、「原色日本甲虫図鑑（Ⅳ）」、保育社
- ・小林裕和・松本武（2011）、「日本産コガネムシ上科図説第 3 巻」、昆虫文献六本脚

表-1 湿原・湿地 谷地幅湿原 植物目録(2025年度)

No.	科	和名	調査箇所	RDBカテゴリー		備考
			谷地幅湿原	県	国	
1	ヒカゲノカズラ科	ヤチスギラン	●	VU	-	斑入り多し
2	ゼンマイ科	ゼンマイ	●			
3		ヤマドリゼンマイ	●			
4	ヒメシダ科	ヒメシダ	●			
5	シシガシラ科	シシガシラ	●			
6	モクレン科	ホオノキ	●			
7		タムシバ	●			
8	クスノキ科	オオバクロモジ	●			
9	サトイモ科	ミズバショウ	●			
10	キンコウカ科	キンコウカ	●			
11	シュロソウ科	ショウジョウバカマ	●			
12		コバイケイソウ	●			
13	イヌサフラン科	チゴユリ	●			
14	ラン科	カキラン	●	NT	-	
15		コバノトンボソウ	●			
16		トキソウ	●	VU	NT	
17	キジカクシ科	コバギボウシ	●			
18		マイヅルソウ	●			
19	カヤツリグサ科	カワズスゲ	●			
20		ナガボノコジュズスゲ	●			
21		ミカツキグサ	●			
22		コイヌノハナヒゲ	●			
23		ホタルイ	●			
24		アブラガヤ	●			
25	イネ科	ヌマガヤ	●			
26		ヨシ	●			
27	キンポウゲ科	キツネノボタン	●			
28	マンサク科	マルバマンサク	●			
29	ユズリハ科	エゾユズリハ	●			
30	マメ科	イヌエンジュ	●			
31	イラクサ科	ウワバミソウ	●			
32	バラ科	アズキナシ	●			
33		ウワミズザクラ	●			
34		ナナカマド	●			
35	ブナ科	ブナ	●			
36		ミヤマナラ	●			
37	カバノキ科	ミヤマカワラハンノキ	●			
38	ニシキギ科	クロヅル	●			
39	スマレ科	アギスマレ	●			
40	オトギリソウ科	ミズオトギリ	●			
41		サワオトギリ	●			
42	アカバナ科	アカバナ	●			
43	ウルシ科	ヌルデ	●			
44		ツタウルシ	●			
45		ヤマウルシ	●			
46	ムクロジ科	ヤマモミジ	●			
47		ウリハダカエデ	●			
48		ミネカエデ	●			
49	タデ科	オオイタドリ	●			
50		ミゾソバ	●			
51	モウセンゴケ科	モウセンゴケ	●			
52	ミズキ科	ミズキ	●			
53	アジサイ科	イワガラミ	●			
54		ノリウツギ	●			
55	ハイノキ科	サワフタギ	●			
56	リョウブ科	リョウブ	●			
57	ツツジ科	ハナヒリノキ	●			
58		ムラサキヤシオツツジ	●			
59		ハクサンシャクナゲ	●			
60		ヤマツツジ	●			
61		ウラジロヨウラク	●			
62		アキシバ	●			
63	アカネ科	ツルアリドオシ	●			
64	モクセイ科	アオダモ	●			

No.	科	和名	調査箇所	RDBカテゴリー		備考
			谷地幅湿原	県	国	
65		ヤチダモ	●			
66	ハマウツボ科	オニシオガマ	●			
67	モチノキ科	ハイイヌツゲ	●			
68		ヒメモチ	●			
69		ミヤマウメモドキ	●			
70	キク科	オオヒヨドリバナ	●			
71		ハンゴンソウ	●			
72		アキノキリンソウ	●			
73	ウコギ科	コシアブラ	●			
74	ガマズミ科	オオカメノキ	●			
75		ミヤマガマズミ	●			
76	スイカズラ科	タニウツギ	●			
蘇苔類	77	ミズゴケ科	●			
計	77		77			

【植物目録の仕様】

◎科名、和名及び配列は、主に以下によった。

新山形県野生植物目録編集委員会編集(2019).新山形県野生植物目録2019.116pp.フロラ山形

◎凡例

●: 2025年現地調査で確認した種

表-2 湿原・湿地 谷地幅湿原 動物目録(2025年度)

No.	目	科	和名	調査箇所 谷地幅湿原	RDBカテゴリー		備考
					県	国	
昆虫類	1	トンボ目	イトトンボ科	オゼイトトンボ	●	NT	—
	2	トンボ目	オニヤンマ科	オニヤンマ			
	3	トンボ目	ヤンマ科	ルリボシヤンマ			
	4	トンボ目	トンボ科	アキアカネ			
	5	トンボ目	トンボ科	ノシメトンボ			
	6	トンボ目	トンボ科	シオヤトンボ			
	7	トンボ目	トンボ科	ミヤマアカネ			
	8	トンボ目	トンボ科	ウスバキトンボ			
	9	トンボ目	トンボ科	シオカラトンボ			
	10	トンボ目	トンボ科	オオシオカラトンボ			
	11	トンボ目	トンボ科	ハッチョウトンボ			
	12	カマキリ目	カマキリ科	オオカマキリ			
	13	バッタ目	バッタ科	コバネイナゴ			
	14	バッタ目	バッタ科	ミカドフキバッタ			
	15	バッタ目	バッタ科	ハネナガフキバッタ			
	16	バッタ目	キリギリス科	ツユムシ			
	17	バッタ目	キリギリス科	ヒメギス			
	18	バッタ目	キリギリス科	オナガササキリ			
	19	バッタ目	コオロギ科	エンマコオロギ			
	20	バッタ目	コオロギ科	タンボコオロギ			
	21	バッタ目	ヒバリモドキ科	ヤチスズ			
	22	バッタ目	ヒバリモドキ科	シバズ			
	23	ナナフシ目	トビナナフシ科	シラキトビナナフシ			
	24	カメムシ目	セミ科	エゾハルゼミ			
	25	カメムシ目	セミ科	ミンミンゼミ			
	26	カメムシ目	セミ科	コエゾゼミ			
	27	カメムシ目	カメムシ科	エゾアオカメムシ			
	28	カメムシ目	カメムシ科	クサギカメムシ			
	29	カメムシ目	カメムシ科	アカスジキンカメムシ			
	30	カメムシ目	カメムシ科	チャバネアオカメムシ			
	31	カメムシ目	カメムシ科	オオトゲシラホシカメムシ			
	32	カメムシ目	ツノカメムシ科	アオモンカメムシ			
	33	カメムシ目	ヘリカメムシ科	オオツマキヘリカメムシ			
	34	カメムシ目	ナガカメムシ科	キベリヒョウタンナガカメムシ			
	35	カメムシ目	カスミカメムシ科	アカアシカスミカメ			
	36	カメムシ目	コオイムシ科	オオコオイムシ			
	37	カメムシ目	オオヨコバイ科	オオヨコバイ			
	38	カメムシ目	オオヨコバイ科	ツマグロオオヨコバイ			
	39	カメムシ目	アワフキムシ科	マエキアワフキ			
	40	カメムシ目	コガシラアワフキ科	コガシラアワフキ			
	41	カメムシ目	ハゴロモ科	ベッコウハゴロモ			
	42	カメムシ目	アメンボ科	アメンボ			
	43	カメムシ目	アメンボ科	ヒメアメンボ			
	44	アミメカゲロウ目	センブリ科	センブリの一種			
	45	コウチュウ目	ハンミョウ科	マガタマハンミョウ			
	46	コウチュウ目	ハネカクシ科	アリガタハネカクシ			
	47	コウチュウ目	クワガタムシ科	ユキグニコルリクワガタ			
	48	コウチュウ目	コガネムシ科	ヒメアシナガコガネ			
	49	コウチュウ目	コガネムシ科	ドウガネブイブイ			
	50	コウチュウ目	コガネムシ科	ルイスチャイロコガネ			
	51	コウチュウ目	ベニボタル科	クシヒゲベニボタル			
	52	コウチュウ目	ジョウカイボン科	アオジョウカイ			
	53	コウチュウ目	ジョウカイボン科	セスジジョウカイ			
	54	コウチュウ目	ジョウカイボン科	ウスイロクビボソジョウカイ			
	55	コウチュウ目	ハムシダマシ科	ナミアオハムシダマシ			
	56	コウチュウ目	ハムシダマシ科	オオメキバネハムシダマシ			
	57	コウチュウ目	クビナガムシ科	クビナガムシ			
	58	コウチュウ目	ケシキスイ科	クロハナケシキスイ			
	59	コウチュウ目	カミキリムシ科	セスジヒメハナカミキリ			
	60	コウチュウ目	カミキリムシ科	ヤツボシハナカミキリ			
	61	コウチュウ目	カミキリムシ科	カラカネハナカミキリ			
	62	コウチュウ目	カミキリムシ科	シロスジカミキリ			
	63	コウチュウ目	カミキリムシ科	アトモンサビカミキリ			
	64	コウチュウ目	タマムシ科	ヤナギチビタマムシ			
	65	コウチュウ目	コメツキムシ科	ダイミョウコメツキ			
	66	コウチュウ目	コメツキムシ科	シモフリコメツキ			
	67	コウチュウ目	コメツキムシ科	ヒメシモフリコメツキ			
	68	コウチュウ目	コメツキムシ科	キバネホソコメツキ			
	69	コウチュウ目	ハムシ科	オオミズクサハムシ			
	70	コウチュウ目	ハムシ科	チャイロサルハムシ			
	71	コウチュウ目	ハムシ科	ウリハムシ			
	72	コウチュウ目	ハムシ科	クロウリハムシ			
	73	コウチュウ目	ハムシ科	ルリハムシ			

亜種名: エゾオオミズクサハムシ

No.	目	科	和名	調査箇所 谷地幅湿原	RDBカテゴリー		備考
					県	国	
74	コウチュウ目	ハムシ科	ハギツツハムシ	●			
75	コウチュウ目	ハムシ科	タテスジキツツハムシ	●			
76	コウチュウ目	ハムシ科	イタドリハムシ	●			
77	コウチュウ目	ハムシ科	ヤナギルリハムシ	●			
78	コウチュウ目	テントウムシ科	シロジュウゴホシテントウ	●			
79	コウチュウ目	カミキリモドキ科	モモフトカミキリモドキ	●			
80	コウチュウ目	カミキリモドキ科	クロアオカミキリモドキ	●			
81	コウチュウ目	ヒゲナガゾウムシ科	カオジロヒゲナガゾウムシ	●			
82	コウチュウ目	ゾウムシ科	クワヒョウタンゾウムシ	●			
83	コウチュウ目	オトシブミ科	ヒゲナガオトシブミ	●			
84	コウチュウ目	オトシブミ科	カシルリオトシブミ	●			
85	ハチ目	スズメバチ科	トックリバチ	●			
86	ハチ目	ミツバチ科	トラマルハナバチ	●			
87	ハエ目	ハナバチ科	ヤマトヒゲナガハナアブ	●			
88	ハエ目	ツリアブ科	スズキハラボソツリアブ	●			
89	シリアゲムシ目	シリアゲムシ科	ヤマトシリアゲ	●			
90	シリアゲムシ目	シリアゲムシ科	プライヤシリアゲ	●			
91	チョウ目	アゲハチョウ科	カラスアゲハ	●			
92	チョウ目	シロチョウ科	スジグロシロチョウ	●			
93	チョウ目	シジミチョウ科	ツバメシジミ	●			
94	チョウ目	タテハチョウ科	ミドリヒョウモン	●			
95	チョウ目	タテハチョウ科	コムラサキ	●			
96	チョウ目	タテハチョウ科	コムスジ	●			
97	チョウ目	タテハチョウ科	イチモンジチョウ	●			
98	チョウ目	タテハチョウ科	サカハチチョウ	●			
99	チョウ目	タテハチョウ科	クロヒカゲ	●			
100	チョウ目	タテハチョウ科	ヒメキマダラヒカゲ	●			
101	チョウ目	セセリチョウ科	イチモンジセセリ	●			
102	チョウ目	セセリチョウ科	コチャバネセセリ	●			
103	チョウ目	アゲハモドキガ科	キンモンガ	●			
104	チョウ目	シャクガ科	ツマキリエダシャク	●			
105	チョウ目	シャクガ科	コナフキエダシャク	●			
106	チョウ目	シャクガ科	ツマトビシロエダシャク	●			
107	チョウ目	シャクガ科	シラフシロオビナミシャク	●			
108	チョウ目	シャクガ科	ツマキエダシャク	●			
109	チョウ目	シャクガ科	フタマエホシエダシャク	●			
110	チョウ目	シャクガ科	ヘリグロマダラエダシャク	●			
111	チョウ目	シャクガ科	オオシロエダシャク	●			
112	チョウ目	シャクガ科	シロオビクロナミシャク	●			
113	チョウ目	シャクガ科	アトボシエダシャク	●			
114	チョウ目	コブガ科	ギンボシリンガ	●			
115	チョウ目	スズメガ科	ヒメクチバスズメ	●			
116	チョウ目	スズメガ科	クロホウジャク	●			
117	チョウ目	ヒゲナガガ科	ケブカヒゲナガ	●			
両生類	118 有尾目	イモリ科	アカハライモリ	●	NT	NT	
計	118			118			

【動物目録の仕様】

◎目、科の配列は主に以下によった。

大津高編修(2004)山形県陸産淡水産動物目録(改訂版). 358pp, 山形県動物環境調査会, 山形.

◎希少動物については以下によった。

山形県(2019)「レッドデータブックやまがた2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」. 334pp

◎分類・和名については最新版の書籍を使用した。

◎凡例

●:2025年の現地調査で確認した種

4 草地・風穴 山形空港

(1) 調査趣旨

当センターでは、2004、2005、2006、2008年に貴重な動植物の分布状況について、調査を実施している。今回、その調査から10年以上の年月が経過していることから、調査当時の貴重な動植物の分布状況に変化が見られるか把握することを目的に、山形空港において調査を実施した。

(2) 調査地の概要

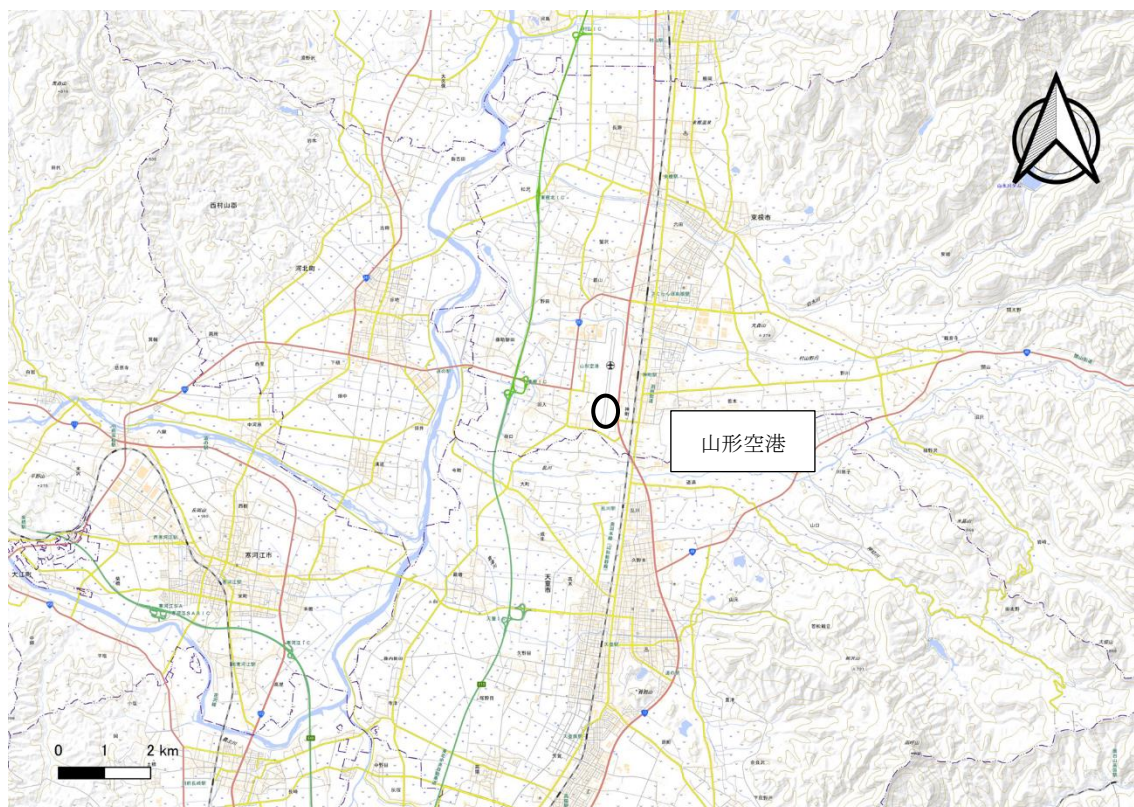
調査地の山形空港が位置する乱川扇状地（東根市、天童市）は、北は白水川から南は押切川まで広がる県内最大の複合扇状地である。かつては扇状地の中心に若木原と呼ばれる広大な原野が広がっていたが、戦前から開拓が進み、戦後はほぼ果樹園に置き換わっている。

調査地は、戦前に従来の草原を剥ぎ取らずに造成され、定期的な草刈りにより草原が維持されていること、一般の立ち入りが制限されていることから、現在も若木原の植生が奇跡的に残っている。

植生の分布については、オキナグサやクサボケの群落など、草原に生育する絶滅危惧種が確認されている。

<調査箇所位置図>

○ 調査範囲



(3) 調査日、調査箇所及び調査者

調査日及び調査者は以下のとおり。

植物相・動物（昆虫等）相

調査箇所 山形空港滑走路の西側、東側箇所

調査日 2025年5月19日

調査者 横倉 明、白壁洋子、笹渕健市、櫛田博郎、新藤道人、辻 浩子

調査日 2025年9月11日

調査者 横倉 明、白壁洋子、櫛田博郎、新藤道人、辻 浩子

（レッドデータ改訂調査の調査員同行）

(4) 調査方法

① 植物相

2004、2005、2006、2008年に当センターで実施したモニタリング調査の結果を踏まえながら、その後の変化を調べるため、調査地の種を調査し、改めて植物目録を作成した。併せて、植物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を確認した。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については採取し、後日同定した。

② 動物（昆虫等）相

2004、2005、2006、2008年に当センターで実施したモニタリング調査の結果を踏まえながら、昆虫中心に捕虫網などによる捕獲調査を行った。確認できた種については目録を作成し、動物（昆虫等）相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を明らかにした。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については持ち帰り、後日同定を行った。

(5) 調査結果

① 植物相

確認された維管束植物は115種である（表－1参照）。うち絶滅危惧種及び前回調査時に確認された絶滅危惧種は以下のとおりである（(7)調査時の写真参照）。

○滅危惧ⅠA類（CR）

オキナグサ、ヒロハノカワラサイコ

○滅危惧ⅠB類（EN）

メガルカヤ、クサボケ

○絶滅危惧Ⅱ類（VU）

イヌハギ、スズサイコ、アオヤギバナ

○その他の注目すべき種

シベリアメドハギ

○2004、2005、2006、2008年に当センターで実施した調査で生育が確認された絶滅危惧種

オキナグサ (CR)、ヒロハノカワラサイコ (CR)、コケリンドウ (CR)、アイナエ (CR)、メガルカヤ (EN)、クサボケ (EN)、カワラニガナ (EN)、イヌハギ (VU)、スズサイコ (VU)、アオヤギバナ (VU)、イトテンツキ

今回の調査で、コケリンドウ、アイナエ、カワラニガナ、イトテンツキは確認されなかったが、この内アイナエについては今年の高温・乾燥により枯れた可能性があり、今後の継続調査が必要である。

○絶滅危惧種と注目すべき種について

●オキナグサ (キンポウゲ科) *Pulsatilla cernua* (Thunb.) Berchtold et J. Presl (県 CR、国 VU)

オキナグサは、日当たりのよい草地や河川の堤防などに生育する。調査地の西側を中心として広範囲に約 100 個体が確認され、県内最大級の自生地である。

県内各地で少数ながら生育しているが、かつて自生していた草地の多くは、農業に関わる手入れにより維持されていた面があり、草刈などの維持管理がなされなくなったこと、開発が進んだこと、加えて山野草としての栽培を目的とした採取により激減している。

当草原では、定期的な草刈りがなされていることや一般の人が立ち入りできないことで、生育適地となっていると思われる。

(詳細は大山岳の調査結果を参照のこと)

●ヒロハノカワラサイコ (バラ科) *Potentilla niponica* Th. Wolf (県 CR、国 VU)

日当たりのよい草地や砂地、河川敷などに生育する。県内では生育適地が失われたことで、ほとんどの場所で絶滅している。現存が確実なのは、2か所のみとなってしまった。

当調査地は、かつて扇状地の河原状の氾濫原として草地が維持され、またその後も空港内という特殊環境下で定期的な草刈りがなされていることから、県内で最大級の 30 個体ほどが確認できた。

●メガルカヤ (イネ科) *Themeda barbata* (Desf.) Veldkamp (県 EN、国一)

日の当たる乾燥気味の草地に生育する。全国的に開発などによる生育環境の消失や、生育条件の悪化によって少なくなっている。県内の現存地は 3か所程度に限られており、個体数も少ない。当草原では、調査地の西側の一角で 100 個体ほどが確認できた。

メガルカヤの生育環境を脅かす危険要因のひとつに、生態系被害防止外来種メリケンカルカヤの侵入があると思われる。メガルカヤはもともと丘陵地や河川沿いに分布し、山地には分布しない。このため、外来種の影響も受けやすいと考えられ、当調査地で定期的に行われている草刈りが重要になってくる。

●クサボケ（バラ科）*Chaenomeles japonica* (Thunb.) Lindl. ex Spach
(県 EN、国一)

土手や河原などの定期的に刈り払いが行われているよく日の当たる場所に生育する低木。県内の中山間地の耕作地周辺の草地を中心に 10 か所程度で現存しているが、ほぼ放棄されヤブ化しており、消滅する日も近いと思われる。

当草原では 100 個体ほどが確認された。若木原と呼ばれた扇状地原野の時代から維持されてきたクサボケは、草原という河川が造成し人間が引き継いだ特殊な環境が維持されてきたことにより、残ってきたと思われる。

●イヌハギ（マメ科）*Lespedeza tomentosa* (Thunb.) Siebold ex Maxim.
(県 VU、国 VU)

河原や日当たりのよい草地に生育する半低木。草地の中でも、草丈の低いシバの草地よりもやや草丈の高い草地に生育している。県内においては、河川敷を中心に比較的広く分布するが、個体数は少ない所が多い。

当調査地では、東側の草地で 30 個体ほどがススキやメドハギなどと共に生育していた。

●スズサイコ（キョウチクトウ科）*Vincetoxicum pycnostelma* Kitag.
(県 VU、国 NT)

日当たりのよいやや乾いた草地に生育する。河川やため池の土手などで見かけるが、あまり群生しない。かつては草地であればどこでも見られる種であったが、最近では全国的にも準絶滅危惧種以上のランクになっている。県内ではシバ草地を中心に比較的広く分布するが、個体数は少ない所が多い。

当調査地では定期的な草刈りが行われており、丈の高い草木が茂ることがないため、現在も残っていると思われる。

●アオヤギバナ（キク科）*Solidago yokusaiana* Makino (県 VU、国一)

県内では、河川敷や河岸の土手草地で見られることが多い。しかし、これは本来の生育環境である西日本の川岸の岩上という環境と異なっており、また大型であることから、別物である可能性があり、研究が進められている。県内においては、扇状地の河川敷を中心に 10 か所程度に現存する。

当調査地においては、西側・東側に 20 個体が認められた。当草地は水はけのよい扇状地上の草地であることから、生育適地と考えられる。

●シベリアメドハギ（マメ科）*Lespedeza juncea* (L. f) Pers.

近似種のメドハギは草地に限らず道路の土手や造成地などにも生えるが、本種はより環境の良い河川敷などの草地に生育する。メドハギとは花の色、開花時期、葉の葉脈の形状などが異なる。シベリアメドハギは、前記の項目で記したアオヤギバナなど草地に生育する種と同様の環境で見られるが、本調査地では東側の草地において 10 個体程度確認した。

(記：沢 和浩、白壁洋子)

② 動物（昆虫）相

今回の調査で確認された昆虫類は 41 種である（表－ 2 参照）。うち絶滅危惧種、注目すべき種は以下のとおりである。（（7）調査時の写真 参照）。

○準絶滅危惧 (NT)

ウスバカマキリ

○その他注目すべき種

ウスチャコガネ

○2004、2005、2006、2008 年に当センターで実施した調査で生息が確認された絶滅危惧種

ウスバカマキリ (NT)、セグロイナゴ (NT)

今回の調査で、セグロイナゴは確認されなかった。

○絶滅危惧種について

●ウスバカマキリ（カマキリ科）*Mantis religiosa* (Linnaeus) (県 NT、国 DD)

中型のカマキリで、前脚の基節の黒紋により区別できる。河川敷や堤防、草丈の低い明るい草地に生息しているが局地的である。変化しやすい環境に生息しているため減少している。

空港内では常に人為的に草丈の低い環境が維持されており、特に東側の草地は本種には好適な環境が保たれていると思われる、比較的多くの個体が確認された。

○注目すべき種について

●ウスチャコガネ（コガネムシ科）*phyllopertha diversa*

芝草で発生し、4月～5月に見られる。幼虫は芝生の根の部分を食べる。実際、芝生を枯らすような食害はないようであるが、成虫は芝生の上をハエのように飛び回り、ゴルフ場などでは大量に発生した場合、人に不快感を与える不快害虫とみなされる場合がある。

空港では南東部で芝草が広い範囲に広がっている区域があり、そこでは多数の個体が見られた。発生量が多く、1頭の♀に多数の♂が群がっている状態も観察された。県内で本種が多数確認できる所は他にはなく、害虫というよりはむしろ貴重な生息地と捉えることができる。

（記：横倉 明）

(6) 今後の保全対策及びまとめ

① 植物相について

当調査地では定期的に草刈りが行われており、人が管理している草原という今では特殊な環境の草原ともいえる。また、人の出入りが制限されていることによってもこの環境が続いていると思われる。

今回の調査では確認種の約 26%が帰化種であり、そのうち 30%が生態系被害防止

外来種で占められていた。そのため草刈りの時期の検討のほか、モニタリングを継続して見守る必要がある。また、除草剤の散布や大規模な土地の改変に留意しなければならない。土地の改変などの際は十分な検討を行い、適切な配慮が必要になってくる。

(記：沢 和浩、白壁洋子)

② 動物（昆虫）相について

人為的に草丈の低い状態が保たれ、場所によっては芝生状になった場所もあり、これらの環境に適応した昆虫類が繁栄していると言える。ウスバカマキリやウスチャコガネなどは典型的な代表であろう。

前回の調査で確認されているセグロイナゴ（県 NT、国一）は、残念ながら確認できなかったが、ほとんど環境の変化はないと思われるので、生き残っている可能性は高い。

県内では比較的記録が少なく、草原や荒地などに生息するマダラバッタが多数確認されたことは、空港の環境が長い間維持されてきた証になると思われる。

(記：横倉 明)

(7) 調査時の写真



調査地の様子



調査の様子

① 植物相



オキナグサ (絶滅危惧 I A 類)



オキナグサ (絶滅危惧 I A 類)



オキナグサ (絶滅危惧 I A 類)



ヒロハノカワラサイコ (絶滅危惧 I A 類)



メガルカヤ (絶滅危惧 I B 類)



クサボケ (絶滅危惧 I B 類)



クサボケ (絶滅危惧 I B 類)



クサボケ (絶滅危惧 I B 類)



イヌハギ (絶滅危惧 II 類)



スズサイコ (絶滅危惧 II 類)



アオヤギバナ (絶滅危惧 II 類)



シベリアメドハギ

② 動物（昆虫）相



ウスバカマキリ褐色型（準絶滅危惧）



ウスバカマキリ（準絶滅危惧）



ショウリョウバッタ



ウスチャコガネ

(8) 参考、引用文献

- ・山形県（2013）、「レッドデータブックやまがた絶滅危惧野生植物 2013 年改訂版」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・山形県（2019）、「レッドデータブックやまがた 2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・環境省編（2014）、「レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生動物 5 昆虫類」
- ・山形県（2007）、「希少野生生物保全調査報告書」、平成 15～18 年度、山形県環境科学研究センター
- ・山形県（2009）、「平成 20 年度自然生態系保全モニタリング調査報告書」、山形県環境科学研究センター

表-1 草地・風穴 山形空港 植物目録(2025年度)

No.	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
			西側	東側	県	国	
1	トクサ科	スギナ	●				
2	コバノイシカグマ科	ワラビ	●				
3	マツ科	アカマツ	●	●			
4	ラン科	ネジバナ	●	●			
5	アヤメ科	ニワゼキショウ	●	●			帰化種
6	ススキノキ科	ヤブカンゾウ	●				帰化種
7	ツユクサ科	ツユクサ		●			
8	イグサ科	スズメノヤリ	●	●			
9	カヤツリグサ科	ヒカゲスゲ	●				
10		アオスゲ	●	●			
11		アオスゲSP	●				
12		テンツキ		●			
13	イネ科	ハルガヤ	●	●			帰化種※
14		トダシバ	●	●			
15		メヒシバ		●			
16		オヒシバ	●				
17		オニウシノケグサ	●				帰化種※
18		ススキ	●	●			
19		スズメノヒエ	●	●			
20		チカラシバ	●	●			
21		アキノエノコログサ	●	●			
22		キンエノコロ	●	●			
23		メガルカヤ	●	●	EN	—	
24		シバ	●	●			
25	ケシ科	タケニグサ	●				
26	アケビ科	ミツバアケビ		●			
27	ツツラフジ科	アオツツラフジ	●				
28	キンポウゲ科	ポタンヅル	●				
29		オキナグサ	●	●	CR	VU	
30	アリノトウグサ科	アリノトウグサ	●	●			
31	ブドウ科	ノブドウ	●				
32	マメ科	ネムノキ	●	●			
33		カワラケツメイ		●			
34		ヤハズソウ	●				
35		メドハギ	●	●			
36		ハイメドハギ	●	●			
37		シベリアメドハギ		●			
38		ネコハギ	●				
39		イヌハギ		●	VU	VU	
40		セイヨウミヤコグサ	●				帰化種
41		クズ	●				
42		ハリエンジュ		●			帰化種※
43		クララ		●			
44		ムラサキツメクサ	●	●			帰化種
45		シロツメクサ	●	●			帰化種
46		ヤハズエンドウ	●	●			
47		カスマグサ	●				
48		フジ	●				
49	ヒメハギ科	ヒメハギ		●			
50	グミ科	アキグミ	●				
51	バラ科	クサボケ	●	●	EN	—	
52		ミツバツチグリ	●	●			
53		ヒロハノカワラサイコ	●	●	CR	VU	
54		ノイバラ	●	●			
55		ナワシロイチゴ	●	●			
56	ニシキギ科	ツルウメモドキ		●			
57	カタバミ科	オッタチカタバミ	●	●			帰化種
58	トウダイグサ科	エノキグサ	●	●			
59	コミカンソウ科	ヒメミカンソウ	●				
60	ヤナギ科	ポブラsp	●	●			
61		イヌコリヤナギ	●				
62		キツネヤナギ	●				
63	スミレ科	スミレ	●	●			
64	アマ科	キバナノマツバニンジン	●	●			帰化種
65	フウロソウ科	ゲンノショウコ	●				
66	アカバナ科	メマツヨイグサ	●	●			帰化種
67	ウルシ科	ヌルデ		●			
68	アブラナ科	ハルザキヤマガラシ	●	●			帰化種※
69		ナズナ		●			
70	ビャクダン科	カナビキソウ	●	●			
71	タデ科	ケイタドリ	●	●			
72		スイバ	●	●			
73		ヒメスイバ	●	●			帰化種※

No.	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
			西側	東側	県	国	
74		エゾノギンギン	●				帰化種※
75	ナデシコ科	オオヤマフスマ	●	●			
76		ミミナグサ	●	●			
77		オランダミミナグサ		●			帰化種
78		ミチバタナデシコ	●	●			帰化種
79	サクラソウ科	オカトラノオ	●	●			
80	アカネ科	キバナカワラマツバ	●	●			
81		ヘクソカズラ		●			
82	リンドウ科	フデリンドウ	●				
83		センブリ	●				
84	キョウチクトウ科	ガガイモ	●				
85		スズサイコ	●	●	VU	NT	
86	ヒルガオ科	ヒルガオ	●				
87		アメリカネナシカズラ	●				帰化種※
88	オオバコ科	マツバウンラン		●			帰化種
89		オオバコ	●	●			
90		ヘラオオバコ	●	●			帰化種
91		タチイヌノフグリ	●				帰化種
92		オオイヌノフグリ		●			帰化種
93	シソ科	カキドオシ	●				
94		ホトケノザ		●			
95		ヒメオドリコソウ	●				帰化種
96		ウツボグサ	●	●			
97	キキョウ科	ツリガネニンジン	●	●			
98	キク科	ヨモギ	●	●			
99		オトコヨモギ	●	●			
100		ユウガギク	●	●			
101		ヒメジョオン	●	●			帰化種※
102		ヒメムカシヨモギ		●			帰化種
103		ハルジオン	●	●			帰化種
104		オオヒヨドリバナ	●	●			
105		ブタナ	●	●			帰化種
106		ニガナ		●			
107		シロバナニガナ	●	●			
108		ハナニガナ	●	●			
109		ノボロギク		●			帰化種
110		セイタカアワダチソウ	●	●			帰化種※
111		アオヤギバナ	●	●	VU	—	
112		オニノゲシ		●			帰化種
113		ノゲシ		●			
114		アイノコセイヨウタンポポ	●				セイヨウタンポポ×カントウタンポポ
115	ウコギ科	オオチドメ	●	●			
計	115		91	83			

【植物目録の仕様】

◎科名、和名及び配列は、主に以下によった。

新山形県野生植物目録編集委員会編集(2019).新山形県野生植物目録2019.116pp.フロラ山形

◎凡例

●：2025年現地調査で確認した種

※：生態系被害防止外来種

表-2 草地・風穴 山形空港 動物目録(2025年度)

No.	目	科	和名	調査箇所		RDBカテゴリー		備考
				西側	東側	県	国	
昆虫類	1	トンボ目	イトトンボ科	アジアイトトンボ	●	●	NT	DD
	2	トンボ目	カワトンボ科	ハグロトンボ	●			
	3	トンボ目	トンボ科	アキアカネ	●	●		
	4	トンボ目	トンボ科	ウスバキトンボ	●	●		
	5	カマキリ目	カマキリ科	ウスバカマキリ		●		
	6	バッタ目	バッタ科	クルマバッタモドキ	●	●		
	7	バッタ目	バッタ科	ショウリョウバッタ		●		
	8	バッタ目	バッタ科	オンブバッタ		●		
	9	バッタ目	バッタ科	トノサマバッタ	●			
	10	バッタ目	バッタ科	マダラバッタ	●	●		
	11	バッタ目	ヒシバッタ科	ハラヒシバッタ	●			
	12	バッタ目	キリギリス科	ヒメギス		●		
	13	バッタ目	キリギリス科	ホシササキリ		●		
	14	バッタ目	コオロギ科	エンマコオロギ	●			
	15	バッタ目	コオロギ科	ツツレサセコオロギ	●			
	16	バッタ目	ヒバリモドキ科	シバズ		●		
	17	カメムシ目	カメムシ科	オオトゲシラホシカメムシ	●			
	18	カメムシ目	ナガカメムシ科	コバネヒョウタンナガカメムシ	●			
	19	カメムシ目	サシガメ科	アカヘリサシガメ	●			
	20	コウチュウ目	コガネムシ科	ウスチャコガネ	●	●		
	21	コウチュウ目	テントウムシ科	ナナホシテントウ	●	●		
	22	コウチュウ目	テントウムシ科	コカメノコテントウ		●		
	23	ハチ目	ギングチバチ科	ヒラシマギングチ				
	24	ハチ目	ミツバチ科	ニホンヒゲナガハナバチ	●			
	25	ハチ目	ミツバチ科	セイヨウミツバチ	●			
	26	ハチ目	ハバチ科	オウトウナメクジハバチ	●			
	27	ハエ目	ハナアブ科	ホソヒメヒラタアブ	●			
	28	チョウ目	シロチョウ科	モンキチョウ	●	●		
	29	チョウ目	シロチョウ科	モンシロチョウ	●	●		
	30	チョウ目	シロチョウ科	キタチキチョウ	●	●		
	31	チョウ目	シジミチョウ科	ヤマトシジミ	●	●		
	32	チョウ目	シジミチョウ科	ベニシジミ	●	●		
	33	チョウ目	ハマキガ科	グミツマジロヒメハマキ	●			
	34	チョウ目	メイガ科	アカマダラノメイガ	●			
	35	チョウ目	ツトガ科	ウスジロキノメイガ	●	●		
	36	チョウ目	ツトガ科	シロオビノメイガ	●			
	37	チョウ目	ツトガ科	キアヤヒメノメイガ	●			
	38	チョウ目	ツトガ科	トガリシロアシクロノメイガ		●		
	39	チョウ目	ツトガ科	クロフタオビツトガ		●		
	40	チョウ目	シャクガ科	コウスアオシャク	●			
	41	チョウ目	シャクガ科	ベニスジヒメシャク		●		
計	41				30	23		

【動物目録の仕様】

◎目、科の配列は主に以下によった。

大津高編修(2004)山形県陸産淡水産動物目録(改訂版). 358pp, 山形県動物環境調査会, 山形.

◎希少動物については以下によった。

山形県(2019)「レッドデータブックやまがた2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」. 334pp

◎分類・和名については最新版の書籍を使用した。

◎凡例

●:2025年の現地調査で確認した種

5 湖沼・ため池 鳥海山麓湖沼群

(1) 調査趣旨

県内で確認されている絶滅危惧種のおよそ2割の種が、湖沼・ため池や湿原・湿地などの水辺及びその周辺に生息・生育している。

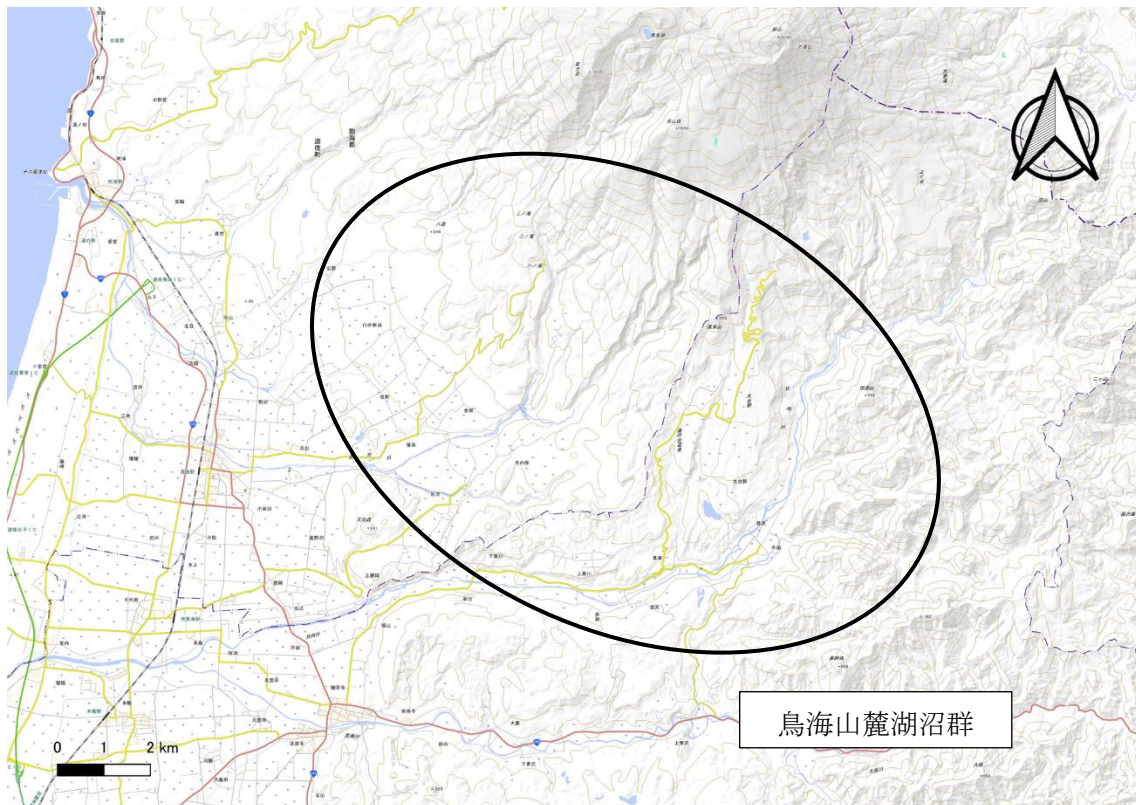
今回の調査地である鳥海山麓に点在する湖沼・ため池は未調査地であり、動植物相の分布状況を把握することを目的に調査を行った。

(2) 調査地の概要

今回の調査地である鳥海山麓湖沼群は、鳥海山南麓に点在する農業用のため池とその周辺の湿地群の一部である。

<調査箇所位置図>

○ 調査範囲



(3) 調査日、調査箇所及び調査者

調査は以下のとおり実施した。

植物相・動物（昆虫等）相

調査箇所 Aため池、B湿地、Cため池、D湿地

調査日 2025年6月24日、2025年9月29日

調査者 白壁洋子、畠中裕之、笹渕健市、榎田博郎、新藤道人、辻 浩子

(4) 調査方法

① 植物相

調査地対象区域の種を調査し、植物目録を作成した。併せて、植物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を確認した。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については採取して、後日同定を行った。

② 動物（昆虫等）相

調査地対象区域を踏査し、昆虫を中心に補虫網を使った捕獲調査を行った。その他の種については目視、鳴き声による確認を行った。

確認できた種について目録を作成し、動物相の特徴や絶滅危惧種の分布状況を明らかにした。同定は主に現地で調査者が行ったが、一部不明な種については持ち帰り、後日同定を行った。

(5) 調査結果

ア Aため池及びB湿地

① 植物相

確認された維管束植物はAため池で124種、B湿地で49種である(表-1参照)。
確認された絶滅危惧種及び注目すべき種は以下のとおりである((7)写真参照)。

○準絶滅危惧 (NT)

アギナシ

○注目すべき種

コウホネ

○絶滅危惧種及び注目すべき種について

●アギナシ (オモダカ科) *Sagittaria aginashi* Makino (県NT、国NT)

比較的自然度の高いため池の周辺、農耕地周辺の湿地や用水路、休耕田に生える。当調査地では、ため池の縁に10個体ほどが生育していた。

ため池の改修や山間部の田圃の管理放棄により絶滅が懸念されている。当ため池では貧栄養な沼を好むジュンサイなどと一緒に生育しており、またため池の縁にはヨシも入っている。本種が生育し続けることができるよう富栄養にならないため、池の保全は地域としても重要な課題であると思われる。

●コウホネ (スイレン科) *Nuphar japonica* DC.

当ため池ではジュンサイ、ヒツジグサと共に生育している。コウホネは日本全体として絶滅危惧などに指定されていないが、河川改修、圃場整備などによって激減している種になってきた。浅い池や沼、流れの穏やかな用水路に生育し、明るい水辺に多く、泥深い底の環境を好む水生植物である。水質に関しては、比較的幅広い環境で生育可能のようだが、汚濁が進むと減退してしまい、水辺の改変や水質汚濁により絶滅していくといわれている。

ため池でも、このような環境に合った管理により、コウホネネクイハムシと共に維持されていくものと思われる。

(記：白壁洋子)

② 動物（昆虫等）相

今回の調査で確認された昆虫類は10種、両生類は2種である（表-2参照）。うち絶滅危惧種は以下のとおりである。（(7)写真参照）。

○絶滅危惧Ⅱ類（VU）

コウホネネクイハムシ（旧称：カワホネネクイハムシ）、マイコアカネ

○準絶滅危惧（NT）

モリアオガエル

○絶滅危惧種について

●コウホネネクイハムシ（ハムシ科）*Donacia ozensis*（県VU、国一）

日本特産種で本州中部から東北地方（長野県～青森県）に分布し、幼虫・成虫ともコウホネを食草としているため、コウホネの存在が生息の必須条件となる。本県では、酒田市（旧八幡町）、鶴岡市からごく少数の生息地が確認されるにとどまる。

今回の調査で、湿地のコウホネ上から数個体が確認された。コウホネの葉には多数の食痕も見られた。

●マイコアカネ（トンボ科）*Sympetrum kunckeli*（県VU、国一）

日本から中国にかけての東アジアに分布し、国内では北海道から九州まで分布は広いが、個々の生息地は局所的に点在する傾向がある。太平洋側では低標高の開けた湿地に生息する例も多いのに対し、本県での生息地は山間部に点在する湿地が多く、生息地が局所的になる傾向が一層強くみられる。

今回の調査では、ため池縁辺の開けた抽水群落で確認された。

●モリアオガエル（アオガエル科）*Zhangixalus arboreus*（県NT、国一）

日本固有種で、本州から九州に広く分布し、特に本県を含む東北地方日本海側から北陸にかけての地域では、一般に個体群密度が高い。県内では、発達した森林植生が連続する地域であれば概ね生息が確認される。

水域の上に張り出した木の枝に、泡で包まれた卵を産卵する習性が、一般にもよく知られており、酒田市の鶴間池は、モリアオガエル繁殖地として県指定天然記念物にもなっている。

今回の調査では、湿地周辺部の低木上で成体を確認した。

(記：畠中裕之)

イ Cため池

① 植物相

確認された維管束植物は159種である（表－1参照）。確認された絶滅危惧種及び注目すべき種は以下のとおりである（(7)写真参照）。

なお、調査時期の関係で確認できなかったが、春はオキナグサ、ニオイタチツボスミレ、サンインタチツボスミレ、ヒメイズイ、アズマギクの記録がある。

○絶滅危惧IB類（EN）

サワラン、ミズトンボ

○絶滅危惧II類（VU）

トキソウ、ヤマトキソウ、スズサイコ、ホザキノミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ

○準絶滅危惧（NT）

カキラン

○絶滅危惧種及び注目すべき種について

●サワラン（ラン科）*Eleorchis japonica* (A. Gray) F. Maek.（県EN、国一）

当調査地のサワランは、本来の生育環境である湿原というより、ため池の水際でトキソウ、ヤマトキソウなどと共に生育している。これらの3種と一緒に生育している場所は、県内では置賜で1か所が知られるだけである。これらは、同じ生育域と生育環境、同じ時期に生え、草丈、花の大きさが同じなど似通っているラン科植物である。

湿地の中で濃いピンクの花を咲かせるため、非常に目立つことから、盗掘の対象とされやすい。周辺の草地、湿地の環境は、地区の方たちの草刈により維持されている。

●ミズトンボ（ラン科）*Habenaria sagittifera* Rchb. f.（県EN、国VU）

ミズトンボは日当たりの良い湿地に生えるラン科植物である。庄内においては、3か所の湿地に現存するのみである。

山野草として栽培されることがあるが、栽培は難しいともいわれており、土地造成や植生遷移による湿原の消失が最大のリスク要因と思われる。当調査地でも、花期に茎が高く伸びて目立つようになっていることから、園芸採取や盗掘による減少が危惧される。

●トキソウ（ラン科）*Pogonia japonica* Rchb. f.（県VU、国NT）

県内では低地から山地帯まで広く分布し、日当たりのよいミズゴケ湿地に自生する。当調査地では標高220mほどのため池の縁に生育している。全国的にも園芸採取（ミズゴケ採取も含む）により減少している種である。

当調査地は人が出入りしやすい場所にあるため、監視も必要である。また、ため池周辺の整備、特に草刈りなどで踏み付けをしないように注意が必要になっ

てくる。

●ヤマトキソウ（ラン科）*Pogonia minor* (Makino) Makino（県VU、国一）

山地の日当たりのよいやや湿った草地や道路の法面、スキー場の斜面などに生えるが、当調査地では草地というよりため池の水際にトキソウ、サワランと共に生育している。トキソウの仲間だが、花は上向きでほとんど開かない。庄内では、2か所程度でのみ確認されるだけである。また、攪乱の途中で出てくる種でもあり、周辺の草丈が大きくなりヤブ化してくると消滅する。それに加え、県内では園芸採取により絶滅している箇所も多い。花期には目立つため、盗掘に注意する必要がある。

●スズサイコ（キョウチクトウ科）*Vincetoxicum pycnostelma* Kitag.

（県VU、国NT）

日当たりのよいやや乾いた草地に生える。当調査地では、草刈りのされた土手草地に生育していた。個体数も比較的多いが、この地区の方たちにより草刈りされ、維持されている草地のおかげである。この場所柄、放置されればヤブとなり、また人の踏み付けにも注意が必要と思われる。

●ホザキノミミカキグサ（タヌキモ科）*Utricularia caerulea* L.（県VU、国一）

ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサと共に、地中茎に袋状の捕虫囊があり、微生物などを吸い込んで栄養分とする食虫植物で、ホザキノミミカキグサはこれの中で最大である。生育環境となる湿地や湿田の減少、開発などにより、県内でも生育場所が減少している。当調査地は、庄内においては唯一の現存地である。

当調査地ではため池の水際に生育しているため、踏み付けされないように立ち入りを制限するとともに、ため池の改変によって乾燥したヤブ草地に移行しないような維持管理が求められる。

●ムラサキミミカキグサ（タヌキモ科）*Utricularia uliginosa* Vahl

（県VU、国NT）

ミミカキグサやホザキノミミカキグサと同じように湿地や湿田などに生育するが、当調査地ではため池の水際の湿った所に生育している。ホザキノミミカキグサに比べて、より標高の高い、あるいは自然度の高い湿原に生育する傾向があるといわれている。庄内においては、3か所にのみ現存している。

ホザキノミミカキグサとよく似ていて、当調査地では両種が混じって生育している。ため池の水際に生育しているため、踏み付けされないように立ち入りを制限するとともに、水位が落ちて乾燥状態が続かないよう草刈りなどに留意した維持管理が必要である。

●カキラン（ラン科）*Epipactis thunbergii* A. Gray（県NT、国一）

県内の低山地の湿地に広く分布し、当調査地のため池では水際の湿ったとこ

ろに、他のラン科植物と共に生育している。

ため池の水際に生育しているため、踏み付けされないように立ち入りを制限する必要がある。柿色の花をつけてよく目立つため、園芸採取による絶滅も懸念される。

(記：白壁洋子)

② 動物（昆虫等）相

今回の調査で確認された昆虫類は23種、両生類2種、爬虫類1種である（表-2参照）。うち絶滅危惧種は以下のとおりである。（(7)写真参照）。

○準絶滅危惧（NT）

ウラギンスジヒョウモン、アカハライモリ、モリアオガエル

○絶滅危惧種について

●ウラギンスジヒョウモン（タテハチョウ科）*Utricularia uliginosa*
（県NT、国VU）

国外では、ヨーロッパから東アジアまでユーラシア大陸に広く分布し、国内でも北海道から九州まで分布している。

関東地方以西では近年減少が著しく、環境省レッドリスト（2020）では絶滅危惧Ⅱ類（VU）にランク付けされた。しかし、北日本では今のところ減少はそれほど顕著ではなく、県内でもある程度の個体数が見られる生息地がまだ残っており、県のレッドリストでは準絶滅危惧（NT）となっている。

今回の調査では、草地の上を飛翔する個体を少数確認できた。

●アカハライモリ（イモリ科）*Cynops pyrrhogaster*（県NT、国NT）

日本固有種で、本州・四国・九州・周辺の島嶼に分布している。

かつては山間部の水田などに極めて普通に見られたが、近年はこういった生息環境の減少が著しい。ため池など小規模な池沼ではまだ姿を見ることが出来るため、レッドデータのランクとしては準絶滅危惧（NT）で止まってはいるが、近年は農業用のため池も減少し、人間の生活圏周辺からは急速に姿を消している。県内でも、人里の農地周辺ではかなり減少し、山地の小規模な池沼が主な生息地となってきている。

今回の調査では、ため池の水中に少数確認した。

●モリアオガエル（アオガエル科）*Zhangixalus arboreus*（県NT、国-）

今回の調査では、産卵期の6月に、雄の鳴き声とため池の岸での目視で確認した。

（詳細はAため池及びB湿地の調査結果を参照のこと）

(記：畠中裕之)

ウ D湿地

① 植物相

確認された維管束植物は132種である（表－1参照）。確認された絶滅危惧種は以下のとおりである（（7）写真参照）。

○絶滅危惧 IA 類（CR）

サギソウ（植栽）

○絶滅危惧 IB 類（EN）

ミズトンボ、ヤマトアオダモ、ヤマホタルブクロ

○準絶滅危惧（NT）

イヌタヌキモ

○絶滅危惧種について

●サギソウ（ラン科）*Habenaria radiata* (Thunb.) Spreng.（植栽）

当調査地に詳しい現地の方に確認したところでは、当調査地には元々サギソウは生育しておらず、近年植栽されたものとのことであった。現に斑入りの葉が見られ、園芸種と思われる個体であった。現地に元々ない種を植栽する行為は植物の遺伝子汚染であり、排除する検討が必要である。

●ミズトンボ（ラン科）*Habenaria sagittifera* Rchb. f.（県 EN、国 VU）

当湿地では湿地全体に広く生育していた。背が高く目立ち、木道から手の届く場所にあり、盗掘も懸念される。

（詳細はCため池の調査結果を参照のこと）

●ヤマトアオダモ（モクセイ科）*Fraxinus longicuspis* Siebold et Zucc.

（県 EN、国－）

山地の溪流沿いなどに生え、高木になる。県内10か所の生育地が確認されているが、群生はせず個体数は少ない。当調査地では湿地の端に、樹高10mほどの1個体が確認された。

アオダモなどと違い花弁そのものが無く、目立たない樹木のため、簡単に雑木として伐採される心配がある。当湿地を管理、保護している団体や地域の方々には、希少な樹木のひとつであることを認識した維持管理が望まれる。

●ヤマホタルブクロ（キキョウ科）*Campanula punctata* Lam. var. *hondoensis* (Kitam.) Ohwi（県 EN、国－）

山地から亜高山帯に広く分布し、日当たりのよいやや乾燥した草原や林縁、道端などに見られる。当調査地では、林の縁、道端に見られた。

同属のホタルブクロと共に、園芸採取や道路拡幅などによる絶滅が懸念される。

●イヌタヌキモ（タヌキモ科） *Utricularia australis* R. Br.（県 NT、国 NT）

湖沼やため池、水路、ときに水田などのやや貧栄養なため池で見られる。当湿地では水深の極めて浅い水溜りのような、辛うじて浮遊できる場所で生育していた。水中に浮遊して、あまり水利用のない山間のため池などによく生育しているのは、水質とともに風の影響が少ないことも関係している。当湿地が乾かないような状況が必要である。

（記：白壁洋子）

② 動物（昆虫等）相

今回の調査で確認された昆虫類は 15 種、両生類は 3 種である（表－2 参照）。うち絶滅危惧種は以下のとおりである。（（7）写真 参照）。

○準絶滅危惧（NT）

ウラギンスジヒョウモン、アカハライモリ、モリアオガエル、ツチガエル

○絶滅危惧種について

●ウラギンスジヒョウモン（タテハチョウ科） *Argyronome laodice*

（県 NT、国 VU）

今回の調査では、湿地の草本に訪花する個体を確認した。

（詳細は C ため池の調査結果を参照のこと）

●アカハライモリ（イモリ科） *Cynops pyrrhogaster*（県 NT、国 NT）

ある程度の水深（概ね 10cm 以上）がある水域に、10 個体ほど確認した。

（詳細は C ため池の調査結果を参照のこと）

●モリアオガエル（アオガエル科） *Zhangixalus arboreus*（県 NT、国 I）

産卵期の 6 月の調査では、水域の上に伸びた林縁の枝で抱接・産卵する成体と、すでに散乱してある卵塊、周辺でのオスの鳴き声で確認した。

（詳細は C ため池の調査結果を参照のこと）

●ツチガエル（アカガエル科） *Glandirana rugosa*（県 NT、国 I）

本州から九州及び周辺の島嶼で見られる。

成体になっても水辺をあまり離れず、水辺環境への依存度がかなり大きい種である。そのため、素掘りの用水路やため池など、水が通年残る環境が重要な生息地となっており、かつては農村的環境に極めて普通に生息していた普通種であった。県内でも、山間部の湿地・ため池を中心に全域で生息が確認されるが、人里周辺の生息地は徐々にではあるが減少してきた。

今回の調査では、水中や岸に 10 個体ほど確認した。

（記：畠中裕之）

(6) 今後の保全対策及びまとめ

ア Aため池及びB湿地

① 植物相について

当調査地のため池は地区の農業用ため池となっており、農業用水の確保や水害防止のため、草刈りなどの維持管理作業を行っている。維持管理では、ため池とその周辺の生物多様性の保全を重視しながら、生育する生き物の環境に配慮したため池の管理を行うなど、地区内での調整も必要と思われる。

また、絶滅危惧種ではないが、コウホネは県内最大級の産地と思われることもあり、モニタリング調査を継続して行い、ため池と周辺環境を見守っていくことも必要と思われる。

(記：白壁洋子)

② 動物（昆虫等）相について

本調査地で今回確認された絶滅危惧種及び注目すべき種について、生息条件に関する簡単な検討・評価を述べてみたい。

●コウホネネクイハムシ

前掲のように、幼虫・成虫ともにコウホネを摂食し依存している。

コウホネは、水深の深い場合や流速の早い流水では沈水葉となるが、コウホネネクイハムシが生息するには抽水葉か浮葉であることが必要となる。そのため、水位が安定して浅く、しかもヨシなど背の高い抽水植物に覆われていない水域が必要となる。

●マイコアカネ

局所的に生息することが多いことから、生息には何か特定の条件が必要と考えられるが、詳細はまだわかっていない。浅く植生の豊富な水域が生息環境となる例が多い。

●モリアオガエル

沼も湿地も、岸まで木の枝が張り出し、周囲には森林が広がっている。本調査地では生息にあまり問題はないと考えられる。

総合すると、本調査地では、年間通して水位が安定して浅く、それでいて乾燥化・陸地化のあまり進行しない水域が、コウホネネクイハムシとマイコアカネ両種の生息を支えていると考えられる。

現状は、水位の変動もあまり大きくはなく、岸の植物群落もある程度良好な状態を維持していると考えられるが、湿地の涵養状況や沼の水の利用状況、また沼への汚水等の流入の有無など、今後に関して楽観はできない。

継続したモニタリングと、生息種の保全のための生態調査が必要と思われる。

また、現状では在来種に大きな影響を及ぼすような外来種の侵入は確認されていないが、外来種のモニタリングも今後は必要になる可能性が高い。

(記：畠中裕之)

イ Cため池

① 植物相について

Cため池は公園になっており、ため池周辺や土手草地に多くの希少種が生育している。この環境が維持されるために、草地やため池といった自然環境を十分に把握し、外来種の防除、地域の自然を伝える環境学習活動を推進するなど、公園としても野生生物保全のための管理を継続していく必要がある。

特に、適切な時期の草刈りと外来種の侵入対策など、生物多様性の保全を意識した整備が必要である。また、希少種の保護のため、ため池の周辺には立ち入りを制限する措置が必要と思われる。

加えて、ため池周辺の生物の生息・生育が確保されるよう、状況の変化を把握するため、定期的なモニタリング調査を行う必要があると思われる。

(記：白壁洋子)

② 動物（昆虫等）相について

本調査地で今回確認された絶滅危惧種及び注目すべき種について、生息条件に関する簡単な検討・評価を述べてみたい。

●ウラギンスジヒョウモン

近縁のオオウラギンスジヒョウモンと比較すると、草地を生息環境とする傾向が強い。

前掲の調査結果で述べたように、関東地方以西では生息地・個体数とも明らかに減少しているが、理由がはっきりわかっておらず、現状では対策の策定自体が難しい。

●モリアオガエル

本調査地でも繁殖可能だが、おそらく近くの湿地で繁殖・成長した個体が分散してきた可能性が高いと思われる。

●アカハライモリ

繁殖可能な成体は、5～6月に止水あるいは緩い流れで配偶行動をとり、メスは水際の植物に産卵する。

幼生は成長・変態して幼体になると上陸し、周囲の森林の林床で2～5年成長した後、繁殖可能になると水域に戻る。

そのため、春～秋まで水がある水域で、幼体が上陸可能な構造であり、上陸後しばらく生活できる植生に富んだ岸があり、周囲に湿潤な林床を持った森林が隣接していることが生息条件となる。近年の中干しの徹底された水田や三面張りの水路では生息が難しく、水田環境では個体数が減少している。

ため池の水位は安定しており、また岸は草地だが近くには森林が広がる。場所にもよるが、岸の傾斜があまり大きくない箇所も多く、変態後の幼体も上陸しやすい。生息条件としては良好と判断される。

本調査地のため池は、水温の低い湧水を稲作に利用できるよう温める温水ため池であり、水位の変動は極めて小さい。それに加え堤防部分の下部には池の水が滲

出する箇所もあり、湿地環境が形成されている。また、周囲の堤防部は地域住民による刈り払いで草地も維持されている。

現状は、地域住民による刈り払いなどで良好な湿地・草地環境が維持できているが、農業形態や生活状況の変化次第では楽観できない。本調査地自体は決して面積が大きくはなく、周辺地域に同様の環境も見当たらず、孤立している。安定した湿地・草地環境の維持には、地元地域や自治体と連携してのモニタリング調査や管理計画策定・実施が、今後必要となってくる可能性が高いと思われる。

また、今後は外来種のモニタリングも視野に入れる必要がある。

(記：畠中裕之)

ウ D 湿地

① 植物相について

当湿地では、ボランティアによる木道の整備、湿地の維持管理や観察会が行われている。このような活動は、地域の自然環境を知り保全していく上で重要なことから、今後も継続した活動が望まれる。

湿地の入口に、全国に分布を拡げている北アメリカ原産の帰化植物ワルナスビが入ってきている。乾燥に強い植物であるが、湿地にも侵入する有毒植物でもある。根の断片を通じた栄養繁殖などによって、一旦蔓延ると防除が非常に困難になるため、湿地に広がる前の徹底的な駆除と、草刈りの時期に配慮した維持管理も必要と思われる。

善意でサギソウを植栽したと思われるが、自然公園に対する園芸種又は他の場所からの植栽は、これも自然破壊の一種の遺伝子汚染であり、現に慎む必要があるとの周知、教育が必要と思われる。

(記：白壁洋子)

② 動物（昆虫等）相について

本調査地で今回確認された絶滅危惧種及び注目すべき種について、生息条件に関する簡単な検討・評価を述べてみたい。

●モリアオガエル

成体は越冬時と産卵期以外は基本的に樹上性で、林内をかなり広範囲に移動する。そのため、連続した森林・低木林さえあれば密度は低くとも広く生息しており、県内では海岸近くから標高 2000m 近くまで成体が確認されている。

その一方で、産卵・生育する条件として、連続した森林・低木林に隣接し夏期に水がある水域が必要となる。産卵環境がある程度限定されるため、広範囲に分布していても産卵場所以外での生息密度は一般に低い。

本調査地は、ボランティアによる維持管理のなかで水位・水量を調節しており、また周囲の林縁は休息場所として管理しているため、結果的に本種の産卵場所としても良好な環境となっている。

●アカハライモリ

本調査地は、水域・草地（湿地）・湿潤な森林が狭い範囲にまとまっており、本種の生息環境としても良好である。

（詳細はCため池の項を参照のこと）

●ツチガエル

前掲の調査結果で述べたように、成体になってもあまり水域を離れない種であるが、本調査地は通年水位が安定しているため、結果的に本種にとっても良好な環境となっている。

本調査地は、ボランティアによる管理が続けられており、それが結果的に他の種の生息条件を整えることにもなり、良好な生息地となっている。

しかし、本来であれば、ある程度のエリア内に同様の環境が複数存在し、遷移と攪乱を繰り返しながら多様な種が移動・生息するのが理想であるが、本調査地は面積も小さく、しかも周辺にはコリドー・飛び石となる同様の環境もあまり見当たらない。現状では良好な環境であっても、長期的に存続できるのか懸念が大きい。

まずは本調査地のモニタリングを継続し、調査地の現状を維持・管理しながら、周辺に同様な環境が残っていないか、あるいは同様の環境を整備できないか、現地調査を進める必要がある。

（記：畠中裕之）

(7) 調査時の写真

ア Aため池及びB湿地



Aため池の様子



Aため池の様子



Aため池調査の様子



B湿地の様子

① 植物相



アギナシ (準絶滅危惧)



コウホネ

② 動物相



コウホネネクイハムシ（絶滅危惧Ⅱ類）

写真提供（写真撮影）畠中裕之氏



マイコアカネ（絶滅危惧Ⅱ類）

写真提供（写真撮影）畠中裕之氏



モリアオガエル（準絶滅危惧）



モリアオガエル 卵塊

イ Cため池

① 植物相



サワラン (絶滅危惧 I B 類)



ミズトンボ (絶滅危惧 I B 類)



トキシウ (絶滅危惧 II 類)



ヤマトキシウ (絶滅危惧 II 類)



スズサイコ (絶滅危惧 II 類)



ホザキノミミカキグサ (絶滅危惧 II 類)



ムラサキミミカキグサ (絶滅危惧 II 類)



カキラン (準絶滅危惧)



アヤメ

② 動物相



コカマキリ (緑色)

ウ D湿地



湿地の様子



調査の様子

① 植物相



トキシウ (絶滅危惧 I A 類) 植栽



ミズトンボ (絶滅危惧 I B 類)



ヤマトアオダモ (絶滅危惧 I B 類)



ヤマホタルブクロ (絶滅危惧 I B 類)



イヌタヌキモ (準絶滅危惧)

② 動物相



モリアオガエル（準絶滅危惧）卵塊

写真提供（写真撮影） 畠中裕之氏

(8) 引用・参考文献

- ・山形県（2013）、「レッドデータブックやまがた絶滅危惧野生植物 2013 年改訂版」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・山形県（2019）、「レッドデータブックやまがた 2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」、山形県環境エネルギー部みどり自然課
- ・環境省編（2014）、「レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生動物 5 昆虫類」

表-1 湖沼・ため池 鳥海山麓湖沼群 植物目録(2025年度)

No.	科	和名	調査箇所				RDBカテゴリー		備考
			Aため池	B湿地	Cため池	D湿地	県	国	
1	ヒカゲノカズラ科	ホソバトウゲシバ	●						
2		ヒカゲノカズラ			●				
3	トクサ科	スギナ	●		●	●			
4	ゼンマイ科	ゼンマイ	●	●	●				
5	コバノイシカグマ科	ワラビ	●		●	●			
6	ヒメシダ科	ハリガネワラビ	●			●			
7		ヒメシダ	●		●	●			
8	コウヤワラビ科	コウヤワラビ		●					
9		イヌガンソク	●	●					
10	シシガシラ科	シシガシラ	●						
11	メシダ科	イヌワラビ	●						
12		サトメシダ				●			
13		ヘビノネゴザ	●						
14	オシダ科	ホソバナライシダ	●						
15		リョウメンシダ	●	●					
16		ヤマイタチシダ			●				
17		ジュウモンジシダ	●			●			
18	マツ科	アカマツ	●		●	●			
19	ジュンサイ科	ジュンサイ	●						
20	スイレン科	コウホネ	●	●					
21		ヒツジグサ	●	●					
22	マツブサ科	マツブサ	●						
23	センリョウ科	フタリシズカ	●						
24	ドクダミ科	ドクダミ			●	●			
25	モクレン科	キタコブシ			●	●			
26		ホオノキ	●	●	●	●			
27	クスノキ科	オオバクロモジ	●	●		●			
28	ショウブ科	ショウブ			●				
29	サトイモ科	コウライテンナンショウ	●						
30		カラスビシャク			●				
31		ウキクサ		●					
32	オモダカ科	アギナシ	●				NT	NT	
33	ヒルムシロ科	オヒルムシロ		●					
34	ヤマノイモ科	ヤマノイモ	●	●	●	●			
35	シュロソウ科	ショウジョウバカマ			●				
36		エンレイソウ	●						
37		アオヤギソウ	●						
38	イヌサフラン科	ホウチャクソウ	●						
39		チゴユリ	●	●					
40	サルトリイバラ科	サルトリイバラ	●	●	●				
41		タチシオデ	●	●					
42		シオデ	●	●					
43	ユリ科	ヤマユリ	●	●					
44		ヤマジノホトギス	●						
45	ラン科	サワラン			●		EN	—	
46		カキラン			●		NT	—	
47		サギソウ				●	CR	NT	植栽
48		ミズトンボ			●	●	EN	VU	
49		クモキリソウ	●						
50		トキソウ			●		VU	NT	
51		ヤマトキソウ			●		VU	—	
52	アヤメ科	ノハナショウブ	●		●	●			
53		キショウブ			●				帰化種※
54		アヤメ			●				
55	ヒガンバナ科	アサツキ			●				
56	キジカクシ科	コバギボウシ	●	●	●	●			
57	ツユクサ科	ツユクサ	●		●	●			
58	ガマ科	ガマ			●				
59	ホシクサ科	イトイヌノヒゲ			●				コイヌノヒゲ
60		イヌノヒゲ			●	●			
61		ニッポンイヌノヒゲ			●				
62	イグサ科	イグサ			●	●			
63		コウガイゼキショウ			●				
64		ヌカボシソウ			●				
65	カヤツリグサ科	ナルコスゲ			●				
66		ゴウソ				●			
67		ビロードスゲ			●	●			
68		ヤチカワズスゲ			●				
69		アゼスゲ			●				
70		ヒメクグ				●			
71		カヤツリグサ				●			
72		オオハリイ			●	●			
73		オオヌマハリイ			●				
74		コイヌノハナヒゲ			●				
75		イヌホタルイ				●			
76		カンガレイ	●	●	●				
77		フトイ		●	●				
78		コマツカサススキ				●			
79		アブラガヤ			●	●			

No.	科	和名	調査箇所				RDBカテゴリー		備考
			Aため池	B湿地	Cため池	D湿地	県	国	
80	イネ科	ハルガヤ			●				帰化種※
81		コブナグサ			●				
82		カモガヤ			●				帰化種※
83		メヒシバ			●				
84		アシボソ						●	
85		ススキ	●		●			●	
86		ケチヂミザサ			●				
87		コチヂミザサ	●		●			●	
88		ヌカキビ	●	●	●			●	
89		スズメノヒエ			●			●	
90		チカラシバ			●				
91		ヨシ	●	●	●			●	
92		ハイヌメリグサ			●			●	
93		キンエノコロ			●				
94		マコモ	●						
95		チマキザサ	●	●	●				
96	アケビ科	ミツバアケビ	●		●			●	
97	ツヅラフジ科	アオツヅラフジ			●				
98	キンポウゲ科	ボタンヅル	●						
99		センニンソウ			●				
100		キツネノボタン	●		●				
101		アキカラマツ			●			●	
102	マンサク科	マルバマンサク	●						
103	ユキノシタ科	トリアシショウマ	●						
104	アリノトウグサ科	アリノトウグサ			●				
105	ブドウ科	ノブドウ	●	●	●			●	
106		ヤブカラシ						●	
107		ツタ			●			●	
108		ヤマブドウ	●						
109	マメ科	ネムノキ			●				
110		ヤブマメ	●		●				
111		ノササゲ			●			●	
112		ツルマメ	●					●	
113		ヌスビトハギ						●	
114		ヤハズソウ			●				
115		メドハギ			●				
116		ネコハギ			●			●	
117		イヌエンジュ						●	
118		クズ	●		●			●	
119		ハリエンジュ						●	
120		ムラサキツメクサ			●				帰化種※
121		シロツメクサ			●				帰化種
122		フジ	●	●	●				帰化種
123	クロウメモドキ科	クマヤナギ			●				
124		イソノキ						●	
125	クワ科	ヤマグワ		●	●			●	
126	イラクサ科	アカソ			●				
127		ウワバミソウ		●					
128	バラ科	キンミズヒキ			●			●	
129		オクチョウジザクラ	●						
130		カスミザクラ	●						
131		オオヤマザクラ	●						
132		アズキナシ	●						
133		ウワミズザクラ	●					●	
134		ミツバツチグリ			●			●	
135		ヘビイチゴ			●				
136		カマツカ						●	
137		ノイバラ			●			●	
138		クマイチゴ	●					●	
139		モミジイチゴ	●						
140		ナワシロイチゴ			●			●	
141		ナナカマド	●						
142	ブナ科	クリ	●		●			●	
143		ミズナラ	●	●				●	
144		コナラ	●		●			●	
145	クルミ科	オニグルミ	●						
146	カバノキ科	ツノハシバミ	●						
147	ウリ科	アマチャヅル		●				●	
148		キカラスウリ			●				
149	ニシキギ科	ツルウメモドキ			●				
150		コマユミ	●					●	
151		ツリバナ						●	
152		ウメバチソウ			●			●	
153	カタバミ科	オッタチカタバミ			●				帰化種
154	トウダイグサ科	エノキグサ			●				
155	ヤナギ科	ヤマナラシ			●			●	
156		シロヤナギ			●			●	
157		イヌコリヤナギ			●			●	
158		キツネヤナギ	●		●				
159	スミレ科	タチツボスミレ			●				

No.	科	和名	調査箇所				RDBカテゴリー		備考
			Aため池	B湿地	Cため池	D湿地	県	国	
160		オオタチツボスミレ	●						
161		スミレ			●				
162		スミレサイシン	●						
163		アギスミレ			●	●			
164		ツボスミレ	●		●				
165	オトギリソウ科	ミズオトギリ	●	●	●				
166		オトギリソウ			●				
167		コケオトギリ			●	●			
168	フウロソウ科	ゲンノショウコ			●				
169	ミソハギ科	ミソハギ			●	●			
170	アカバナ科	ミズタマソウ		●					
171		アカバナ			●	●			
172	キブシ科	キブシ				●			
173	ウルシ科	ヌルデ	●			●			
174		ツタウルシ	●	●	●	●			
175		ヤマウルシ	●	●	●	●			
176	ムクロジ科	ヤマモミジ	●						
177		アカイタヤ	●	●		●			
178		オニイタヤ				●			
179		ウリハダカエデ	●						
180		トチノキ	●						
181	ビャクダン科	カナビキソウ			●				
182	タデ科	オオイタドリ	●		●	●			
183		ミズヒキ	●						
184		ギンミズヒキ				●			
185		イヌタデ	●		●	●			
186		ヤノネグサ			●	●			
187		ハナタデ			●				
188		ウナギツカミ				●			
189		シロバナウナギツカミ				●			
190		ミゾソバ	●		●	●			
191		スイバ			●	●			
192		エゾノギシギシ			●				帰化種※
193	モウセンゴケ科	モウセンゴケ			●				
194	ナデシコ科	オランダミミナグサ				●			帰化種
195		ノミノフスマ				●			
196	ヒユ科	ヒナタイノコヅチ				●			
197	ミズキ科	ウリノキ		●					
198		ミズキ	●		●	●			
199	アジサイ科	イワガラミ	●	●		●			
200		ノリウツギ	●						
201	ツリフネソウ科	ツリフネソウ			●	●			
202	サクラソウ科	ヤブコウジ	●						
203		オカトラノオ	●			●			
204		コナスビ			●				
205		クサレダマ			●	●			
206	ハイノキ科	サワフタギ	●						
207	エゴノキ科	エゴノキ	●	●	●	●			
208	マタタビ科	サルナシ	●			●			
209	リョウブ科	リョウブ	●						
210	ツツジ科	イチヤクソウ	●						
211		ヤマツツジ	●						
212	アオキ科	ヒメアオキ	●	●		●			
213	アカネ科	クルマムグラ				●			
214		ヨツバムグラ			●	●			
215		ホソバノヨツバムグラ			●				
216		ツルアリドオシ	●						
217		オオハシカグサ		●					
218		ヘクソカズラ		●	●	●			
219	リンドウ科	エゾリンドウ			●				
220		ツルリンドウ	●						
221	キョウチクトウ科	スズサイコ			●		VU	NT	
222		シロバナカモメヅル	●	●					
223	ナス科	ワルナスビ				●			帰化種
224	モクセイ科	アオダモ	●						
225		ヤマトアオダモ				●	EN	—	
226	オオバコ科	オオバコ			●				
227	シソ科	ムラサキシキブ	●			●			
228		トウバナ				●			
229		カキドオシ	●		●	●			
230		シロネ		●	●	●			
231		ヒメシロネ			●	●			
232		ヒメジソ			●	●			
233		ウツボグサ			●	●			
234		イヌゴマ			●				
235	ハエドクソウ科	ハエドクソウ	●						
236	タヌキモ科	イヌタヌキモ				●	NT	NT	
237		ホザキノミミカグサ			●		VU	—	
238		ムラサキミミカグサ			●		VU	NT	
239	モチノキ科	ハイイヌツゲ			●	●			
240		ミヤマウメモドク	●						

No.	科	和名	調査箇所				RDBカテゴリー		備考
			Aため池	B湿地	Cため池	D湿地	県	国	
241	キキョウ科	ツリガネニンジン			●		EN	—	
242		ヤマホタルブクロ				●			
243		ツルニンジン	●			●			
244		サワギキョウ				●			
245	ミツガシワ科	ミツガシワ	●	●					
246	キク科	ヨモギ	●		●	●			
247		オトコヨモギ			●				
248		ゴマナ			●	●			
249		ユウガギク			●				
250		ノコンギク			●	●			
251		シラヤマギク			●				
252		アメリカセンダングサ		●	●	●			帰化種※
253		サジガクビソウ	●						
254		ダキバヒメアザミ			●	●			
255		ノアザミ			●	●			
256		ダンドボロギク				●			帰化種
257		ヒメジョオン			●				帰化種※
258		ヨツバヒヨドリ			●				
259		サワヒヨドリ			●	●			
260		オオヒヨドリバナ			●	●			
261		ブタナ			●				帰化種
262		ニガナ			●				
263		シロバナニガナ				●			
264		ハナニガナ			●	●			
265		アキノノゲシ			●				
266		オオニガナ				●			
267		フキ	●		●	●			
268		コウゾリナ			●				
269		アキノキリンソウ	●		●				
270		オヤマボクチ	●						
271	ウコギ科	タラノキ	●	●		●			
272		コシアブラ	●						
273		ヤマウコギ	●						
274		キツタ			●	●			
275		オオチドメ			●	●			
276		ハリギリ	●						
277	セリ科	セントウソウ		●					
278		ドクゼリ		●					
279		ミツバ	●	●					
280		ヤブニンジン				●			
281		ウマノミツバ	●						
282	ガマズミ科	ニワトコ	●			●			
283		ガマズミ	●		●	●			
284		オオカメノキ	●						
285		カンボク	●						
286		ケナシヤブデマリ				●			
287		ミヤマガマズミ	●						
288	スイカズラ科	オトコエシ			●				
289		タニウツギ	●		●	●			
計	289		124	49	159	132			

【植物目録の仕様】

◎科名、和名及び配列は、主に以下によった。

新山形県野生植物目録編集委員会編集(2019).新山形県野生植物目録2019.116pp.フロラ山形

◎凡例

●: 2025年現地調査で確認した種

※: 生態系被害防止外来種

表-2 湖沼・ため池 鳥海山麓湖沼群 動物目録(2025年度)

No.	目	科	和名	調査箇所				RDBカテゴリー		備考
				Aため池	B湿地	Cため池	D湿地	県	国	
昆虫類	1	シリアゲムシ目	シリアゲムシ科	●						
	2	トンボ目	カワトンボ科			●				
	3	トンボ目	モノサシトンボ科	●						
	4	トンボ目	イトトンボ科				●			
	5	トンボ目	イトトンボ科			●				
	6	トンボ目	ヤンマ科			●				
	7	トンボ目	ヤンマ科			●	●			
	8	トンボ目	ヤンマ科			●				
	9	トンボ目	トンボ科	●	●	●	●			
	10	トンボ目	トンボ科			●	●			
	11	トンボ目	トンボ科	●				VU	-	
	12	トンボ目	トンボ科				●			
	13	トンボ目	トンボ科			●				
	14	バッタ目	バッタ科	●		●				
	15	バッタ目	コオロギ科			●				
	16	カマキリ目	カマキリ科			●	●			
	17	カマキリ目	カマキリ科			●				
	18	カメムシ目	アメンボ科			●				
	19	カメムシ目	コオイムシ科				●			
	20	カメムシ目	ツノカメムシ科	●						
	21	コウチュウ目	コガネムシ科				●			
	22	コウチュウ目	ホタル科	●						
	23	コウチュウ目	ハムシ科	●						
	24	コウチュウ目	ハムシ科		●					
	25	コウチュウ目	ハムシ科		●			VU	-	
	26	ハチ目	ハキリバチ科				●			
	27	ハチ目	ミツバチ科				●			
	28	チョウ目	ヤガ科			●				
	29	チョウ目	シャクガ科			●				
	30	チョウ目	アゲハチョウ科			●				
	31	チョウ目	シロチョウ科			●	●			
	32	チョウ目	シジミチョウ科			●				
	33	チョウ目	シジミチョウ科			●	●			
	34	チョウ目	シジミチョウ科			●				
	35	チョウ目	シジミチョウ科			●				
	36	チョウ目	タテハチョウ科			●	●			
	37	チョウ目	タテハチョウ科			●				
	38	チョウ目	タテハチョウ科			●	●	NT	VU	
	39	チョウ目	タテハチョウ科			●				
	40	チョウ目	セセリチョウ科			●	●			
爬虫類	41	有隣目	カナヘビ科			●				
両生類	42	有尾目	イモリ科			●	●	NT	NT	
	43	無尾目	アカガエル科			●	●	NT	-	
	44	無尾目	アオガエル科	●	●	●	●	NT	-	
	45	無尾目	アマガエル科	●	●					
計	45			10	5	26	18			

【動物目録の仕様】

◎目、科の配列は主に以下によった。

大津高編修(2004)山形県陸産淡水産動物目録(改訂版). 358pp, 山形県動物環境調査会, 山形.

◎希少動物については以下によった。

山形県(2019)「レッドデータブックやまがた2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物」. 334pp

◎分類・和名については最新版の書籍を使用した。

◎凡例

●:2025年の現地調査で確認した種

令和 7 年度

自然生態系保全モニタリング調査報告書

令和 8 年 3 月 発行

発行者 / 山形県環境科学研究センター

〒995-0024 山形県村山市楯岡笛田三丁目 2 - 1

資料の無断転載・転用を禁じる



自然環境モニタリング事業
(やまがた緑環境税活用事業)